

信

仰

はじめに

白沢村の神社には、諏訪社と武尊社が圧倒的に多い。現在の白佐波神社（高平）、生枝神社（生枝）、岩室神社（岩室）、諏訪神社（下古語父）などにはみな両社が合祀されている。

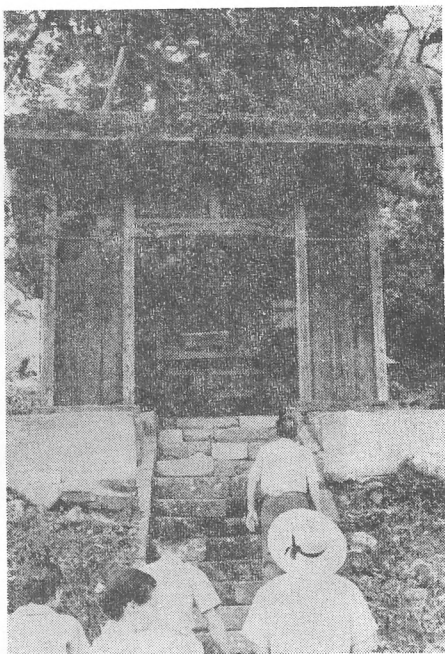


武尊神社の燈籠（延享四年）
（生枝）（阿部孝撮影）

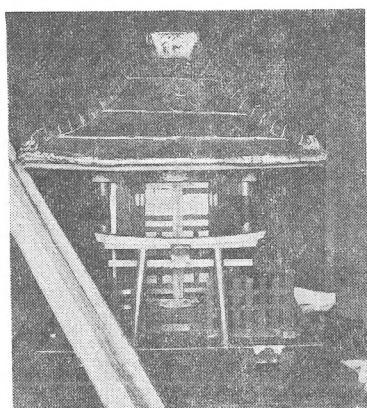
白佐波神社はもと武尊神社と称していたが、明治四十年に村内各所にある百三十余社と合併して改称したと白沢村誌に記されているから、その他の神社もその頃合祀されたものであるろう。

諏訪信仰、武尊信仰は、白沢村だけでなく、この利根郡一帯に顕著である。民俗調査第一集「片品の民俗」、第四集「六合村の民俗」、白沢村誌などを参照されたい。

白沢村誌では、両信仰を信州の諏訪大社、また安曇郡との関係におい



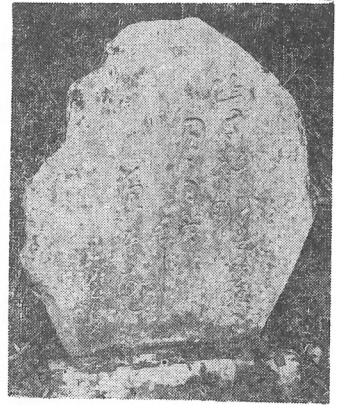
岩室神社 スワ・ホタカ合祠
（近藤義雄撮影）



岩室のみこし
（近藤義雄撮影）

る。」とだけ述べておいて、将来の研究にまちたい。

とらえ、古代海人族との関連を説いている。この説は断り書きしてないが、松岡静雄氏の御説（「紀記論究」など）であり、その説の上に成り立っている。筆者としても興味深い問題であるが、現時点においては、「利根郡に両信仰が顕著であ



岩室神社の芭蕉句碑
山里の月日は長し菊の花

(近藤義雄撮影)

十二様(山の神)祭祀が盛んなのも特徴の一つである。この十二様祭祀は、北上州から西上州一帯(山岳地帯)に盛んであり、一寸した山の峰には小さな石祠に祭られている場合が多い。(今までの調

査報告書を参照されたい。)また、この信仰は新潟の魚沼郡でも盛んである。その他の県は調査したことはないが、十二様という名称の由来や信仰の淵源、範囲など、興味深い問題を含んでいる。

講が盛んであり、中でも庚申講が盛んなのは、今まで調査してきた地域と同様である。そして、やはり信仰としてよりも、娯楽的色彩が濃い。

筆者は、「講が盛んである。」などと、現在形を使用したがるが、事実は全て過去形になおさなければならぬ。「この村でも庚申講だけは、昨年まで行なわれていたが、今年からやめました。」という古老の言に、しみじみと時の推移を感じさせられた。

白沢村誌によると、生枝の観音寺には、役の小角の坐像などがあり、この地方にもかかわらず修験が盛んであったと記されているが、この調査ではあまりでてこなかった。

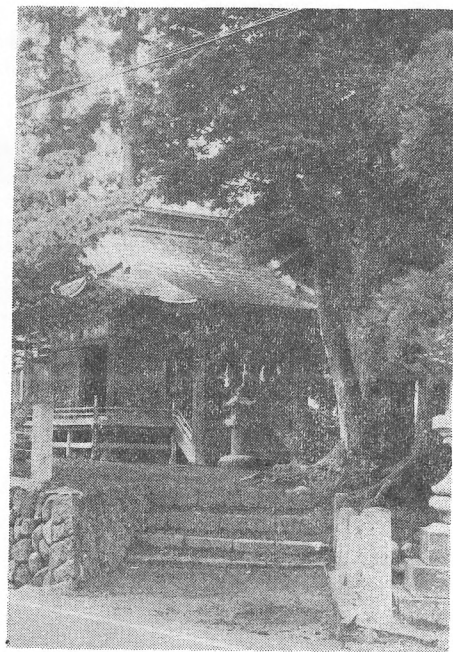
下古語父の諏訪神社には、種々の神仏が合祀されており、よくその状態が保たれているので、諏訪社の項に一括編集とした。(佐藤 清)

一、神社

白佐波神社

「ウツブセノ森」は、もと武尊神社で、日本武尊と新田義宗を祀る。昔、新田義宗が戦いに敗れて落ちて来た時に、右眼をうたれて馬からうつ伏せに倒れた所といわれる。

明治になって各部落の神社を合祀した時に、下古語父の諏訪神社だけ脱けたので、白沢神社としないで白佐波神社と称した。(高平)

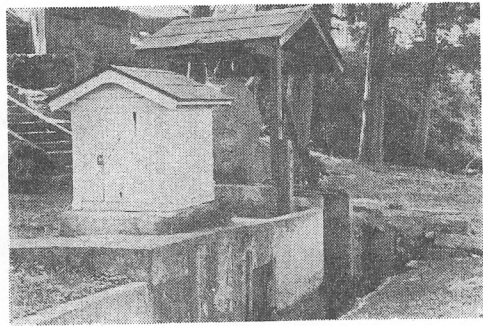


ウツブセノ森の白佐波神社 (高平)

(関口正巳撮影)

神社の下からはきれいな清水がこんこんと湧き出していて、以前はその下に大きい池があり柳があったが、池は田になった。神社の池のドジョウは片目だったという。

清水は今も湧いており、水神様・弁天様が祀られている。村の水道ができるまでは、ここに自家水道を設けて、学校・役場をはじめ近所の二十世帯の水をまかなっていた。(高平)



水神宮 (高平)
「ウツブセノ森」の白佐波神社の境内にある。
清水が湧き出ている。(関口正巳撮影)

をしないで、十一月になると縁組をする。(高平)

三社神社

武尊、葛原親王、諏訪の三社を合せた。春、秋二回に祭る。昔は春は旧暦二月末の日、秋は八月十五日であった。近年は四月十五日と十月一日に行う。村中のお祭り。手づかみ祭りといひ、強飯を投げ、又饅頭を投げる。(尾合)

諏訪様の祭り

以前武尊神社は正眼寺の裏山にあったが、それを諏訪神社の位置に合祀して平出神社とした。平出神社の春祭りは四月三日、壮健が餅米を集める。一戸一升五合とか金とかを集めてこれを赤飯にし、オミゴクとして参拝者に配る。秋祭りは十月一日が正式だが、五日ごろになる。村内から、壮健がオサイセンを集める。菓子を買って配る。(平出)

イナリ神社

初午の日は塩ノ井のイナリ神社の祭典で、村の人がお祭りに行く。福

神おくりと神むかえ

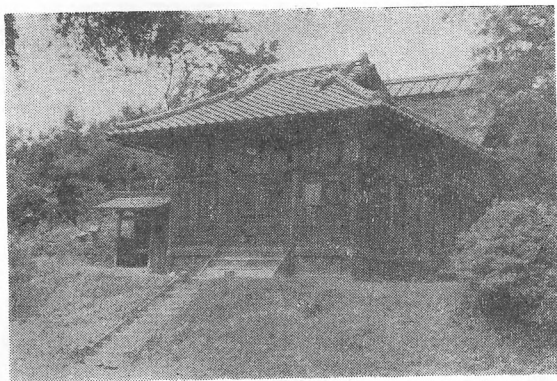
旧十月一日の朝早く、うつぶせの森(鎮守の森)へ神さまをおくって行く。(神おくり)

旧十月三十日の朝早く、鎮守の森へ神さまをむかえに行く。(神むかえ)

この間、神さまは留守になるが、留守番をエビスさまがしている。そのためにエビス講をするという。

神さまのいない十月は縁組

引きを出したりしてにぎやかにやった。現在もやっているが、初午が丙午ならばこのウマの日にする。丙午は火早いという。(上古)



諏訪神社本殿 (青木則子撮影)

神社の項に収めた。(下古)

二、家及び屋敷にいる神

1 屋内に祀る神

家の中にいる神は、つぎの通り。

神棚に天照皇太神宮さま、金比羅さま、オシラサマ(女の神でかいこの神さま)だるまさまがまつてある。だるまさまは、仏さまだが神棚にあげておく。むかしから高崎の少林山の方から売りにくる。

諏訪神社

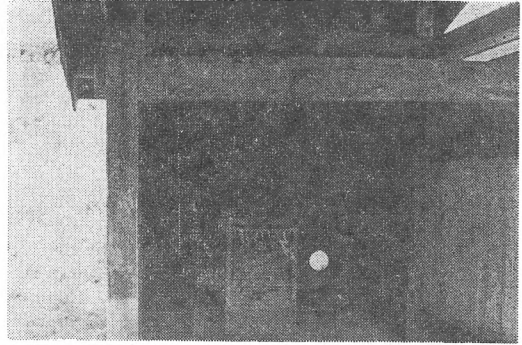
諏訪神社には、以下の写真で分るように、種々な神や石仏が合祀されている。本殿に向って右側には稲荷神社があり、左側には小さな石の祠が数多くある。舞台(地神宮の写真にその一部がみえる。)の下の石段の両脇に、天王宮と地神宮があり、天王宮の側の平地には、庚申塔薬師道祖神などが数多く合祀されている。

「はじめに」のところでも触れたように、合祀の形態がよく分るので、神仏分離せず、諏訪

諏訪神社境内 (下古) (青木則子撮影)



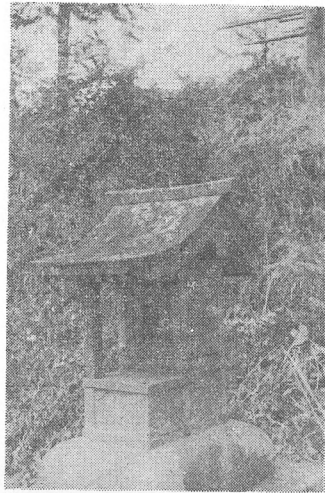
庚 神 塔



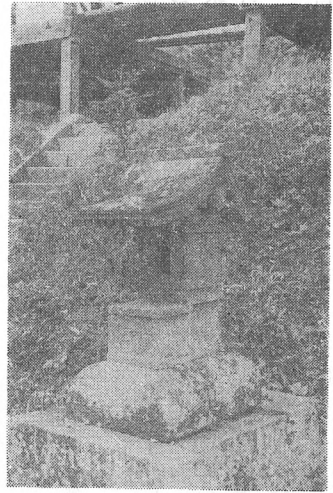
稲荷様 (裏の穴から稲荷が入り出すといわれている)



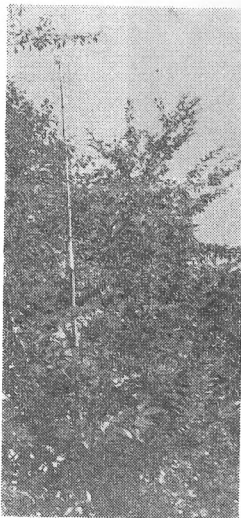
道 祖 神



地 神 宮



天 王 宮



風 祭



地 蔵 様



葉 師



道 祖 神

恵比寿大黒はべつの棚をつくっておまつりしている。お札が年に二度沼田からくる。金もうけの神である。

三宝荒神さまもべつの棚をつくっておまつりしている。カマド神である。

オソウゼンさまはうまやにまつつてある。うまの神さまである。

(高平)

そうぜんまつり

馬を買ってきたときに、目をえらんで祝った。このときには世話になった馬喰をよんだ。馬喰の人が祝詞をあげ、酒やごちそうで祝った。

(高平)

正月だな

○歳徳神

○大神宮

○荒神さま

歳徳神はおすがたが女のような。お正月さまは区長さんを通じて配られるが、一一〇戸中八〇戸ほどが毎年お札をうけている。

オシラサマ

神だなにあるとみられている。そこになくつてもあるとして正月におまつりをする。十六メエダマなどがそれにあたる。(上古)

カマ神さま(荒神さま)

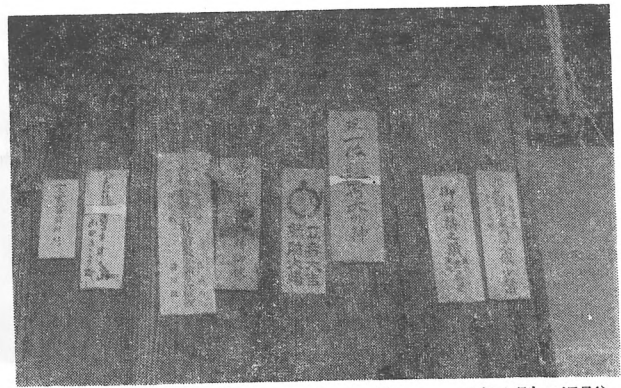
へっすいのところまつる。

水神さま

お勝手のところにまつる。(上古)

えびすだいく

だいくさんは、茶の間の方に上げちゃうと銭ぜにがたまらねえのでデエドコ(台所)の方におく。デエドコならばたらきに行くのにも好都合だから。



トボグチのお札(下古)

(青木則子撮影)

別の家ではお勝手の大きな戸だなの中に入れておき、えびす講のときだけ出す。(上古)

くらがみさま

どういふ神さまか知らないが、蔵の中にまつつてあり、お正月のときには、オシメとお供えをもって行って供えている。

(上古)

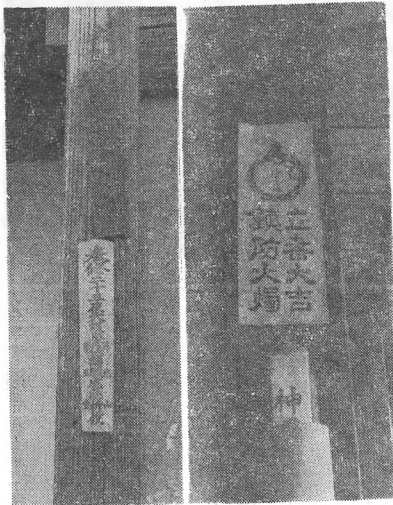
カンノンサマ

うまがみさまのことをカンノンサマといい、オソーデンサマという名では聞いたことがない。うまやの入口にまつた。

(上古)

オヒガミサマ

オヒガミサマは便所神、子供



トボグチのお札(下古)(青木則子撮影)

が生まれて三日目にオヒガマイイリをする。このとき、橋を渡らないで三軒の家の便所まいをした。(高平)

お便所の神さまで、赤ん坊が生れてお七夜になると、赤ん坊のひたいに「犬」という字を書いてお参りする。(上古)

(馬屋や便所が家の外にあれば、それ等の神は屋敷に祀られる神となる。)

2 屋敷内に祀る神

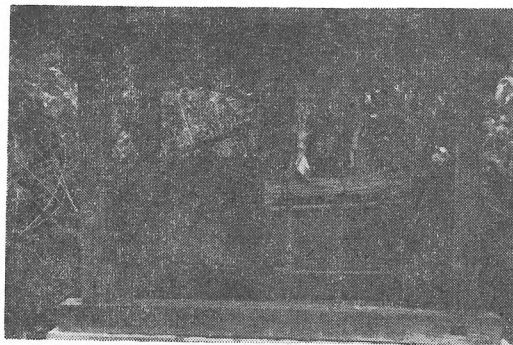
各家には屋敷稲荷がまつてあるが、このほかに、屋敷内にまつてある神は、庭のコンジンサマ、外便所のオヒガミサマ・井戸神・猿田彦(三隣亡よけ)である。ほかに、ケエニワ(堆肥場)にお正月のときにおしめをかざる。(高平)

屋敷稲荷

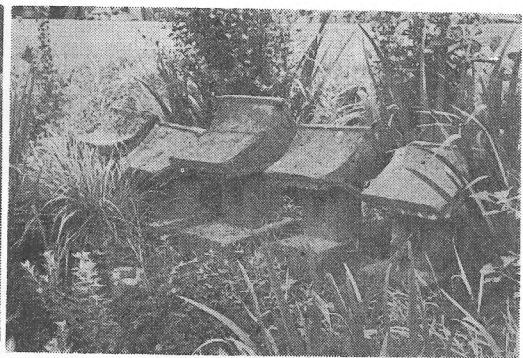
各家には屋敷稲荷がまつてある。屋敷のウシトラのすみにまつている。家はつぶれても、稲荷さまはそのまま残しておくものであるという。また、古屋敷を買いとった人はその稲荷さまをそのまままつるものだという。



屋敷稲荷 (高平) 角田鶴寿家
(井田安雄撮影)



屋敷稲荷 (ナラの木・クリの木を使用)
(生枝) (阿部孝撮影)



屋敷稲荷 樋口玉之助家
(井田安雄撮影)

稲荷さまに日をあてるなどいうことばがある。これは、家をつぶす(身上を傾けること)などいうこと。

高平の樋口玉之助さんの屋敷稲荷は、夜泣きをとめるというので近所の人たちの信仰があつく、よくおまいりに来た。

(高平)

屋敷いなりはどんな願いごとでもよくきいた。願果しにはとうふの隅々を切つて「スミドウフ」として上げた。(生枝)

屋敷の東北の境に、南または東向きに向いてまつられており、鬼門除けに祀っている。屋敷を守り、家族を守る神さまで、名は忘れたが三つの神さまを祀ったといい、白狐は主神ではなくて、神のお使いだといわれた。

(上古)

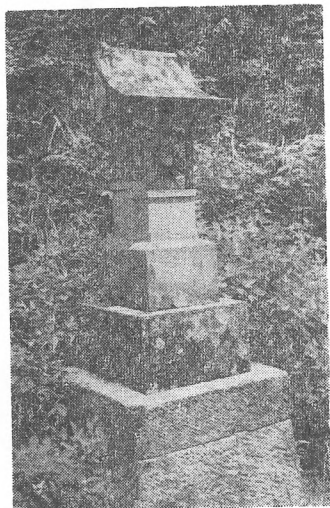
三、産 業 神

1、養蚕の神

こかげさん

かいこ神さまはこかげさん、初午のときにおかいこのまつりをした。これをおしらびまちという。このときは、米の粉をひいておまえだまをつくった。この日は赤飯をふかしたり、うどんをつくったりした。この日の行事は、まゆかきをかたどつてのまつり、かいこの中心は女衆だから女衆のおいおいのようなものであった。おまえだまの中に小豆を入れる家もある。これはさなぎを意味している。この日、おまえだまを家へ来る人来る人に出すほど縁起がよいといわれている。(高平)

蚕をはく前には、戸鹿野の東源寺に蚕の神様があり、お札を受けたりその桑の葉を持ち帰り、蚕に与えるときよくとれるとされたとされた。(生枝)

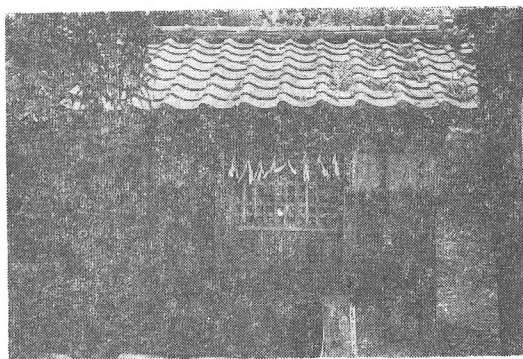


蚕影山(元治元年)
(生枝)(阿部孝撮影)

二月の初午に川原にある蚕影さんをまつた。この日は各戸で豆腐田楽をつくり、養蚕に手伝ってくれる人などを招いて夜半まで酒をのんで祝った。また奉納蚕影大明神と書いた旗をお詣りのとき持っていった。

区では、区長が酒一升買つて奉納し、参詣人の御神酒とした。この日壮健と呼ばれる若者達が春駒をふった。この若者の駒は、毎戸廻つていくと、家々では賽銭をあげた。春駒の頭は区で保存。(岩室)

蚕影様 河原とごでいはばにある。二月の初午に祭る。こわめしを上る。(尾合)



蚕影神社(平出)
(都丸九十一撮影)

コカゲサン(蚕影神社)の祭りは四月二十三日。秋は十月五日に平出神社といつしよにする。壮健が村内各戸から一戸当り五品ぐらいだしてもらい、これを参拝者に福引としてひかせる。養蚕組合では、宴会をする(平出)

戸鹿野の稲荷様(養蚕信仰) 戸鹿野のお寺にある稲荷様に、春蚕の掃立前にお参りにいった。この日は、近所の女衆が連れ立って出かけ、お白狐をか



蚕影様(下古)
(青木則子撮影)



猫守り猫 (下古)
(青木則子撮影)

りてきた。これは翌年なしにいくがそのときまた新しいのを借りてくる。その際お賽銭をあげた。この一日は女衆のたのしみであり、春さきのツノモガシ(女衆が羽のばして楽しむこと)の日だという。(岩室)

養蚕信仰

迦葉山 天狗の面をかりてくる。
古峰ヶ原 砂川——鷹之巢——大洞——水沼——足尾の道順で一晩泊りであった。朝祈禱をあげてもらったお札をうけて帰る。
赤城神社 赤城山頂大洞の赤城神社へ四月八日に登った。(岩室)

2、山の神(十二様、十二講)

十二様

山かせぎをする人は、十二さまをまつた。山かせぎを始終やっている人は毎月十二日に十二さまをまつた。十二日には山へ入らなかつた。高平では、村で十二さまをまつた。高平にはヤジウニ(八十二)といつて、八つの十二さまがある。区長が主体となつて、春(二月十二日)秋(八月十二日)の二回まつっている。この日は、神主をたのんで公益社の事務所で区の役員と公益社の役員があつまつて、おまつりし

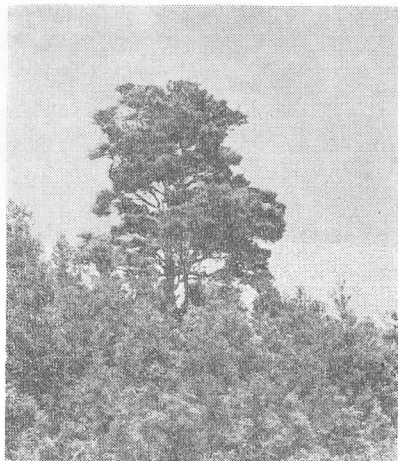
た。各戸へお札をくぼつた。

山へ入つてわるい日は、月の十二日と、祇園の次の日(七月二十四日)、二十四日に山に入ると、へび・まむしにかまれるという。

もとが一本で先へ行って三つ又になっている木は、十二さまの木だからきるという。また、枝が銚子のようになっていのは、ちょうし口といつて、天狗さまがいるから切るなという。

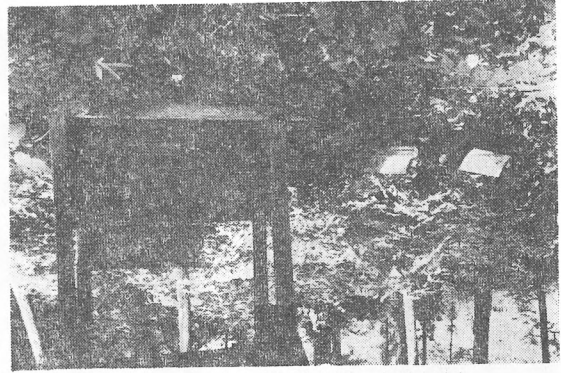
鉄砲ぶち専門の人もいた。きじ・やまどり・うさぎなどをとつていた。この人たちも、十二さまをまつっていた。

十二講は山仕事専門の人たちがやった。(高平)



銚子口の松 (高平)
十二様の木、天狗様の休み木
(関口正巳撮影)

高平の上方の山の上に、「銚子口の松」という、目通り二・一一mの太い松があり、下から一・三mの所に太い枝が南の方へ突き出している。この枝が銚子の口に似ているので名付けられたらしい。神様の宿る木、天狗様が休む木といわれ、誰も嫌がって伐らない。(高平)
岩室の十二様。願をかけるときは塩を供えた。商売をしている人たちは俵で上げた。(生枝)



夏保十二山神社（寛延元年、文政三年）

（生枝）（阿部孝撮影）

た。また、以前は福引も出した。景品は各戸五点宛寄附してもらい、祭典組の世話で引かせた。各戸から集るものは、もとはゾウリ・マナバ

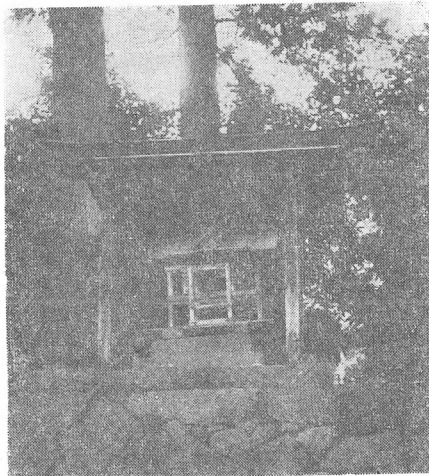
四月十二日にまつる。鎮守の祭りと同様に、祭世話人が米を集めて赤飯をあげる。参詣人は、十二様は塩が大変すきだといので塩を奉納する。大病した人など俵であげる。ので、多い年は部落中一年間の塩が足りたともいう。最近では毎戸二合から五合位もらう。もとは塩桶が供えてあった。この塩を漬物に用いると味が変らないなどともいった。戦時中は息子が無事に帰るようにと一俵あげた人もいた。



岩室の十二様

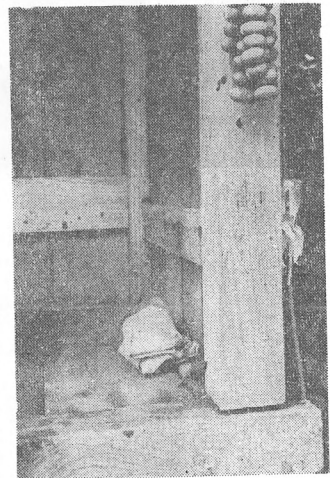
（近藤義雄撮影）

シ・フキ竹など自家製品が多かった。次第に日用品を買って出す人が多くなった。他村の子供や老人までも引きにきた。この晩オコモリもした。青年など集って、時には他村のものもきてお籠りし、トウムギなど焼いて食べたものである。今でも三間四間のお籠り堂がある。（岩室）
上、下の尾合別々。これに村は関与しない。（尾合）
高平へ行く途中にある十二様は、今は御幣束を持って行くくらいで



岩室十二様
塩がお供えしてあつた

（近藤義雄撮影）



岩室の十二様
塩が奉納されてある（右下の包）

（近藤義雄撮影）



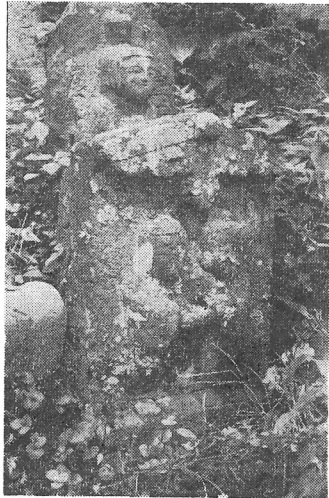
道 祖 神 (生枝)
(阿部孝撮影)



二荒山大権現参道にある道祖神
寛延元年建立 (上古)
オガンシヨバタシにみそをぬり
つける (阪本英一撮影)



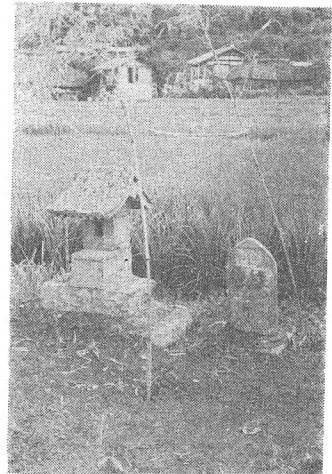
天王さんの隣りにあつた道祖神
(塩ノ井) 大きな手が特色
(阪本英一撮影)



天王さんと道祖神 (塩ノ井)
(阪本英一撮影)



墓地の中にあつた (塩ノ井)
合掌型なので移しこんだ
(阪本英一撮影)



道祖神 (宝歴九年) (生枝)
(阿部孝撮影)

中村氏 熊野皇太神宮 (中村卓郎
氏の屋敷内にある)
岡村氏 羽黒権現
松井氏 大神宮様 (岩室)
どうろくじんさま
どうろくじんさまは、兄妹で一緒
に石に刻みつけられている。そのい
われはこうだ。

氏 神

寺組 こんびら様 (生枝)

各組の信仰

北組 ほたか様

中組 すわ様

下組 はちまん様

上組 あたご様

四、その他の信仰

山の神で女の神様。二月と八月の
十二日祭る。その日は山へ入っては
ならない。山へ入るとケガをした
り、たたりがある。(下古)

何もしないが、昔は祭日にオミゴク
に、米と粟の赤飯をくれた。
(平出)
棟上げのときなどに屋根に祀るの
が山の神だという。(上古)

二人がそれぞれ結婚の相手を求めて旅に出た。どこを歩いても自分のかかあにしたいもの、だんなにしたいものがみつからなかった。二人は「さんざあるいても、自分のかかあにしたいものはねえ」「さんざあるいてもだんなさまにしてえものはねえ」といって、しまいには、兄妹で夫婦になって、あのように、石と一緒に刻まれているのだという。

(高平)

道祖神

うぶすなさまの日光さま入口の道ばたにある道祖神は、虫歯・みみだれ・ヤンメ(はやり目)直しにオガンシヨをかけにゆく。オガンシヨバタシには、道祖神の顔にミンをぬってやる。(上古)

ワタゴサマ

ワタゴサマ(愛宕さま)は、火事ときには白馬に乗ってきて、火を消すために屋根のぐしをとびあるいたという。(高平)

アタゴサマ

三月二十一日がイマミヤのアタゴサマのお祭り、昔は七人ぐらいて講があつて、個人ではおこわやうどんでそれぞれお祭りをし、祭り世話の人が別にいて社のそうじをしたり、オミゴク・オミアカリを上げた。宵にアタゴ待ちをした。

最近はお祭り世話も村全体の祭り世話人といっしょになり、谷中が合併してお祭りをするようになると、その日に社でお祭りをし、その晩アタゴ待ちをしている。火伏せの神さまである。(上古)

石尊さん

雨乞山のこちらに石尊びらというところがあり、峯にきれいな石宮がある。

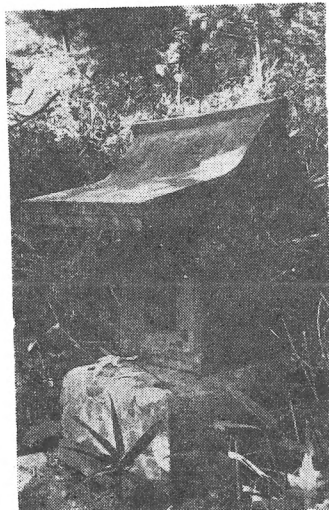
四月上旬、十日ごろがお祭りで、酒二升と精進料理でお祭りをし、何かオミゴクがあつた。

明治中ごろには、ここでも雨乞いをしたという。

夜なきのまじないにもいい。(上古)

水神様

石宮、鍛冶谷戸にある。祭はない。(尾合)



勝坂水神宮(天明五年)(生枝)
(阿部孝撮影)

八海山

四十年前ごろまでは、八月一日の夜、高い竹ざおの先に、灯りをつけたチョウチンをつけて立て、この火が八海山までとどくののだといつて、火伏せの神さまの八海山をお祭りした。今はしない。

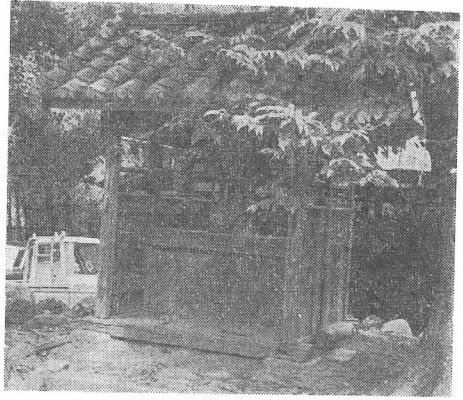
講はなかったが、今でも個人で行く人がたまにはいる。八海山は、八月一日の日にお灯りを上げたりするが、行く人は殆んどいない。きわめて剣山だといふ。(上古)

カシヨウ(迦葉)山参り

五月八日に村中の七、八分の家の人がカシヨウ参りにゆく。お蚕の祈願にゆくもので、おてんぐさんの面を借りてくる人もいる。カシヨウザンに行かない人は赤城などに行くようで、戸鹿野のトウゲ寺のイナリサンにお参りに行っておすがたを借りて来る人もいる。どちらも二倍にして返す。(上古)

ホタカ(武尊)参り

ホタカは、一生のうち一度は行くものとしてゆくが、二度とは行かな



天神様（下古）（青木則子撮影）

い。悪い道の剣山で、日帰りは楽ではない。花咲とこちらとで上げた二つの金仏さまが上っている。（上古）

風まつり

二百十日が無事すんだときには、各家で風まつりをやった。

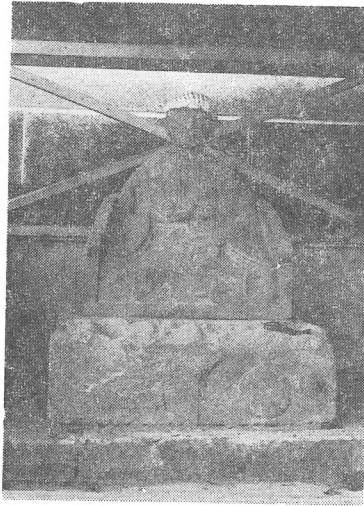
（高平）

春祈禱

節分のあと、春祈禱をする。このとき神主に来てもらって、稲荷さまにしめなわをつくっ

て、はってもらい、おがんでもらう。このときへいそくをたてるのは、水神さま、荒神さま、おしらさまをはじめ神棚など、家の内外の神さま。（高平）

大正初期は、高巢から、中期には上沼須から、現在は観音寺の住職が毎春、春ぎとうをしてくれた。大正時代は順番に廻り、不就、仏滅の日



弘法様（明治九年）
（弘法清水の弘法様といわれてる）
（生枝）（阿部孝撮影）

以外はかまわずに行なった。

寺の前に弘法清水が出ており、弘法大師を祭ってあった。現在は移転してある。（生枝）

百社参り・千社参り

戦前、出征兵士の無事を祈るとか、重病人の平癒を祈って、百社とか千社まいをした。出征兵士の場合には村中から出、病人の場合には近親者が出て、手わけして札を各社にはってきた。終戦後はやらなくなった。（高平）

部落としての願いごとのとき手分けして他町村まで出かけ「千社札」を神社や屋敷いなりにはった。屋敷いなりにはるときは、その家の人に「いなり様をかして下さい」といって断ってからはった。（生枝）

病人がわるくなると組の人が、千社へ御詣りしてたのんで歩く、家々の稲荷様を借りるが、之もなかなか大変であった。

この様な祈願をする様な病人は大がい助からなかった。（尾合）

三隣亡

三隣亡をまつって近所にもちをくばると、隣三軒の財産がうちへくるという。むかしはこういうことがあった。三隣亡よけには、猿田彦の碑を屋敷うちに建てた。（高平）

修験

関ヶ原の戦い後この地に住みついた修験者があった。一音寺と称し、春祈禱、虫封じなど各種の祈禱をしてくれた。明治になり、亭昇という人の代に木暮姓にかえた。（岩室）

五、仏教関係

首なし観音

観音寺の先代の尼さんがある年の正月十一日夜大原部落に行った帰り

勝坂峠を越えて来たところ首を切られ殺されたので供養のために地蔵様を立てたという。この地蔵様ははじめから首がないともいわれ、首なし観音といわれていた。

二代前の住職が追貝の葬式の晩、ここを通ったら女の姿をして現われたので葬式の引物を供え念仏を上げたところ消えたといわれる。

馬頭観世音、二十一夜待供養、享保十年、講中十八人とある。(生枝)



首なし観音
(馬頭観世音、二十一夜待供養)
享保十年
(生枝) (阿部孝撮影)

観音和讃 (道成寺調)

○帰命頂らい観世音
昔は正法妙如来

未来は光明功德仏
十だいがんのうみ深く

○今この娑婆に示現して
生きとし生ける者の為
大慈大悲の手をのべて
種々に濟度をなし給ふ

○たとえはようずの水すみて
一つの月のうつること
感応靈験あらたなり



岩室百番観音
安政三年十二月大吉日
信州伊奈高造石工
中村卓郎の先祖建立
(近藤義雄撮影)

聞くに法華の普門品

○三十三に身を分けて

十九の説法ありがたく

七難三毒消滅し

二求兩願も成就せり

○もし人現世は安穩に

後生も善処と思ひなば

常々菩薩を念ずべし

念彼観音のその力

○いかなる障りも除くなり

無量の福德あつまりて

春のあしたに鳴く鳥も

秋の夕の虫の音も

○畢竟梵音海潮音

きく声悟道の法の声

げにや仰ぐもおろかなり

さて又行者の臨終は

○蓮のうてなをささげきて

随願往生遂げしめり

これこの菩薩を信ぜずば

渡りに船を忌むならん

○然れば貴きも賤しきも

童男童女にいたるまで

念々うたがふ心なく

実に頂礼いたすべし

○南無大慈観世音

南無や大悲の観世音

虚空蔵様 川場の虚空蔵様は縁結びの神様で夜お参りするとされてい

た。(生枝)

不動様 生方伊雄の裏、滝の上にある。二月二十八日に祭る。上組の

三班、おこわを作る。(尾合)

薬師様 村の春祭りといっしょにして、オミゴクを出す。(平出)

弁天様 春祭りがあったが、今は何もしない。片品河畔にある。(平出)

六、講

庚申講

庚申講は、村内に講組が何組もあつてさかんであつたようだ。六、七軒で一組をつくり、宿を順にきめて、ごちそうをつくつて会食した。むかしは各自小麦粉を一升ずつもちよせて、うどんをして食べた。庚申さまは百姓の神さまで、物がよくとれるようにとおねがひした。

庚申さまは百姓の神さま、穀の神さまである。

庚申まつりはおもに冬した。一人が小麦粉を一升ずつもちよつて、うどんをつくつて食べた。(高平)

庚申祭り

七軒から一升ずつ米を持ち寄つてご飯をたき、七人で七升を食べてしまふ。残してはいけない。(高平)



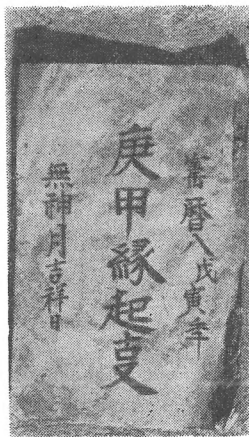
雲谷寺の山門にある庚申塔(五層)
(高平) (関口正巳撮影)

庚申待

冬至前の申の日に、庚申組みの人が集つてまつた。共同の膳碗もあり、願はクジできめた。この晩は大喰いをするのがならわしで、十分食事したあと更に「オトメ」といつて、相談の上あと何杯をオトメにするかきめて食べた。多く食べるとそれだけ農作物がとれるという。(岩室)

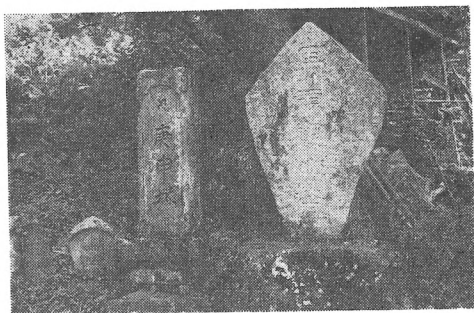
庚申待は、ここでは覚えにないという。(尾合)

南無阿弥陀仏

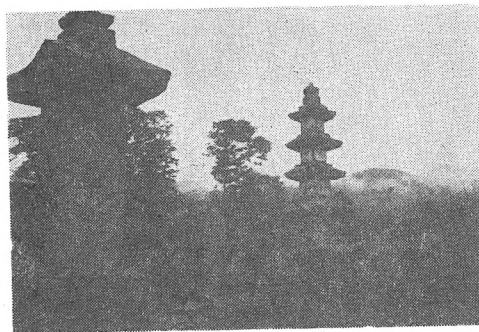


庚申縁起
岩室一音寺所蔵
(近藤義雄撮影)

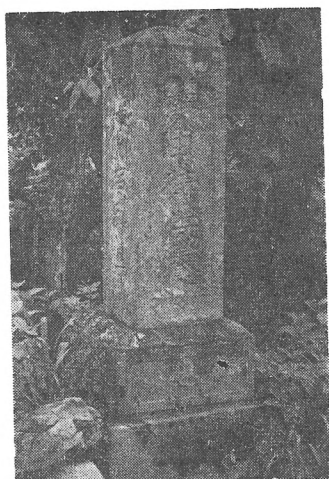
弥陀仏
千時万治二己亥
なお、この塔身の上
部の方から、月、日
と思われる彫刻があ
る。(平出神社)



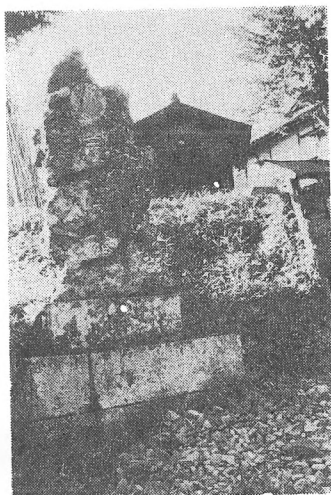
庚申塔（高平）雲谷寺境内
（井田安雄撮影）



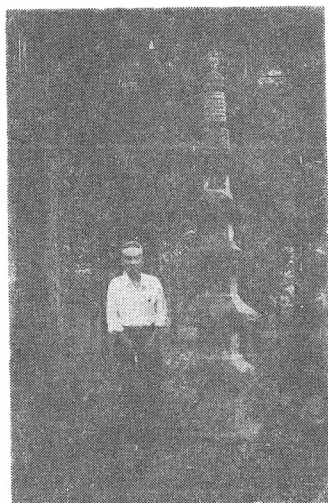
庚申塔（寛政十二年）
馬頭観音（嘉永五年）
（生枝）（阿部孝撮影）



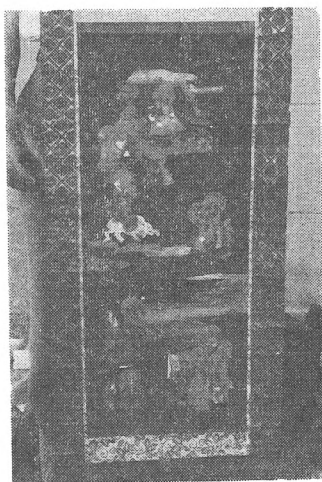
庚申塔（平出）
（都九十九一撮影）



岩室神社境内 安永三年甲午
庚申塔施主岩室村中
十月吉祥日
（近藤義雄撮影）



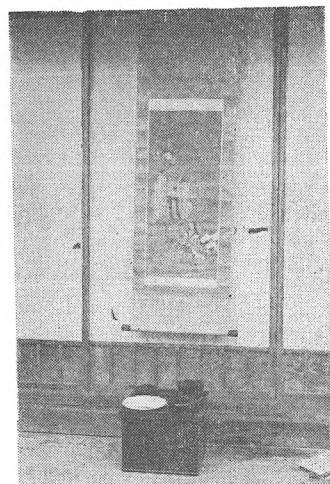
庚申侍供養（塩ノ井）
元文五年申歳十月吉祥日
（阪本英一撮影）



庚申講の掛軸とお膳（下古）
（上野勇撮影）



庚申講の掛軸（下古）
（上野勇撮影）



庚申の神さま（上古）
（阪本英一撮影）

庚申講

五、六人で講をつくり、一月おきの庚申の日に講をもつ。当番の家はくじできめて、一人前一升の粉で、うどん、そばが主な料理になり、酒は出さない。

庚申のカケジをかけ、灯明と線香をたてて拜んで始めるが、最初に碗でミツケ、休んでまたミツケ、更に休んでオトメというのを食べる。オトメは残ったものを割当てるもので五ツケぐらいのときが多い。どんなにおそくなくても十二時前に食わねばならないという。

このオトメを食べるときが苦しかったが、お庚申で体をこわした人はいない。あるとき親が行けないので子どもをやった人がいたが、お庚申はオトメのときにうんと食わねばならないのだから、最初は腹がいっぱいだから食えないといって断わっておかないと大変だと教えられてきたその子は、教え通り守って少ししか食えなかったが、オトメになっても子どもはかわいそうだからというので割当は来なかった。腹の空いた子は泣いて帰って来たという。

百姓の話が多かった。(上古)

下古に三組あったが、去年(昭和四十二年)の冬至前の講を最後にやめた。

春二回、八月二回、秋(冬至前)二回で、年六回行う。

輪番で宿の家で全部をまかなう。掛軸をかけ、庚申様の膳をつかう。

うどんを一人一升(十二玉)ずつつくり、どんなに時間をかけても良から、必ず全部食べることになっている。その晩は必ず家に帰る。

オトメ。最後に仲間同志で行う。

とうふ汁・おひら・里いも・ケンチョン汁などを食べる。(下古)

二十二夜待

秋、女衆がまつった。三十様が上がるまで飲んだり食べたりし、念仏

なども唱えた。お産の仏様である。(岩室)

オサンヤサマ

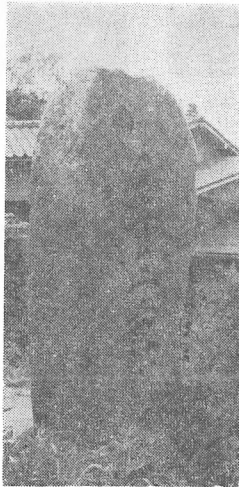
旧の二十三日はオサンヤサマの日で、坊さんにおがんでもらった。この日は、小豆げえ(あずきがゆ)をにることが例であった。オサンヤサマを信仰すると、小づかい銭に困らないといわれた。現在オサンヤサマはしていない。(高平)

二十一、二、三夜講(待)



二十一夜塔(高平)

天保十五年の銘
以前は男が二十一夜、女が二十三夜をしたらしい
(関口正巳撮影)



二十二夜塔(高平)

明治三十年九月二十三日の銘

(関口正巳撮影)

三夜講は女衆の講、三夜まちのときには、三夜塔のところへおまいりに行った。この日寺では福引をして人寄せをした。(高平)

三夜様(二十三夜様)の念仏を覚えていて、高平の実相院にある二十三夜様にお参りをし、念仏を唱えると小遣いに困らないとされ、毎月二十三日には多くの人が行った。昭和初期まで続いた。(生枝)

三夜待、これは毎月やった。小豆粥を作り、三夜様の上のを待った。男だけでやった。(尾合)

女の人の二十三夜まちは、庚申よりは早くすむ。

宿に集まって、あずきがゆをつくって食べる。月が出るまでは宿でナワをない、このナワが二十三夜講のもとになったり、ヘソクリになったりする。(上古)

三夜講

女性中心の講で戦前まで行っていた。宿は輪番で、沼田のお三夜様へ代参者をたてた。(下古)



二十三夜様(平出)
(都丸九十一撮影)

天神講

天神まつりは、現在でも子供会でやっている。これは高平全体でなく上組の方のものだけ。子供たちは村内を寄付あつめにまわる。天神まつりをする、馬鹿も利口になるといわれている。(高平)

天神待

小学校の上学年(もとは高等科)が頭で、米二合と醬油を持寄り、それに若干のお金を出して、醬油飯をつくって食べた。このとき手習いをして奉納したりしたが、夕食後、試験会などもよくやった。(岩室)

二月二十五日に、米一合位もちよって子供がやった。小豆めしとか、

醬油めしとか作った。ここでは書き物などしない。また宿らない。(尾合)

伊勢講

伊勢参り 「一日十里づめ」といい、一日に十里ずつ歩くのは苦しかった。参拝の時、はいたわらじを持ち帰ると、それを近所の人たちは拜んだ。出発のときは、立ちぶるまいをし、帰ったときも祝った。明治初期までのこと。土産に時計を買って来た(大正のはじめ)(生枝)

増田家の先祖は、二十数年間続けて、暮に出発して元旦に伊勢神宮に参拝することを続けたという。

そうして久保組の鎮守さんの二荒さまと並んでいる神明宮をたて、五町歩の山林を社有地としてつけて村に寄進した。この山林は現在数戸の管理になっている。(上古)

参宮講 日清戦争の頃から始まった。伊勢参宮を順にするための講で掛金して毎年二十円位で二人ずつ当っては参宮して来た。(尾合)

伊勢講 村の中に講が一定してあったわけでないが、五、六人組んで出かけ、出立のときは村はずれまで村中の人が見送りに出、お仮殿などにつくらなかったが、家の人は、日程をみて「フナミマチ」(舟見待)と称しオタキアゲをして夜あかしして無事を祈った。

帰ってくるときは甘酒を出し、お土産は全戸に配った。(岩室)

その他の講

観音講 この人たちは、馬の背で荷物をはこんでいたので、観音講があった。この日は駄賃つけの人たちが宿によって飲みくいをした。一種の口まつりであった。(高平)

太子講 太子講は白沢村の木工職の人たちがあつまってやっている。(高平)

念仏講 念仏講はむかしさかんであったが、今はない。(高平)

三峰講 これは沼田の三峯様。五人で組で行った。(尾合)

榛名講 これは代参が行って御札をもらってきた。(尾合)
少林山講 冬至講とも言った。(尾合)

少林山 上岡(埼玉県の馬頭観音さん)榛名山・伊勢参り・琴平さん
富士山・高尾山・三峰山などの講があった。善光寺参りは講よりも個人で行った。

榛名講 二晩どまりで行って来た。

コミネサン 古峰山は講があつて、一般の人も今も行っている。日光へは昔は行かなかったが最近は行くようになった。

富士講 佐貫先達のような熱心な人がいた。(上古)

今は講は全然ない。むかし、古峯・榛名・一宮・少林山・神岡・古峯が原・迦葉山・沼田の西の宮などがあつた。特別な伝承はない。(平出)
講および社寺詣で少林山達磨寺・古峰原・榛名神社・高尾山・八海山
迦葉山(岩室)

七、俗 信

禁 忌

うまや小屋はふだん、はいてはならない。馬が死んだときに、うまやの中を竹ぼうきではけという。

屋敷うちへ、さんしょうの木をうえてはいけない。

母屋より物置を高くしてはいけない。

茶わんをたたくな、オサキがくるといふ。(高平)

夕方塩を買うときは、なみのはなという。(生枝)

山へ入っては悪い日、二月八日、十二月八日、また毎月の十二日、これ等の日に山で仕事をすると怪我をする。(平出)

もずをとると、親が死んだり、子どもが死んだりしてよくないことがおこる。(上古)

せきれいをとると火事になる。(上古)

呪

神仏の塔に小石をあげると、旅に出て無事にかえることができ、またつかれをいやすことができるといった。

近所に火が出たときには、屋敷稲荷の屋根に水をかけると火災よけになるといった。(高平)

火伏せ、正月元日の朝、一枚の紙に「正月一日水」と七通り書いて戸袋にはる。(岩室)

正月一日水	正月一日水
正月一日水	正月一日水
正月一日水	正月一日水
正月一日水	正月一日水

ほうそう神

子供にほうそうをうえると、オガラでほうそうだなをつくって、赤い紙をつけてほうそう神とて、三本辻までおくつていった。近かしい人などが、ほうそう見舞として、お菓子を買ってきてくれた。(高平)

疫病よけ

村の上と下にしめなわをはって、わらじをさげた。(八丁じめ)これは伝染病がはやったときに、村の幹部が出て、村はずれの道にはったもので、数十年前のことである。(高平)

一 升 願

体の工合の悪い人(病人)のある時に、十人に頼んで、一人一升の粉でうどんを作って食べて貰う。

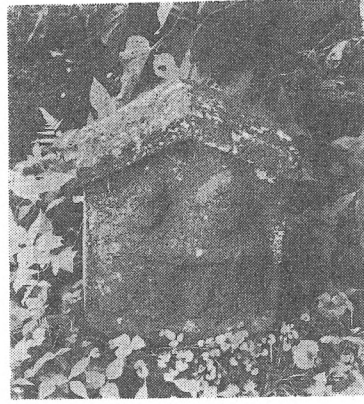
これは実際やった人の話に、この依頼をうけたら大災難で、粉を一升をいっても軽くゆっくりゆすり乍ら計って、それで作るのだが、一升はとてまたべられず苦しいものだという。(尾合)

お百度など

戦前のことであるが、重病人が出ると、神社にお百度まいりをした。こよりを百本つくっておいて、まわる度に、こよりをぬいて回数を書いた。

目の神さまは堂改戸にある立薬師。ここへ年の数だけめの字を紙に書いてあげる。

目かごの時、すいのおを井戸に半分うつして「治せば全部見せる」といいおくとよく治るが、願果しをしないと不思議に出来た。(生枝)



道祖神
耳だれの願をかける (高平)
(関口正巳撮影)

つるしておく、おたふくかぜにならない。(高平)

乳が張ってきて困るときは、一升ますに灰を盛り、乳ぶさを押しつけて乳ぶさのあとを作り、それを川へ持って行き「ぜひちるるように、流れるように」と唱えて流すと治る。

北向の地藏様に頭と胸の病気の時願をかけた。虫歯のときは、大豆をいって、三粒を紙に包み、地藏様の下を掘って埋め、この豆の生えるまで痛みを止めて下さいと願う。風邪のときは、小豆がゆを上げる。(生枝)

七月二十三日の祇園の時、みこしに願をかけるとはやり病気にならな

い。(生枝)

六算よけのためには、豆腐を屋敷稲荷にあげて川へながせばよい。(高平)



北向地藏
(火防將軍地藏尊)
(生枝) (阿部孝撮影)



カルカネ地藏のかわり地藏
百番供養塔 (寛政十二年)
(生枝) (阿部孝撮影)



地藏尊 (塩ノ井)
享保十四年惣村中
(阪本英一撮影)

六三にあたる病気の時は、屋敷いなりに三色のはっかの菓子を上げて願をする。(生枝)

雨乞い・天気まつり

雨が久しい間ふらないときには、赤城の大洞へ行って、赤城神社から水をもらって来て雨乞いをした。それでもまだ雨がふらないときには、榛名神社まで雨乞いに行つて来たという。

雨がふりつづいて困ったときには、天気まつりといって、村の事務所へ村の人たちがあつまつて、けんかするほど沢山酒をのんだという。(高平)

雨乞い

榛名神社へ行って神明水をもらつて来た。竹の筒に入れて来た水を、地面におくとその土地に雨が降るといつて置かなかつた。その水を畑にふりまいた。(平出)

雨乞い山

ひでり年で困る年には、雨を降らせたいので雨乞い祈願をするために雨乞い山に登つた。特に何を持ってゆくというようなものもなく、山の上で拜んだ。余り効果はなかつた。一度雨乞いをして山から下つて来て住宅で一ぱい飲んでいたら、ポツポツ降ってきたので、これはよかつたと喜んだが、その程度だつた。祭つた神は石宮があるが何の神さまだかわからない。近くには弘法の岩穴というのがあり、水が出て、中は広くてチョウハンにごくいいところ。(上古)

雨乞山に太鼓をかつきあげ、たたきながらお経をあげる。

榛名山へ水をもらいに行き、竹の筒へ入れてもらつてくる。(下古)

天気まつり

武尊様(村内)へ行って拜んでまたあととは、区長の家で一ぱいやる程度。(平出)

雷

雷のことをごろごろさま、かんだちという。稲妻のことをいなびかりという。

はつがみなりのおきに節分のおきの豆をくえという。

梅雨あけのしるしは、かみなり。

かみなりが多い年は米がとれるという。

この辺では、須川の方からくるかんだちは、須川の三束雨といわれ、須川に雨がたてばすぐくるといふ。赤城の方からのかんだちはほとんどこない。この辺のかんだちは、子持とか須川の方からのが多い。

かみなりよけとしては、かやの中に入って、「遠くの桑原、遠くの桑原」と唱える。

月の十五日前のかみなりは火があるのであぶない。(火事になりやすい)十五日すぎのかみなりは水がみなりさま(水をもっている)なのであんじゃあねえ(心配ない)といわれている。(高平)

雷のとき、母屋に向つて、「海」という字を書くと、海の方へ落ちる。(生枝)

雷が鳴るときは、遠くのくわばら遠くのくわばらというといふ。

(生枝)

太田の香籠さまのお札をうけてきて、仏壇におさめておけば、その家にはかみなりさまがおちないという。(高平)

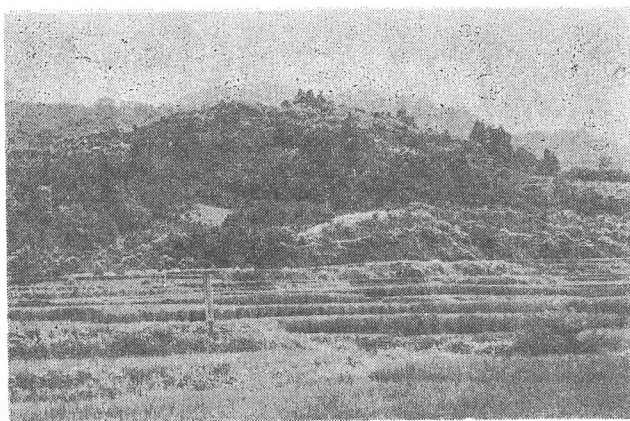
天王さま

きゅうり・なす・にんじん・ねぎなどの初物を天王さまにあげた。

祇園のとき、天王さまの鳳凰の口に、その年にできた稲の穂を祭世話人が村の中からみつけて来てくわえさせた。これで豊作を祈つた。

(高平)

大風が吹くときは、竹のさおの先に鎌をさかさに結び、風の方向に向けて立てると被害がない。(生枝)



平高 跡堂ノ峯

つた。産後(エナ)を埋める所だ。中央小高い所に堂があつた。

(関口正巳撮影)

埼玉の妻沼からシウゼンサマのお札をうけてきて、そのお札を油でいためると、三代分の福をよぶという。

(高平)

いろいろの灰の上に子どもが落ちると塩で清める。(生枝)

ミネンドウ

宿の北、山のふもとにミネンドウというところがある。ここにはむかしお堂があつて、癩病の人をこのお堂に入れておいたという。現在では、お堂はな

(高平)

く、ここはノチザンをいけるところになつて

兆

すずめがさわぐと雨が降る。

夕日がわるいと雨、よければ天気がよくなるという。(西の方から天気はくずれるという。)

月が笠をかぶると雨になるという。(高平)

中組のしし舞が出ると雨が降る。(生枝)

怪異・妖怪

狐

狐に化かされた話はよく聞いた。上の原には狐塚というのがあつて、

狐が子を生む時には、産婆をつれていってとり上げさせたという話もあったし、また赤飯などつくと重箱に入れて持ってつたり、本膳で食わせたことあつたという。

化かされてそば畑の中をアフケー、アフケーと、一晚中歩きまわっていた、などという話はいくらでもある。愉快なのは、一晚中芝居を見せられて楽しかった。しかし狐は狂言は知らないと思えて、その部分はやたらとにぎやかなだけだった、という話もあつた。

ある人、伊兵衛さんに魚をもらって帰る途中、往還(道)がみんな川になつてしまふ。その一つの川をすつとんだら、おっころんで、さめた。

(平出)

Aさんに狐がついて、燧石の竹藪の中で「ああ深けえ、ああ深けえ」と一晚中歩いていた。いぶしたら癒つた。

Bさんが高平の大峯へ草刈に行つたから来て来た。やっぱり狐だった。寿司食えば行くとか、何を作れば出て行くとか云つて、稲荷ずしの十四、五も食つたり、牡丹餅なども沢山食べた。

山の中に工事があつて、土方達が沢山入つて来て、百姓家に泊つて仕事した。中に子供連れがあつたが、ヂクなし(意気地なし)で夜小便しに戸外へ出られない。障子の穴から小便をしていたら、向うの山から「貴様のチンコはでけえな」と叫ぶ者がある。「デケエからヒンナメロ」と言つたら「おーい、なめべ。おーい、なめべ」と云つて近寄つて来る者がある。驚いて家の大人を起して待っていると何だかこわい物が来た。皆して、よつて退治したら、オカマガエルの化けたのだった。

木伐り天狗というのは、実際には木を伐らないのに、夜木を伐る音、その倒れる音がする。

輪組の人が片品川を渡る時、螢が飛んで来たが、みている中にその光がだんだん大きくなって、橋につかえて通れぬ程になった。恐ろしくて逃げ帰ると家から母が迎えに出てくれた。それでその話をすると、「こ

の位か」といって両手を広げて螢の光の大きさの形をした。それがまた
どんだん大きくなり、やがて光る玉になった。おそろしくて気を失って
しまった。これも天狗の仕業という。

坂平（出のダムの処）へ魚釣りに行ったら、崖に十三仏の掛物が下っ
て見えた。

同じ処で夜行くと、木のブツ伐りが何本も（ある可き処でない）立っ
ていた。それに抱きついてみたらゲラゲラ笑い出した。

（鶴淵螢光氏の説に右は天狗のしわざという）（尾合）

むじな

Kさんの家のおばあに、むじながたかった。背中をどうずいたら、
「離れる、離れる」という。硫黄でいぶしたらだんだん離れた。（尾合）

たかり物

茶碗の向う側から物を食う人は、こちら側にタカリ物が食っているの
だ。下のKなどもそんな食い方をした。（尾合）

郷土芸能と遊び

付・祭礼行事

はじめに

白沢村の民俗芸能にはそう特長的のものはない。特に古い芸能が一人廃絶されたあとであるということが出来るようである。というのは、伝承者がほとんど没してしまい、復原さへ不可能のものが多かったことがその一つである。地芝居も一人廃絶されたものが、最近になって再興されたものであって、その間にかんりの時間的空白が見られる。春駒などの門付芸も実演者はとうに没してしまい、祭文も現在語られる者は一人もいなかった。ただ一つ、県下にはほとんど見られなかった館屋の伝承者を高平で知ったことは大きな収穫であったと言えよう。館屋は門付芸でもありまた座敷芸でもあり、その内容は義太夫とか祭文とか説教節とかのさまざまな要素を採り入れており、単なる民謡ではない。その伝承者が実に正確に記憶しており、かつての館屋節といわれたものを調査する上において有力な資料を提供してくれたことは特筆してよいだろうと思う。八木節や盆踊りなども、古い伝承の経路を示すものではなく、一人廃絶されたものが逆に輸入されてきたものが多く、明らかに逆輸入を物語るものがわかった。たとえば盆踊りなども、群馬郡の方から来た人に教わったというのがよい例である。和讃なども、古い念仏和讃の原型はなくなり、近頃になって覚えたというものが多く、

以上のように、一人減んだあとに、時間をおいて再び根付いたという芸能の多いことは、白沢村の民俗芸能の内容が単調で新しいことを意

味しているといつてよいであろう。

だがそうした早くに古い芸能を失ったはずの本村において、神社の祭礼行事には古い型をのこして今もなお行なわれているものが多かった。たとえば尾合村の「ヤアヤア取り祭」とか、生枝の「ええちよう祭」とかという行事が現在もお見られることは特長的であるといつてよい。他の年中行事や信仰民俗などと比較して白沢村の伝承文化をさぐる上に一つの手掛りになるうと考えられる。芸能的な面では極めて近代的でありながら、祭礼行事に古い型の見られることは白沢の二面性を物語るものといつてもよいのではないだろうか。

白沢村の芸能地理的な分布から見ると、越後と近く現に越後出身者が村に多いのに、越後のような民謡などが定着しなかったのはどう解釈してよいかである。雪深い裏日本の風土と芸能を持った越後人が白沢村に土着したことと芸能の土着は別のものなのであるか。今後その点でも再検討しなければならないのである。一応本項においては、郷土芸能と子供の遊び、それに神社の行事を報告して他はすべて今後の調査にまきたいと思う。

(萩原 進)

地方歌舞伎

平出部落の有志で今もつづけている地芝居が注目されるものである。創立は比較的あたらしく、昭和二十四年に小野正市さんがはじめたものである。もともとこの地方には地芝居が多かったことは、平出にも歌舞伎の舞台があったことでもわかる。この舞台も現在はとりこわされて現



平出歌舞伎の舞台（萩原進撮影）

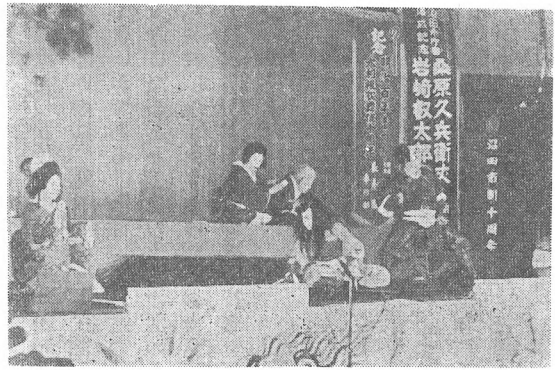
存していない。この歌舞伎が一人たん廃絶したあと、終戦後に再開されたものである。

終戦後月夜野町の角さん、鶴さんの二人を師匠に迎えて振付をしてもらい覚えた。衣裳（綺羅）は沼田の三桙京松のものを借りて使う。引幕まで借り物である。床山もよそからきてもらうといったものである。大道具はさいわい部落有の古いものが寺に保存してあるのでそれを使う。チョコボは一座の中にいないのでその都度頼んで来る。義太夫は沼田の義太夫同好会の十五

日会の人たちが応援してくれる。二十四年にはじめたあとしばらく休止していたが先年また再興して現在にいたった。

演し物は時代物が主で安達三、太十、鎌倉三代記、平仮名盛衰記といったものに限られている。費用は一座の個人支出と、そのときの樽（ハナともいう）とよばれる寄付金によってまかなう。今でも敬老会るときなどに上演しているが、老人にはたいへん喜ばれている。現在の座員は次ぎの人びとである。

上村 満寿（三九） 小野 秀夫（三八） 桑原 広司（五八）
 小野 伸棟（七〇） 小野吉太郎（三〇） 桑原 亨（五五）
 金子 肇（五〇） 小野信太郎（三六） 小野 徹夫（二八）
 座名はもと「東文座」といったが、今は「平出歌舞伎連」と称している。要するに江戸時代から明治大正にかけて一時行われていた素地の上



平出歌舞伎の舞台（昭和43年）（萩原進撮影）

に、再び興したものとといった一座であるから、系統に伝統を継いでいるというものではなく、そういった現代的な意味の方が興味をもたれる一座であるといえよう。

先年敬老会に上演したものを、八ミリのフィルムにおさめて記録化しているので上演しなくともある程度の雰囲気は伝えている。現在はその都度に掛舞台をつくってやることが多い。

上古語父では芝居は昔やったことがあるといい、佐貫さんの家に、毎年の祭りのころにやった芝居の外題と係分担費用などを記録した文書が残されている。調査係などという係があったりしておもしろい。お諏訪さんには舞台があったというが、いつかこれ売って飲んじやったのだという。観音さんにはまわり舞台の大道具がいまもとってある。大正には地芝居をやった。昭和になつてやる人をほから頼んでやったこともある。

また岩室では舞台という地名があるから、もとは舞台があったのだらう。岩室神社の下で芝居をしたこともある。地芝居では、寺小屋、太閤記阿波の鳴戸などをし、衣裳は主に月夜野方面から借りてきた。時には買芝居もあり、発電所の落成祝いに松本錦枝をたのんだこともあった。上古語父では大正天皇の御大典のときに地芝居をやったのが最後だという。義太夫も一時はどこの大字でも盛んであったが、芝居の衰微とも語り草となつてしまった例が多い。

盆踊り

以前は九月三日が盆だったのでその日に八木節の盆踊りが行われた。尾合地区は盆踊りが盛んであって有名だった。当日は神社の境内に八尺ぐらいの櫓を組んでそのまわりを輪舞形式で踊り明かした。櫓の上は六尺ぐらいあった。ここに音頭取り、樽、太鼓、笛、鉦の囃子方がのぼった。櫓はスギの枝で飾って、四方に造り花を下げて華やかにしたものである。伝来はよくわからないが、白沢村一帯では古い。八木節そのものであるが、尾合の上組の佐藤秀次郎さん（六八歳くらい）という人がいるがその人の母が勢多郡横野村の生れであったが、この人が覚えていて村人に教えたのが今の盆踊りのもだったという。この人が樽の叩き方まで教えた。みんな覚えて自分でやるようになったものである。八木節の本などもあってそれで歌詞を覚えた。太鼓や鼓もだんだん買って揃えた。特に中心でやった一人立木兵衛さんの話によると、昭和七、八年頃が最も盛んで、村内だけではなく村外にまで遠征して大いに気を吐いたという。演じたものは国定忠治、継子三次、継子太郎、学校騒動、不如帰、召集令といったいわゆる江戸時代の口説き系統から明治時代のものなどが多く、あたらしく創作されたものもあった。たとえば衛生宣伝の八木節や村づくし、青物づくしなどがそれである。いまこの地方特有の「村づくし」の八木節の歌詞をあげておこう。立木兵衛さんの話によると岩室村の樋口昇という人から教えられて覚えたということである。

利根づくし

南片品北利根川の

合にはさまるその村づくし

綾戸トンネルくぐりて入れば

岩の上だが岩本村よ

鮎のはね込む広瀬のヤナも

古いとこだが新橋などと

とがもないのに戸鹿野の橋よ

さてもこの頃お昼の時分

昼の注文さてなになるか

ウドン、ソウメン下川田村

カチンチンカンと鍛冶町通り

角を曲れば郡農会の

そのや隣の越後屋さんで

芸者四五人引きずり上げて

はねりやお金は薄根の村よ

文はやりたし硯田村よ

親の恩田だ忘れちやならぬ

何時か出たのかあの井土の上

ここらあたりがああ御勘弁

闇の晩にも月夜野橋の

(中略)

寒き朝には降る下之町

頭にかぶるが坊新田よ

君と僕とはいいい仲町で

豚は食べても馬喰町で

二十三夜に参詣いたし

祈る仏やちよいと上之町

かみを施しやちよ材木町の

角を曲ればあの原町の

浜田旅館に一泊いたし

好きなお酒も吞まずにいれば

好きな野菜も沢山できる

(略)

あまり長いのは一座の邪魔よ
降りる止めるの声出ぬうちに
ここらあたりで段とめて

あとは大先生に頼むが大いさね

大体こういったもので、利根、沼田地方の地名を面白おかしく歌い込んだものである。八木節の「村尽し」は各地にあり、その地域ごとになかなか捨て難いものを持っている。

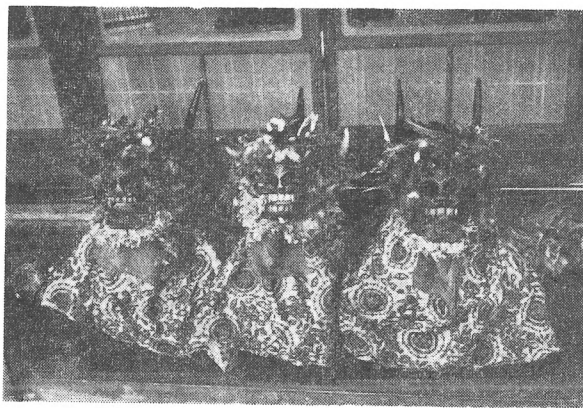
踊の種類はスゲ笠踊り、傘踊り、手拭踊り、手踊りが主である。全体からみて、群馬県の平坦部の八木節がそのまま逆輸入された系統に入るので、おなじ利根郡布施の盆踊りなどとはかなりちがって全体に陽気でテンポも早い。高平地区では「高平連」といって八木節のグループがあり、藤井作太郎さん(大正三年生)が音頭、小野元二さん(大正十二年生)と小野幸三さん(昭和二年生)が笛、小野利明さん(大正十三年生)が鉦で国定忠治を演じてもらった。これも尾合の八木節と殆んど同じである。(尾合)

村でやった盆おどりは、明治末から二、三回やったのおぼえている。終戦後は豊年おどりとなって、八木節などをやる。うたは国定忠治などだった。(上古)

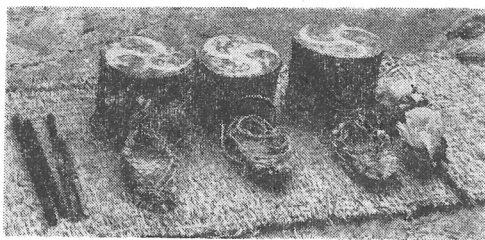
獅子舞

獅子舞は生枝に一組あるが、これについて鶴淵螢光氏は「村の伝説と亡び行く童謡」という著書に次ぎのように書いています。

大字生枝、昔から諏訪神社の秋祭に獅子舞を行ったのであって、名主の宅から渡拍子にて社へ行くのを宮詣と言う。当時の森は白沢川の辺高平街道の南に在って、貞享の地図にも載っている。獅子頭三つは沼田城主真田伊賀守から賜ったもので、沼田町の祇園祭には必ず大手前



獅子がしら(生枝) (阿部孝撮影)



獅子舞の道具(生枝) (阿部孝撮影)

で取り行ったものだ。踊子三人は唐袖、裁付、白足袋で、腰に小鼓を結び付け、笛吹二人と太鼓二人、外に大天狗、お可女、ひよつとこのお面を被り、籠(かご)、梵天等を持ち、交って舞うのである。笹樹(掛の誤り)岡崎、歌切、庭見等とある、歌詞は言い伝えであって書き残したものはない。古老に尋ね誤れるを正し、笛の譜を書き取り僅に当時習い覚えた四、五人を集めて、忘れ去られんとした郷土の芸術を復興し漸く奉納する事が出来た。尚郡内にも新治村の羽場、川場村の萩室、東村の穴原、赤城根村の生越、柿平、根利などにもあるが歌詞は異って居るようだ。

と記している。こんどの調査ではついに実演は見られなかったので自然聴書調査によったのであるが、県下各地に多い一人立ちの獅子で三人が一組になって演ずるものである。付け人は天狗の面を被り高足駄を履く

大天狗とおかめの面を被ったおかめ、それにひょっとこである。付け人の採物はササラと梵天と拍子木である。三人の獅子舞は「タツツケバカマ」(モンペ)簡袖、白足袋、わらじ掛けでカシラを頭に被る。カシラは雄一と牝二の獅子とよんでいる。腰太鼓をつけ、二本のバチを手にもって太鼓を打ちながら舞うものである。囃子方は笛二人と大太鼓二人である。舞の曲目は次ぎのようである。

一、庭 神 楽

清め塩 お祓いに当るもので塩で淨める。

梵 天 御幣束をボンデンという。この曲目は降神の儀にあたる。

三方 三方に供物をそなえる。

以上は舞の座庭をつくるためのもので別に踊りなどの所作はない。

二、笹掛り(初座)

各地の一人立ち獅子舞に多いものである。このときの曲は「岡崎」であって歌詞は、

あつて歌詞は、

参り来て諏訪の御手洗眺むれば

何時も尽きせぬ鯉と鮒。

鯉鮒が鬚を揃えて遊ぶげな諏訪の御手洗名所なり。

次いで「歌吉利」(歌切)に変わる。

娘御達能が見たくば杉戸をあけて

あけて

あけてさらさら三拍子く。

籠の入お宮かご山藤の花

花降り散らして遊び驚く。

何時か夜も明け花の朝霧く

御垣の中の神楽拍子よく。都から急げ戻れの文が来ておいとま申すよ花の都へく。

三、庭見(後座)

庭見というのは、ほかの獅子舞では「庭切」ともいい、氏子の家を訪れてその庭で悪魔払いをするときの曲目となっているものが多い。前に掲げた笹掛りが神社の前で行われるのと対照的な曲目とも考えられる。曲は最初は「岡崎」で、歌詞は、

この森は天から降ってお立ちある御宮御殿は何時も輝く。

この森に鷹が住むげな鈴の音鷹じゃご座らぬ御神楽の音

と歌う。次ぎは「歌吉利」で、

天竺てんの鳴る雷常に出るやかのの彼の小寺く。

向い小岩の紫筑竹節をそろえて霧をこなかにく。

この桐はどここの桐だと人問わば都下りのこの小大胸く。

七つ拍子は八つ拍子九つ小拍子が十の利根拍子く。

都から急げ戻れの文が来ておいとま申す花の都へ

と歌われる。もちろん獅子歌は全部に歌われるものではなく、舞いの最中にとりどころで歌われるものである。これらの歌詞は伝唱されているうちに意味のわからないものになったものもあるが、いま伝えられ、或いは一部書きのこされたものをそのまま採った。ほかの獅子歌と比較す



獅子舞はやしの記録(生枝) (阿部孝撮影)

ることによってある程度修正もできるがいまはそのままここに掲げた。
座の数ももっと多くあったはずであるが、最近ほとんどやられていないので、長い間に失われていったものと思える。

春駒と祭文・万才

尾合に春駒をやる人がいて、以前は村内外に門付けをして歩いたが、なくなったあとは誰も伝承していないで滅びてしまった。文句もほとんど忘れられてしまったが、蚕のあたるようにということがあったというから、高山村や川場村などの春駒の唄とほとんど同じものと見てよいだろう。

上古語父では初午に春駒をやったことがある。今から五十年前も前のことで、春駒が五人で、モヘイさん、アイさん、アキさん、トモさんともう一人がやった。やった人は全部死亡してなくなったし、うたをおぼえている人もいなくなった。万才は二人でやった。

このほか岩室地区で、村へ来た芸人たちのことをあげると、

春駒 尾合の番太が正月早々きた。

万才 三河万才で、引割一升くれてやった。

ゴゼ、越後獅子、俵ころがし、コンコン狐などの門付もきた。

祭文 尾合からきた。

大神楽 前橋の丸一

義太夫 沼田や蕨原からきた。

浪花節 金古の金柳亭がきた。

ということである。

鶴淵螢光氏から春駒の歌詞を送ってもらったのでここに掲載しておく。利根郡では川場村に現在でも春駒がやられているが、大体はよく白沢村のものに似ているが、違う箇所もあるので参考のために全部ここに掲げておくことにする。

前唄

サアサのり込めはねこめ蚕飼の三吉
乗ったら放すなしっかり飼い込め

本唄

春の初めの春駒なんぞ
夢に見てさえよいとや申す
世のよし年もよし蚕も当る
蚕飼にとりては美濃の国の
小野山里にて求めた種は
さてもよい種ほめ喜こんで
栃木種かや茨城種か
加賀で豊原信州で上田
上州島村蚕の本場
三とこの種をば皆寄せ集め
飼蚕女郎衆はお渡し申す
飼蚕女郎衆は受け合こんで
右の小腋に三日三夜
左の腋に三日三夜
両方合せて六日六夜
暖め申せばぬくとめ申す
三日に見初めて四日に青む
五日にぞろりとお出の蚕
何で掃きましょ掃くべき羽根は
一の羽揃えば二の羽とそらい
三の風切手に抜き持ちて
ちよのごはんにそろりと乗せて
一羽根掃いては千枚蚕

二羽根掃いては二千枚蚕

三羽根四羽根で何千枚よ

このお蚕さんには何かをしんじよ

桑の芽ぐみがよいとや申す

これより繭は八反畑

八反畑か皆桑原よ

十七八なる姉さんたちが

髪は島田にこじゃんと結うて

銀のかんざししたいまの櫛で

あやの前掛錦のたすき

白金黄金の目籠を下げて

十二小梯子をゆらりと掛けて

戌の方へと伸びたる枝を

しんなりたわめて心摘みたてて

一こきこいては目籠へ詰める

二こきこいては目籠へ詰める

籠へ詰込みわが家へ帰る

あの子この子に進せて廻る

呉れて廻れば置いても廻る

あの子この子の桑召す様は

ものによくよくたとえて見れば

昔源氏の厩に住みし

こうし栗毛のあしだをとりて

朝日に向えばもとぼりぼりと

夕陽に向いてはうらしやきしやきと

さればこれより休みにかかる

しじの休みはしんじつかいて

たけの休みの宝の蚕

ふなの休み

庭の休みてにはひに育つ

くせなくきずなく簇に上る

簇に上げて作りし繭は

加茂の川原や片品川の

川瀬に立つたる小石に似たり

重さ固さや白さも似たり

すぐりて見よや量りて見れば

籠に余れば紙にも余る

大繭千石小繭が千石

綿繭合せて三千石よ

信濃の国では糸挽き上手

上州前橋はた織上手

上手上手をわが家へ呼んで

四十五間の糸部屋建てて

昔当麻(たいま)の中將姫は

綾が上手で錦も上手

綾を織ろうか錦を織るか

ななこ根笹や大笹小笹

四方九尺を一夜に織って

綾や落して元三尺を

伊勢の明神大神様へ

みとちよに上げて残りし絹は

ところの鎮守の氏神様へ

みとちよに上げて残りし絹は

お家守りしお稲荷さんへ

みとちよに上げて残りし絹は

町や都会におろしに出して

札や銀貨を俵に詰めて

大八車に山ほど積んで

綾の手綱や錦の手綱

七福神のお手打かけて

これやこのこの家へ引込むなれば

銭倉七つに札倉七つ

穀倉合せて十五の倉よ

鶴は千年亀万年よ

ましてわが家は万々年よ

お蚕繁昌とお祝い申す

祭文

祭文は尾合に新島勝蔵（蔵本金山と号した）という祭文語りがいた。錫杖とホラの貝を使い、デーロン、デーロンという節をつけて、八百屋お七、白井権八などをやった。その弟子が角田初太郎というものであった。現在子孫の家には遺品はなにもない。

和讃

古いかたちの和讃は少なく、最近仏教の各宗派が布教活動の一環としてすすめているあたらしい和讃しかなかった。尾合で飯田清子、角田みよ子、禰木たかさんに演じてもらったものも、天台宗和讃で、沼田の長寿院から教わったものである。近所に葬儀のあった際とか供養のときにその家にゆき和讃を霊前に供する。いわゆる古い時代の念仏和讃はなく、あたらしい現代の和讃である。

無情和讃

一、人と生れて五十年

花にたとえて朝顔の

露よりもき身をもちて

何故に後生を願わんや

二、花を盛りと見るときは

我も思えば一盛り

因あればこそ業ありと

なぜに悟らぬ人の身ぞ

三、春の桜に夏の蟬

秋鳴く鹿や冬の雪

消え鳴くときぞはかなきを

年を数えて知るや知る

四、後の世までも安らかに

この世極楽祈ること

五五の菩薩を友とする

南無阿弥陀仏、阿弥陀仏

追善和讃

一、春の朝に咲き匂ふ

花も夕べの風に散り

秋の夜空の月さえも

満つればやがてかくるなり

二、げに現世のもの皆は

移り変りて止まらず

我れ人ともにうたかたの

はかなく消ゆる身なるかな

三、むつみ交せし面影の

幽明はるかへだたりて

今はあいみんよしもなし

ああ在りし日の俣ばるる

四、さわれ仏はみ恵みの

御手に諸人抱き上げ

永遠とわいもの生命いのちと喜びを

あたえ給うぞかしこけれ

ほかに尾合の鶴淵つるのぶちてるさんに田植地蔵和讃と西の河原和讃をやっても
らったが、地蔵和讃は村の伝説をもとにして土地の鶴淵つるのぶち螢光えいこうさんが作詞
したもので、一般にうたわれているものではないようである。

田植地蔵和讃

帰命頂礼禅定院

慈覚大師の御開山

開基は皇子葛原

花咲き鳥も来て唄う

青葉の茂る頃となり

何時もせわしき田植には

金も貰わず年ごとに

来ては手伝う旅の者

不思議のことと思いが

これぞお寺のご本尊

延命地蔵の化身ぞと

知る有難さ百姓の

苦勞を救い給いける

秋の稔りのよるこびを

感謝し無事に過ごす冬

ああ有難や有難や

田植地蔵の名も高く

功德を仰ぐ諸人の

絶ゆるひまなき利法山

南無阿弥陀仏

阿弥陀仏

一方には、現在行われることは少ないが、古い和讃ものこされてい
る。これはかつてそれぞれ行われたときメモとして記帳されていたもの
が多い。もちろん現在でもやれるものである。かいこ和讃（蚕影和讃）
のごときは蚕糸業の上州らしいものであって、産業経済史的にも興味深
いものがある。地区は生枝である。

かいこ和讃

きめうちやうらいこかげさん

これはこのよのほかながら

しでのやまじのかたほとり

あまたつどひしさんれいが

たがひにかたるみのざんげ

かみのめぐみでそのむかし

さんかいじひの一しんに

ぜんこんぐどくをつみかさね

しやばをにしきにかざらんと

ひとのなさけにすがりしが

けんどんじやけんけんのひとばかり

じひのころはさらになく

八十八やをまつうちに

さいせいなどしなをつけて

しよねつじこくのさいせいき

みづのうえやらひのうへで

はやくいよとせめたてる

やつれすがたでてみれば

一どにでないといぢめられ
ふつかふたやのかたくぜめ
やうやくくわをあたへられ
やれうれしやとおもうまに
くはしほれてたべられず
ああなげなやひとごころ
おほしのわがともあつめおき
わづかのくわをなげあとう
ひもちさしのぎなきおれば
またそのつきもそのつきも
三ど三どのたべものは
はかりにかけてあてがわれ
一みん二みん三みんも
これでやすめのとめじはで
せひなしやすむそのうちに
やうやくおきてながむれば
いづこもしゆらのかれのほら
きのうのともをたづねれば
おきもやられずしでのたび
なきなきよみんになるころは
にはのやすみとしちながら
四はうをむじひにたへかため
いつもひぜめのまいしんろ
じんかうおんどをつくらるる
あるいはしけるとあけひらき
むじやうのかぜにかわかして
あによ、あのよといそがせる

あなおそろしのひとごころ
よみんやすみのそのときに
もしもたがにながらへて
みういもぶちであるならば
ひよくれんりのなかつなり
あいとみさほをささげんと
ちかいしひとをたづぬれば
うまれもつかぬみのかたわ
あしこしたたぬはんだつび
くちもきけつにくるしんで
もはやこのよのひとならず
ひたしきともにはしにわかれ
みらいのおつとにさきだたれ
あはれはかなきしみんおき
あたまのやめるおきちぢみ
きけばこのやのあるじこそ
さんびやうけんさのおやくにん
あまたおすめおひまわし
にうぼちにうぼうとりだして
かあいいてふくすりつぶす
ちこくげどうのおにどもを
あいてになされしえんまおう
しやうどくなどもかんちがへ
われら一どうがべんせんびやう
ふけつきわまるあつかひに
みるにみにくきのをさんと
ひとのいやがるみのやまい

しよせんこのよにおられねば
しのじぬのじをかきおき
かなしやそのままいきたへぬ
なむあみだぶつあみだぶつ
かかるえんまのほんさんは
あなおそろしのにしがはら
ああなさけなやかなしやと
こえをかぎりになきさげぶ
このなきこえをききつけて
とびぎたまひしこかげさん
なんじらなげかずきけよかし
われらはいこのまもりがみ
われみがわりにたつからは
ふたたびげんせにうまれでよ
みだのちやうどをおしふべし
みだのちやうどはむさしのの
なさけふかやのかたほとり
かいらやういくにてあるぞかし
みらいたのしみなげしなと
じひのことばのありがたや
なげかずごしやうねがいつつ
さらばゆきませうかいらやういく
やれありがたやこかげさん
さらばゆきませうかいらやういく

花 和 讃

きめうちやうらいはなわさん
はなもみぢもひとさかり

はなのやうなるこをもちて
ちやうよはなよとそだてしに
むじやうのかぜにさそわれて
さいのかわらのめいとうへ
なげきかなしむふたおやは
あまりわがこがかわいさに
みだのじやうどへこころざし
わがこにたるこをみれば
なみだとともにふたおやが
つきの一日十五日

てらへまいりてはなみれば
ひらきしはなはちりもせず
つぼみのはなのちるをみて
あわれわがこもあのごとく
なきこにひかされてらまいり
わがみのつみもしやうめつし
なむあみだぶつあみだぶつ
なむあみだぶつあみだぶつ

二十三夜和讃

きめうちやうらいとくだいの
せいしほさつのおすがたを
おがまんひとこそなかりしが
いとくりつとむかひまぢ
かわせにたつややねのむね
一しんこめてささげみづ
うしのこくよりねのこくに
はやげんこくになりぬれば

とうのれんげにあらはれて
いつしかくぼんのれんだいに
のせられたまうそありがたや
なむやとくだいだいぼさつ
なむあみだぶつあみだぶつ
なむあみだぶつあみだぶつ

三 和 讀

きめうちやうらいごとうけの
いはいにむかいてはいをする
一にかうたて二におはな
三にしきびのおりえだを
あげてねんぶつとなうれば
十三ぶつのみかげさす
なむあみだぶつあみだぶつ
なむあみだぶつあみだぶつ
きめうちやうらいおやのひは
あさはやおきみをきよめ
みあかしてらしかうをたき
わがみはいづこへおちるとも
二おやさまはごくらくへ
みちびきたまへちぞうそん
なむあみだぶつあみだぶつ
なむあみだぶつあみだぶつ
きめうちやうらいごとうけの
はかしよにうえおくこぼくうめ
えだはこのえはなはやえ
なかなるこえだにうぐいすが

にしにむかいてほけきようよむ
さぞやほとけもたのもしや
なむあみだぶつあみだぶつ
なむあみだぶつあみだぶつ

十三 仏野辺送り和讀

きめうちやうらいありがたや
けふのでたちのみほとけは
たまのみこしにみをのせて
十三ぶつにしゆごせられ
ふだうのたいまつさきにたて
しかのかうろはしやかによらい
ちえのもんじゆははたをたて
ふげんぼさつははなのやく
ぢらうぼさつはみちしるべ
みるくやくしはせんのかく
かんのせいしはみこしわき
てんがいさげてみだによらい
あしくによらいはおんじきを
だいにちによらいはいはいもち
こくぞうぼさつにてをひかれ
しでのやまぢもまよはずに
さんづのかわもわたりこす
にしはあんやうごくらくの
みだのじやうどへつきにけり
なむあみだぶつあみだぶつ

「ありがたや、あまたのひとにみおくられほとけのかずにいるぞうれし
き」

「けふよりも、しやばをはなれてみほとけの、ひぎにつかへて、でしと
なるらん」

高砂和讃

よにもなだかきばんしうの
たかぎごうらにめいしよあり
おのへのまつそのしたに
おぢさまおばさまつれられて
ほうきをてにもちくまでもち
まつのおちばをさらひとり
ねかごにつめてたちあがり
もうしおちさんたれをよぶ
いへばおちさまうちながめ
一なるこえだにぎんのはな
二なるこえだにぎんのはな
三なるこえだにやべにはな
四ばんのえだにはおうばんの
はなもみごとにさきそらい
こつぶのみがなるめでたさよ
こばんのえだにはつるがすむ
はがへをやすめてよるこんで
したなるこいけをながむれば
めがめとおがめのかうべには
よねのまもりをいただいて
あなたこなたとちりあそび
たかさぞおんいをながむれば
やつむねづくりのやつのに
しはうたるきはみなこがね

かわらでやせふきおぎしきは
おくのひとまはせんじやうずき
二ばんのぎしきはことやさみ
三なるぎしきのとこのまに
あくまもおそれるしやぎさま
すみえのかけものかけられて
おちさんとおばさんでおさかもり
ながえのちやうしをとりいだき
おさかなたひのいきづくり
あちらこちらとくみかわし
あかりのしやうじをさうとあけ
まへはみなとでふねがつく
でふねがせんそくきりぶねが
このやおふねがまんぞくで
したんこくたんたがやさん
かうきのほばしらたてられて
あやとにしきをほにあげて
おんいをみかけてのりこんで
まことにめでたいおんやかた
おいへはますますごはんじやう
なむやだいしのへんじやうそん
なむやだいしのへんじやうそん

火の用心和讃

きめうちやうらいみなさまよ
やうじんしなされやうじんを
だい一ひのもとごやうじん
らんぶやちやんかまのした

それからこたつにふろのした

とりばいたならなほのこと

たばこのすいがらぎをつけて

かみやほとけのみあかりも

こどもにまつちはあづけるな

もしもあやまちあるなれば

どんなだいじなしなものも

せんぞのたからもそのとほり

はいやけむりとなりはてる

いくらないてもくどいても

かうかいさきにはたたざるぞ

やうじんするがだいいちよ

くのためやらいへのため

みんなたがいのためなるぞ

やうじんするのがせんいつよ

なむやせけんのみなさまよ

かさねておねがいたてまつる

「しもばしら、かうりのはりに、ゆきのげた、あめのたるきに、つゆ

のふきぐさ」

門開き和讃

きめうちやうらいめぐりきて

ひらいたもんのしまるとき

もんがじやけんでしまるのか

こころがじやけんでしまるのか

なむやろくじでさらとあけ

ろくじのおねぶつなむあみだ

なむあみだぶつなむあみだ

なむあみだぶつなむあみだ

おちやぼめ念仏

きめうちやうらいおんたくへ

ふしぎなごえんでめぐりあひ

これのしよいんにこしかけ

いただくおやのけつかうさ

しんちやかこちやかうぢのちやか

ないしはさやまのめいちやかな

たびのつかれであぢしれぬ

おちやのおれいになになにと

したんこくたんうえきばち

かねのなるきをうえこんで

おうざつこざつのはがひらき

おうぼんこぼんのはながさく

きんかどぎんかのみがなりて

それをおれいにさしあげる

おいとままうしていざさかへる

なむあみだぶつなむあみだ

四方がため念仏

きめうちやうらいおねぶつは

しはうがためのいわくなり

とうざいなんぼくしづまりて

ひがしはくしの十二じん

みなみはせんじゆのかんぜおん

にしはさいはうみだによらい

きたはしやかむによらいそん

おちうおうにはふどうそん
ごだいそんにてありがたや
四はうがためをいたすれば
しよしんしよやくのごりやくで
まのさすことはさらになし
なむありがたやぶつぼうきやう
そくしんじやぶつなむあみだ
なむあみだぶつあみだぶつ
なむあみだぶつあみだぶつ

差上念仏

きめうちやうらいおいへなる
はなのやうなるおざしきに
つななきわれうがまわかれて
しなじなちそうにあづかりて
なにとおれいのなきままに
よいからもうせしおねぶつを
こがねのおほんにつみあげて
ごせんぞさまへとさしあげる
まことにそまつなおねぶつを
ごそだんさまやみださまに
なむあみだぶつでおさめおく
なむあみだぶつあみだぶつ
お産の別れ念仏
きめうちやうらいこのおざの
おざのわかればあささいて
よつにしほるるあさがほの
はなちるほどもおしけれど

こぎくにとまりしきりぎりす
おもいきれぎれきれとなく
おもいきりりよかわすらりよか
いづれみなさますえながく
どなたもおんみをたいせつに
またとこのちあいませう
しなじなあつめてわかれゆく
なむあみだぶつあみだぶつ

七福神和讃

きめうちやうらいおんいへの
ふうきはんじやうのはじまりは
かみをうらやまいしをあいし
ひとにあいきやうじひなさけ
これがせけんひろがりて
しちふくじんのおたちより
このおめでたにつるかめが
ひやうしそろへてうたうには
「おめでたや、しちふくじんの、らくあそび、ろかいさぎめてだから
いりふね」

西の河原のちぞう和讃

きめうちやうらいちぞうそん
ぶつばうせかいのふげんにて
これはこのよのことならず
しでのやまじのほとりにて
さいのかわらのものがたり
きくにつけてもあはれなる
一つや二つや三つや四つ

十よりうちのおさなごが
さいのかわらにあつまりて
いとどかなしきこえをあげ
しやばにましますはうえが
よるはそえちにひるはまた
てふよはなよといたわりて
あらきのかぜにもあてぬみを
むじやうのかぜにさそわれて
いまはめいどのこけのした
あめつゆしのくかたもなく
おもひいだすはふるさとの
ちちうえこひしはこひし
おやとなげけどそのかいも
しやばとめいどのことなれば
こたうるものはあらしにて
こころぼそくもあはれなり
そのおさなごのしよさとして
かわらのいしをとりあつめ
それにてえかうのとうをつむ
一ぢうつんではちちのため
二ぢうつんでははのため
三ぢうつんではふるさとの
きやうだいわがみのえかうして
ひるはひとりであそべども
ひもいりあいとなりぬれば
ぢごくのおにがあらわれて
なんじらなにをいたすぞや

しやばんにのこりしちちははが
ついぜんくやうのつとめなく
ただあけくれのなげきには
おしやかなしやいじらしと
おやのなげきはなんじらの
くげんをうくるたねとなる
われをうらむなおさなご
くるがねぼうをふりあげて
つみたるたうをおしくずす
あらなさけなやおさなごは
もみぢのごときをあわせ
ちちよははよとちちめぐる
そのときのうけのぢそうそん
ゆるぎいでさせたまひつる
しやばはいちやのやどりなり
なんじらいのちみちかくて
はやくもめいどへきたるたり
しやばにのこりしちちははの
なげくはほとけのためならず
ぜんせのやくそくあきめて
じひぜんこんをほどこして
あけくれとなへよごわさんを
せんぞほだいのためとなる
わがみのつみもきゆるぞと
おもうてあけくれたのむべし
ふびんのものやといたわりて
めさせたまひしみころもの

もすそのうちにかきいれて

にんにくじひのみはだえに

いだきたまひてなでさすり

あわれみたまふそのうちに

よもにしうんのたなびきて

くわうみやうかがやくじぞうそん

しこんのれんげにぎしたまひ

みだのじやうどへみちびきて

あんやうせかいにわうじやうす

あらありがたやじぞうそん

これらの和讃をみてもわかるように、仏教の無常観をそのまま歌うものと、火の用心和讃のように生活の知恵から出たものや、交際の茶呼びの心得をうたったものなど、暗い仏教音楽の一つが、明るい生活の面を表現していることなどを見ると、芸能という面からやはり注目してよいであろう。

飴売り唄

むかしは、頭にハンダイを載せ、ハンダイの縁に小旗を立て、手に扁平な飴屋太鼓をもち、打ち鳴らしながらブツカキ飴を売りあるく芸人がいたものである。むかしの社会の風物詩でもあった。その飴屋が太鼓を打ち鳴らしながら唄うのが「飴売り唄」である。

県内各地に幾人か飴売りはいいたのであるがやめてしまったものが多く現在ほとんど記憶の範囲にとどまっていたのである。ところが、高平に小幡兼吉さん（明治四十年七月生れ）という伝承者があり、しかも現在でも正月には白沢村内を流して歩いていることを知った。早速本人に会っていろいろと聴くことができた。

小幡さんの父は越後の北魚沼郡の出身、母は中魚沼郡の出身で、二人で白沢村高平に土着した。義父（母の後の夫）が越後の人で飴屋をやっ



飴屋節を演ずる人（高平）

小幡 兼吉氏

太鼓径34cm (1.1尺)

(関口正巳撮影)

ていたのでこちらに来ても飴屋を一つの業としていた。この義父は岡本文太夫の一家であった。師匠から七本の銀のタガのあるハンダイをもらった。弓張提灯には「石井一家喜楽連」と書いたものを使った。芸人の鑑札を所持しているが、それには表に、

第一、八四〇号

音曲 遊芸稼業鑑札
手踊

昭和六年三月二十六日下附ス

とあり、裏に、

利根郡白沢村大字高平



飴売りに使った旗(1)
(日露戦争の頃)

九百五十六番地

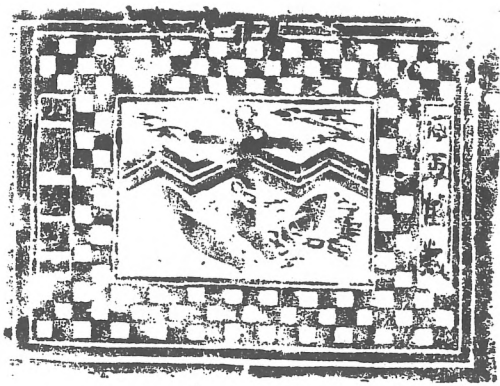
小幡 兼吉

明治四十年七月七日生と認めてある。この鑑札を太鼓の柄にいつもつけておき、調べのときすぐ見せられるようにしてある。

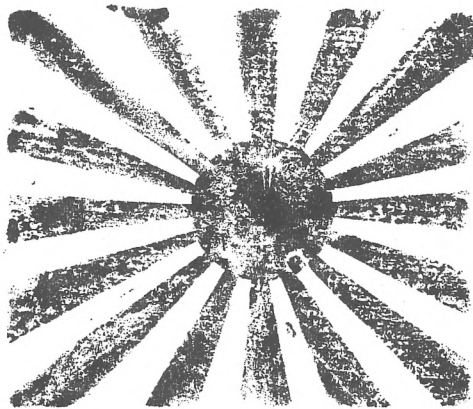
兼吉さんは昭和十四、五年の頃まで、群馬県一円から長野、新潟二県を巡っていたが



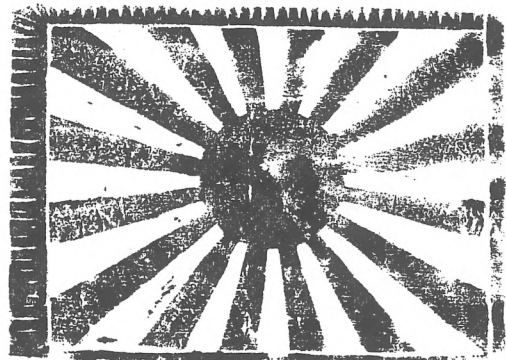
飴売りの旗(4)



飴売りの旗(2) (日露戦争後)



飴売りの旗(5)



飴売りの旗(3)

芸人の世界にあるように、やはり土地土地の親分に仁義を述べて諒解をとりつけて営業をした。香具師(やし)の親分が繩張りをもっていたから、そうした者への仁義が非常に重んじられた。これは一般のやくざとおなじで、仁義なしに稼業をするとそのあとが面倒であった。群馬県では高崎の小島一家、前橋の飯久保一家とは特に世話になったそうである。

家を出ると長い間帰らず、巡業して稼いだものであるが、飴がなくなると行った先きで水飴を買い、それを練って棒飴にして自分でつくったものである。稼業の相手は昼間は子供が相手であったが、夜はよく座敷などに招かれて芸を売ることもしょくなかった。客の注文に応ずるためには、巾広いレパートリーを持つことが必要だったので、師匠に教えられたもののほかにも随分自作した歌詞もある。流行歌、万歳歌、琵琶歌、浪花節、義太夫などを吹きかえて自分でつくったものも少なくなかった。

芸はまず太鼓の打ち方から覚えなければならないが、これがなかなかむずかしい。飴屋の太鼓は大体関東風はテンポが早く、関西風はテンポがおそいのが特長である。

太鼓は大別して(一)「寄せ太鼓」といって子供たちを呼び集めるための曲目がある。これは遠くにいる子供たちがすぐ集まるように軽快でテンポも早い。(二)は「門附」の太鼓で、一軒一軒ごとに立ちながら打つ曲目である。(三)は「流し」といって、歩きながら打つ太鼓である。この三つを叩きわけながら稼いだ。もちろんこのほかに、歌うときに合の手に囃子としての太鼓がある。これは、声が太鼓に負けないように音程を調節しながら打たなければならない。

流しのときには「お江戸日本橋七つ立」とか、鴨緑江節、安来節などさまざまであった。お座敷芸として招かれたときは、

「国定忠治」「石童丸」「葛の葉の子別れ」「八百屋お七」「白井権八」などをよく注文された。戦時中除隊すると軍事物ばかりやって客に喜ばれた。「楠中佐」「辻占売り」「召集令」なども数多くやったものであった。これを全部メモなしに演じたというから、その記憶は大したものであるといえよう。地廻りをやらなくなった現在でも小幡さんは正月には村中門付けをしながら「寿（ほ）ぎ歌」を歌ってまわるという。歌詞の長いものは、二時〜三時間におよぶという。こうなるともう語り物となってしまうのである。正月村内をまわる祝い歌は次ぎのようである。

春のはじめのお祝の

一にこの家のお門松

二にはニッコリ庭の松

三がい松の羽振よき

四は唐崎の世々の松

五つ出雲の五葉松

六つ昔の高砂の

尾上の松のその下で

鶴と亀とが舞い遊ぶ

爺さん婆さん知恵くらべ

爺さんの持ちたるその品は

宝をかきこむ金熊手

お婆さんの持ちたるその品は

悪魔を掃き出す高箒

下には亀が舞い遊び

上には鶴が舞い遊ぶ

鶴は七つの卵持ち

七つが七つで成長する

親子もろとも立つときに

七福神を招かれて

飲めよ騒げの大騒ぎ

弁天娘がお酌して

酒盛半ばになるなれば

恵比寿大黒拳を打つ

お恵比寿負けたら鯛を積む

大黒負けたら俵積む

先ず正面をみてあれば

先ず正面に祭るのは

天照皇太神祭られて

春日八幡祭りつつ

家の棟八百八荒神

勝手が三宝荒神で

火伏の不動も祭りつつ

万の神々およろこび

神々いさめるこの太鼓

太鼓の胴でこと円く

扇子の地紙で末広く

先ずはこの世の悪魔除け

男の子の遊び

ナマリ 武者絵がナマリに描いてあるもので、これを地上に置いて返えすことよって勝負をきめる遊びであった。大きいナマリは直径一〇センチから二〇センチもあった。相手のものを返すと自分の所得になる。今はやらなくなった。

メンコ 「ブツケ」ともいう。ナマリかボール紙でつくられたもの

で、表にいろいろの絵がはりつけてあり、これに風をくれてめくり返えす遊びであった。

ハリバクチ 木綿針を使ってやる遊びで「ト」「カ」「サ」ともいった。「トは「取ったり」カは「賭けたり」サは「さらったり」の意味である。

インダタミ ハガキの古いのを使って自製した一種のメンコで、やはり返えて互いにとり合う遊びである。もちろん今はやらない。

ネツクイ 細い木の幹の先端を削って尖がらしたものを地上に打ち込み、相手のものを倒すと自分のものになる。「根っ杭」のことである。長さは三〇センチからあった。

タケトンボ タケを削ってプロペラのようにしたものに丁字型に柄をつけ、両手でもみあげながら飛ばしたものである。

カミデッポウ 紙鉄砲のことである。青い篠竹などを伐ってきて、七分三分に切り、三分の方に竹の中空を通る枝をさして固定する。一方紙を口の中で噛んでまるめて七分の中空に押し込む。先端近くまで押し出してからさらにいま一つ紙を噛んだものを押し込むと中間の空気の圧搾で先きの紙が音を立てて飛び出す玩具の一つである。

スギデッポウ 紙の代りに杉の実の青いものを竹筒に詰めて紙鉄砲とおなじように外に飛ばす。

このほか、ナンゴ、タケナンゴ、カギトリ（若い木の小枝で「」の字型にしたものを手に持ち相手のものと引つ掛けてとられると負け）などが行われた。イモゴマなどもよくやられた遊びである。

遊戯では「王様落し」「ドンブリ鉢」「カゴメ」などがやられた。ドンブリ鉢は、向い合って二列に並び、互いに手を取ってできた上を、一人ずつ這って乗る。これを

ウナギ、ウナギ
ドンブリ鉢渡れ

と大きな声で唱和して上下にゆり動かしながら送り出してやる遊びであった。地上に円形の図を描き、その区域をとりあう「国とり」や「蹴出し」などもよくやられたものである。

女の子の遊び

男の子にくらべると女の子の遊びはきわめて少なく、「ナンゴ」「お手玉」「タケナンゴ」「おはじき」などが主なものであった。オキナグサの花弁の落ちたもので人形をつくったりして遊んだこともある。

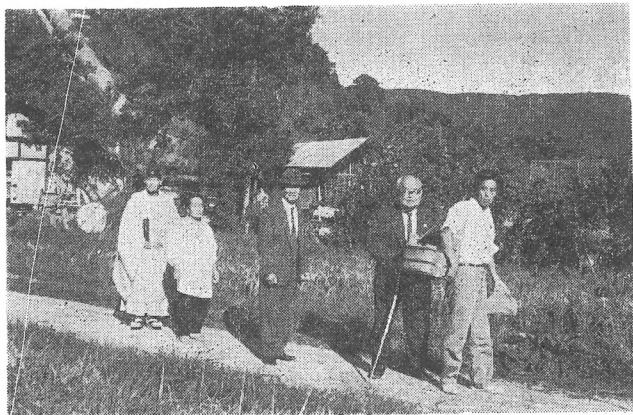
(尾合)

このほか特殊なものとして、婦人や子供のやったものに「ホウビキ」（ほう引き）がはやった。もともと江戸時代に大人の博奕の一つとして行われたものであるが、生枝での調査によると女子供がよくやったそうである。いくつも紐の端末が出ており、紐の先きは上の紙でかくし、一番上部に金額が書いてあり、端末を引くとそのどれかに当るようになっていた。みんな金額の多いものをねらって勝負をしたものである。金の代りにミカンや落花生などをおくこともある。生枝での調査によると、「ホウビキ」に負けた者を「キノコ」と呼び「あのキノコを連れて来て取るベエ」といって仲間に入れてやった。

祭礼行事

尾合のヤアヤアドリ祭

尾合部落の県道南側片品川の岸の上に祭られている尾合神社には昔から伝わる特殊な行事が行われている。この尾合神社はもと三社神社と言い、日本武尊、葛原親王、菅田別命を祭神としている。建築は拝殿と本殿にわかれているが、本殿は鞠堂をかけた利根郡地方に多い小型の建物である。棟札も何枚か遺されている。慶安三年の絵馬がある。祭日は春秋二回あり、春の祭は四月末（ヒツジ）の日とされ、秋祭は十五夜（旧



神社に向うコワメンのお櫃（萩原進撮影）

祭の日になると、まず氏子総代を中心にして神社の祭典の準備が進められる。尾合部落を十二組に分けてこれを班とよぶ。十二の班は回り番で班の共有であるお櫃を洗い、各戸から三合

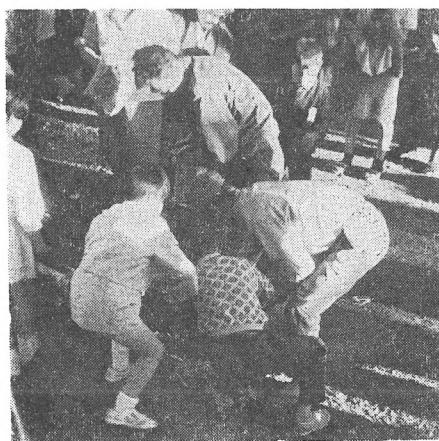
か「饅頭投げ祭」とよばれる行事が行われている。昭和四十三年の秋祭は新暦で十月六日に当る。しかし、便宜上本年に限り十月一日に変更されたので特にこの日現地にゆき調査をしたものである。四月の祭は別名「ヒツジ祭」ともよばれる。

八月十五日）となっている。この春秋の大祭には「ヤアヤア取り祭」と



班長の家を出るお櫃（萩原進撮影）

ないし五合くらいの米を出し合ったもので赤飯をつくる。昔は各班で二櫃ずつ受持ったが何時の頃から一個となってしまった。また赤飯の米も以前はモチゴメ、ウルチ、アワなどいろいろであった。この櫃はオケの一種で、オケの板のうち左右二つは上に出て紐をつける紐穴があけられている。祭の当日になると正午頃は当番の家ではお櫃に赤飯を詰める。そしてフタをし、紐で背負えるようにする。このお櫃と同時に重箱に煮物（ニシメという）をつくって詰め合わせ、風呂敷にくるみ持ち運びができるようにする。午後三時頃になると、神社へ集合するための合図の振鈴が鳴ると、その家の主人（男がいなるときは女性）がお櫃を背中に負い手に重箱を下げて神社に集合する。



赤飯を奪い合う（萩原進撮影）

神社につくと、拜殿に上がり、持ってきたものを班ごとに本殿の前に供える。村の氏子もその頃から境内にだんだんと集まって来る。神官と氏子総代が祭典の準備をすすめるが、やがて夕陽が落ちかかるころ神事が開始される。神官のお祓いが行われ、降神の儀が執行われ、祝詞が奏上される。拜殿に昇殿できるものは神官、氏子総代、班の当番などである。昔は女は昇殿できなかったが、社会情勢の変化で男が出稼ぎなどで家におらないなどの理由で女が代理で出席するようになった。この日も女の方が多くいらだった。祭の神事はやがて玉串奉奠となり終りに近づくと神事が終ると直会となり神酒を酌んでまず祭は終る。

この神事が終ると、各班の当番は本殿に供えた赤飯とニシメを下げ、めいめいお櫃のフタをあけ、白紙に赤飯を包む作業にかかる。これは、班の各戸の数だけ持って帰るものである。このほか班の氏子に持って帰るミジンコの打菓子（紅白でできていて神社の紋がついている）とスマンジュウを二個ずつ紙に包む。次ぎに神社のお札を銘々の分だけもらい、これを一組にして氏子に戻すわけである。

一般の参列者は、ぞくぞくと神社に集合するが、老人たちが境内にある末社の石祠に撒米を供えて一々お詣りをすますが、子供や青年たちは早くヤアヤア取りの始まるのを待っている。その頃直会がはじまり、拝殿の上で一升壺の口が明けられ、持参したニシメで酒が酌み交わされるが、同時に境内に集まっている一般参列者の間にも酒がまわり、ニシメが配られるから、境内のあちこちでのどかな酒盛が行われる。これが一通りすむといよいよこの祭の最高頂であるスマンジュウ（饅頭のアンのないもの）と赤飯を参列者に施す行事となる。



ヤアヤア祭りでスマンジュウを拾う
(萩原進撮影)

氏子総代と班長はまず用意したスマンジュウを群衆に向かって投げる。一斉に手が中空に伸びる。一種異様の熱気を帯びてくるのはこのときからである。やがて氏子総代と班長はスマンジュウを投げる。多くは土の上に落ちて泥だらけになるが、先を争って夢中で拾う群衆の姿はまさに壮観である。しまいには撒いている本殿に上がってきてスマンジュウの入っているボール箱を奪ってゆくものも出てくる。これは取った者の取り得

だという。

スマンジュウが終るといよいよお櫃の赤飯を投げる行事となる。お櫃の赤飯は投げるのではなく、ソックリ群衆の手に渡すと、銘々十二のお櫃に手をつかんでムシリ取りをする。このときヤアヤアの喚声をあげるのどヤアヤア祭りともいうのである。欲の深いものはアツという間に沢山の赤飯をとることができ、遅いものは一つかみもとれないという結果になってしまう。しまいには、お櫃ごと奪ってしまつて逃げ、遠くへ行つて悠々とせしめる者もいる。こうしてアツという間に赤飯はなくなってしまふ。狂気じみた熱気からさめた群衆はめいめい取り集めた量を見くらべて笑っている。祭は終わったのである。あとはめいめい自分の家へ帰つてゆく頃は陽も西に傾いてしまふ。



運の悪かった者には配給がある
(萩原進撮影)

これと似た祭は、利根郡片品村越本でも行われている。赤飯をふんだんに使う馬鹿騒ぎのために中止したこともあったそうであるが、伝染病が流行したのでまたやるようになったとのことである。とにかく、県内ではめずらしい風習の一つといえよう。片品村花咲の「猿追い祭」も、赤飯をふんだんに撒き散らす行事があるが、赤飯と祭礼行事に何か関連があるのかも知れない。

生枝のえっちょう祭

生枝の神社では毎年九月末に行われる例祭のときに「えつちよう祭」とか「ええちよ祭」とよばれる行事が行われる。この神社の祭神は日本武尊である。当日になると、定められている古い家柄とされる小林、南萩原、中村といった姓の家十二戸から一白二升づきの重ね餅（お供え餅）を供える。これを「おとな（大人）餅」ともよんでいる。区長が先に立つて祭礼のある神社へ向うが、このとき十二戸のものがそれぞれ重ね餅と毎戸から出した五合餅（切り餅）をお盆に載せたもの、荒削りの大きな椀七つに盛った赤飯、その他の供え物を盆に載せ、右肩の上に支えて並ぶ。社前に着くと、一列になって社殿の周囲を廻りながら大きな声で

今年もええちよ

と前半分がいつてお盆を上には差挙げると、後の半分が、

今年もええちよ

といつて続き、その都度盆を上げたり下げたりする。こんどはおなじように、

来年もええちよ

というと、後がまた

来年もええちよ

という。さらに、

去年もええちよ

といいながら社殿を三回まわる。廻り終ると神前に大きな重ね餅を供える。そのあと、去年の祭のあと今年の祭までの間に生まれた男の子と女の子一組を選び出し、男の子を腰帯をもって女の子の上にする仕草をする。このとき男の子に二度上にされ、女の子は一度上にされる。これで祭は終わるのである。（鶴淵螢光氏「村の伝説と亡び行く童謡」参照）

これと似た祭を利根村藪原で調査したことがあるが、違う点は藪原では、上組と下組から男の子を一名ずつ選び出し、以前学校の運動会でやられた騎馬戦のように両組の子供を乗せ、神社の鳥居のところで組打を

やらせる点である。若し敗けた組はその年は不作であると伝えている。藪原では「えつちよう祭」とよんでいるが、生枝のように昔は男の子と女の子であったのかも知れない。豊作は「産び」であるという古い信仰がもとで、性の営みを神事化したものと考えられるが、いずれにしてもこの型式の祭は県内では利根郡の東入り地方にしかないことは十分注意すべきことであろう。

岩室の恥かき祭

岩室の諏訪神社の祭は毎年九月の申（さる）の日に執行されるが、片品村花咲の祭が旧九月の中の申の日に行われるのと関連があるろう。ここでは祭の当日一升のアワ（粟）の餅を八箇取とか十箇取とかその年の作柄によつてきめる。米の餅はつかない。石高に応じてアワを出し、これで餅をつく。神社に供えるものは、サイの目に切り、大きな椀二つに盛って供える。参列した者には後でめいめいに配ることになっている。この祭の日は旧い家柄格式によつて祭礼の拜殿の順序が定められていて、中村、岡村、松井というように席順がある。譜代百姓といわれた者は拜殿への昇殿も許されなかつたそうである。なぜ恥かき祭とよぶのか明らかでない。とにかく、産土神の神事ことに特殊神事は年々減びてゆく現在、白沢村の祭礼行事には古いおもかげをのこしている点で注目される。

はじめに

生老病死というが、人の一生に関する資料では、産育、婚姻、葬制に関するものが多い。これは、従来の調査でもこの三点が集中的に調査され、少年期から老年期までの永い間に、婚姻関係のものを除くとほとんど僅かになってしまふ。誕生、結婚、死が人生の最も大きな節であったことから、これに関係した行事的なものが多く残り、平日、平年といったものが余りにも日常的で、意識化されていけないためであろう。

就中少年期の問題は、現代社会の大きな問題であり、家庭内における子供の躰が極めてあいまいである。親が子供の躰に自信をもっていない。勤労意欲、金銭関係、礼儀作法などの面で今後の青少年問題に大きく役立つ民俗が得られればと思ひ、今回の調査でも可成り突込んで問ひかけてみたが、それ程の成果は得られなかつた。特に、神仏に依存して子供の生活を律していた日常の生活が、戦後の思想一変、社会の変容に伴いほとんど失なわれてしまつてゐる。七歳までは神の子、十五歳になれば一人前という日本人の躰の段階、大きな節を、もつと掘りさげて見ることが必要であつたと思ふ。

資料の多く集められた産育、婚姻、葬制の問題は、過去十回の民俗調査報告書のひとつでふれた問題であり、白沢地区が、片品の民俗(山村部)と榛東の民俗(平地部)の中間的、接触地的な感が深い。ただ、婚姻関係では、トンビの羽、テジメ、ブンモギ、カリブンなど言葉とし

ては可成り珍らしいものが集められた。このように珍らしい言葉の採集は、他の部門でも多く耳にした、葬制の合切袋、ジガイ銭、七ヘエ袋、ヒカガリなどもその一例である。

次に、人の一生の項目であるが、死の前兆、魂呼び、再生なども一括して葬制に入れ、出産と育児、少年期から老年期まで、婚姻、葬制の四項目に大別した。当然別項目をたてるべきものもあつたが、資料の分量が余りにも差があり、比較的關係ある項目に含ませた方が便利であると思われたからである。(近藤義雄)

一、出産と育児

妊 娠

だいたい一ヶ月もたてばわかるのだが、恥ずかしいような、かくしたいような気持で、今のうちに派手なお祝いさわぎなどなく、産婆にも行かず、母子手帳なんかもなかつた。(上古)

「産みはらみは病気ではない」ので、産前は何をしてもよい。妊婦はよく働くほど産は軽いといわれた。(高平)

妊娠をまず姑につげる。「ワシも始まつたようだから、お願いします。」という。ここが嫁姑の仲のむずかしいところである。

五ヶ月目の戌の日に岩田帯をつける。

女は右腹、男は左にゐる。腹が平だと女で、出っばっていると男である。また、妊婦の内モモに一本すじがあると男で、二本あると女であるという。(下古)

出産部屋

お産部屋というのはどこの家にもないので、一番暗いような部屋、茶の間の裏の寝間に使っている小座敷(ナンド)が産の部屋になる。この部屋の床板は、縁の下の掃除をするためもあつて二枚くらいとれるようになっていて、お産の汚れ水などをここに捨てる。(尾合、上古)

高平では、納戸が神棚の裏のため、神様の前を通らないで出入りできるからという。

お産の方法

昔は、ウツブサメがふつうで、力が入って楽だという。

お産は汚れるので、フトン皮のぼろや、やくざのふとんを、わらを敷いた上に敷き、枕には、小さいわら束を二十一把まるいて、かっぱとウラ(株と先の方)をぶつちがいにして束ねたものを使った。たいがい年寄りがつくつてくれるが、お産をした人は急に枕を下げるとノボセルというので一日一把ずつぬいてだんだん枕を下げてゆき、二十一日でふつうの枕になった。年寄りがいなければ自分でつくる。

この枕は、お産のときに前におき、これにつかまわって力を入れたものだ。だから昔の人たちが、生まれたての赤ん坊をもらつて来たことをいうのに「子どもをシビの中からもらつて来た」というが、こんなところからかも知れない。

戦争後は病院に行つて生むようになったので変つちやつた。

(岩室、上古)

高平では、灰を入れた小さな布団など作つて用いた。また、平出では、わらたばを二十一把つんで、それによりかかつて生んだ。それを毎日一把ずつとり去つて、二十一日目にウブアケになる。生れるとすぐウブカミサマにお灯明をあげた。

尾合では、お産を布団の上でするようになつてもわらを三本布団の下に敷いた。そうするとお産が軽いなどという。

初産

初産はどこの部落でも嫁の里で生む。しかし、里でお産があるときはさけるようにした。もつとも、棟をかえればよいという。勝つか負けるかどちらかになるから。(平出)

また、初産に旦那がついていると、次回からいつも旦那がいないと生れないというので、初産には旦那のついているのをきらつた。(高平) 里へ出産に帰るときは、十日前程に姑が送り、生んで二十一日目に帰る。(下古)

とり上げ

お産は、どこの部落でもふつうは、おばさんとか、近所の上手の人がとり上げてくれた。産婆にかかるなどということはなかつた。

自分でとり上げた人

私はお産は軽い方なので、最初の子どもたちはとり上げてもらつたが、後は自分でやつた。自分で汚れものなどを始末して、十二、三の子につらめさせておいて、生まれた子の湯をつかつてやつた。ヘソノ緒も自分で切つてやつた。軽かつたからできたのかも知れないが、姑さんでもいなかつたら自分の食べるものや、子どもの面倒は自分でして、寝ていなかつた。(上古 小林キイさん)

この土地の人の話だが、ある人は屋根替のしごとの手伝いをしていううちに産気づいてきたので、家の中へ入り、そこでお産をして自分で始末してから出てきて再び屋根屋の手伝いをしたという。屋根屋の方は、見えなくなつたようだがどうしたのかなあと気にもとめずにいたところが、聞いてみるとお産をしてきたという「うそのような話」でおどろくと同時に気味が悪くなつてくるし、お産でけがれているのだからいやがつたがその後ずっと手伝つて、夕飯ごしらいまでしてくれたという。

この辺の女の人は、ふつうならお産をしても三日ぐらい寝たぐらいで、その後は外へ出なくも家の中のしごとぐらいはみんなしたものだ。

(上古)

トリアゲ水

産室はふつうナンドになるが、この部屋の縁の下が二枚くらいとれるようになつていて、ここからトリアゲ水を捨てて、とり上げた水は陽にあてるものではないといわれる。

うぶ湯

うぶ湯は、ジフクのきわを掘つてその中に捨てる家もある。これは板のはげない家などで、とりあげた水をまけたジフクのところを一番先に通つた虫けらなどが、その子が大きくなつたときにきらいなものになるという。(下古)

下語父では桑畑に穴を掘つて塩で浄めてうめた。

尾合では、昔は生後十五日位入れなかつた。ぬるく水をうめた湯を使つた。

後産の捨て場

後産、エナは、山と畑の境のところの捨てる井戸があり、そのアナッコにぶんなげる。渡辺トローシローさんの畑のところと、カツチャンの山のところにある。七尺ぐらゐの深さで石垣でつくり、石のふたをしておく。生まれるとすぐにエナをぼろや紙に包んで、しばつて捨てる。

近ごろの人はみんな病院で生んだりするからどうにするかわからないし、こんな井戸があるのも知らない。(上古)

尾合では、今は墓へもつていつて埋める。昔は墓に深い穴があつて、そこへ入れた。

高平では、峯堂に穴が掘つてあつて、そこまで棄てにいつた。墓地に埋める人もあつた。

岩室では、今はお墓だが、昔は縁の下に埋めた。人にふまれないようにといふ。

下古語父では、エナ捨て場に捨てた。

へソの緒

へソの緒は、人差指の第一関節から第二関節までの長さを三つ合わせたところを麻で結わえてハサミで切る。竹のへらを用いた人もあつた。

以前はトボに捨てた(下古)

昔はカヤギー古いカヤを二つにさいて、そこへへソノ緒をさして(はさんで)スースーすると切れるので、これでやった。

ふつうにはカミソリを使う。このカミソリは一週間は使わない。塩水でキョメてから使う。手も塩水で洗つてキョメてから石けんで洗つた。

へソノ緒は麻でしぼる。長さは一にぎり半ほど残してしぼるもので、早ければ五日、ふつうで七日くらいでもげるものだ。(上古)

へソノ緒は、紙に包み名をかいて、箱に入れとつておいて、その子が九死に一生のときなどせんでのませるとよいという。

(尾合、岩室、高平)

へソノ緒は、長く切ると長命であるという。また長く切ると虫が強いともいう。(生枝)

生ぶ毛

オボ毛は一週間目に名を付けた時剃つた。男女共頭を全部剃つた。産毛は腹の中から出たらば一旦は剃らなければ高い山へ登れないという。

すつた毛はお稲荷様の下に埋めた。(尾合)

マクリ

昔は赤ん坊は生れるとすぐマクリをのませた。これはカニババを出す薬になつた。今は飲ませず、水のような乳ですませる。(下古、尾合)

新生児には、赤い絹のモミをマクリの水につけて吸わせた。今は砂糖水を吸わせる。

一昼夜たてば母乳が出るが、初めの乳はしぼつて、人の踏み歩かない所へ棄てる。粗末にすると乳があがつて出なくなるといふ。(高平)

産婦の食事

産婦は、お産をして胃袋がゆるくなつていて、胃に熱がこもっているから一度にたくさん食べるなといふので、回数は多くてもいいが量を多く食べるなといわれた。

食べるものは、おかゆと、かつぶしみそで、これを食べていればまち

がないもので、甘いものはよくないといって食べられなかった。

おかゆは土鍋で煮て食べた。ふだんは米は食べないでお産のときに米ゾッキを食べるのだから、家中でみんなが食べるわけにゆかないのだから小さなもので煮たんだろう。

特別にヘッスイを作つて煮るようなことはしなかった。(上古)

産婦は青い物を食べると、子の便が青くなるといわれ、カツブシミソ・カンピョウのおつゆなどをおかずにしておかゆばかり食べていた。

(高平、平出)

二十一日間は粥、かつぶしみそ、つかぜんまいのみそ汁を食べて必ず寝ていた。油もの、梅干、からしは食べてはいけないという。(下古)

食いぞめ

男の子は百二十日、女の子は百十八日目にする。小豆の御飯又はおこわめし、この時も硯とか針道具、針糸等を上る。この時赤ん坊に一粒か二粒御飯をたべさせるが、不思議にたべるものだ。(尾合)

産着

黒のナナコで、全部染めぬぎ、松竹梅などのガラの入った紋つきの重ねで、広袖で袖口がないものを、どこの家でも初孫につくった。

お宮参りにはこれを着せて行ったが、実さいには着せるのでなく、かけ衣裳だった。今はしない。

生まれた時に着せる着物は、麻の葉の黄色い着物で、裏もつける。

(上古)

産衣は里から贈られる。肌衣はうこんのさらし。ほかに麻の葉模様の着物。丈夫に育つように。またウブアケの時にお宮参りのキモンを届ける。羽二重、紋付、ノシメ模様。(平出)

オボの神

神棚の下の所や床の間にオボの神様を祀る。お三夜、お七夜などのお祝いの時には赤飯を供える。親戚の者に、たとえ一箸ずつでも赤飯を分けて食べてもらう。床の間に男なら筆。そろばんなど、女なら裁縫道具

などをいっしょに供える。(尾合、高平)

三夜目(サンヤメ)

赤ん坊が生まれて三日目ぐらいに、あずきのごはんをたいて実家の親や、近所の世話になった人に来てもらって食べてもらう。(上古)

生後三日目に、額に犬の字を書いて、米、豆を持って、近所三軒の便所をまわる。これをオヒガミメーリという。この時、橋をわたらない方がよい。(平出、岩室)

生後三日目に、近所の橋を渡らない家の便所を回り、戸を開けて拝ませる。便所神はご神体はない。

「お三夜参り」ともいい、「三夜めになった」ともいう。(高平)
上、下古語父ではお七夜に便所をまわった。オヒカミ様まいりともいう。

お七夜

生後七日目に名を付ける。三つ選んで紙に書き、包んで稲荷様の前におき、好きなのを一つだけ引いて来させる。その名を授った名前とする。この時、子供が丈夫の人に頼んで名を付けてもらうこともあった。

しかし、名づけ親へのお礼は別にしない。名が付くと紙に書いて、神棚の前の柱に貼っておく。

昔は襲名で呼び名が使われた。(高平)

トリアゲバアサンや近所の人にもきてもらう。(岩室、平出)

命名

お七夜の時つける。三つのよい名をつけてこれを稲荷様にそなえ、がんぜない子にひかせる。あらかじめきめておいてそれだけをひかせる時もある。(平出)

二十一日目につけるところもあるが(下古)、三夜目かお七夜のどちらかでつける家が多い。尾合では三夜目に命名し、赤の御飯をたく。このとき床の間に女の子なら針道具、男の子なら筆と硯を飾ってウブの神様にあげ、それを近所の子供、お箸で少しずつ取り分けてやる。そうす

ると賑やかに暮せるといふ。(尾合)

最初の子は、嫁の家で生むので実家の方(里方という)でつけるのが多い。祖父がいるときは、その意見が強い。一般には、名前をつけるには母親の力が強くでる。

いくつかの名前が考えつくつと、半紙などを細く切って三本くらい気に入った名前を書いて、おいなりさんに上げて、その中から小さい子に一本ひかせる。それがおいなりさんから授けたものだといつてつける。

以前は、戸籍に届けてある名前と、ふだんよんでいふよび名と、二通りあった人がいる。(上古)

ウブアケ

女の子が生後十八日、男の子は二十一日がウブアケとかオボヤキといわれる日になっていて、大がいは二十一日目にする。赤飯をふかして祝う。(上古)

ウブアケは、ウブスナサマ参りの日になっていて、赤ん坊をとり上げてくれた人が抱いて行くとか、近しい人が抱いて行くとかして、ウブスナサマにお参りにゆく。オサゴをもつてゆく。(上、下古)

尾合では、この日八幡様へ連れていく。高平、岩室、平出ではこの日産見舞をかえしお祝いをする。但し、高平では三十三日目がウブスナ参りの日としている。

食い初め

生後百日目が食い初めで、子どもの茶わんやはしなどを一通り買ってくる。特別におぜんはつくらずに、ふつう食べてるごはんを一粒ぐらいかんでくれる。

歯がためといふことは聞いたこともない。(上古)

高平では百二十日目、下古語父では百十日か百二十日目にする。このとき小豆飯をたいてお産の神様にお供えてから食べさせる。このとき男の子には墨と筆、女の子には針とはさみを膳に添える。

捨て子

父親が男の厄年の年に生まれた子(四十二歳の時の子)は捨て子をすることにきまつている。村の三本辻に、ミの中に入れて捨ててくる。捨つてくれる人とは話し合いができているので、赤の他人には頼まない。その後は拾い親としてつきあいをし、捨つてくれた方でも大切にす。ふつうは子どもが結婚年令になるまでつきあうが、ずっとつきあいをして自分の子のようにして御祝儀のイチゲンにも行かせる人もいる。たいがい自分の子のようにしてくれるので、嫁やムコにくれるときにも一応の話をして尽くす。(上古)

生まれて十カ月で歯がはえた子供はトツキトウバといつてきらわれる。この場合には、あらかじめひろつてもらう人をきめておいて、その子を箕に入れて辻にすてる。

女の子ばかり生まれたあとに生まれた男の子は、すてごされる。この場合も、ひろいおやをあらかじめたのんでおいて、辻にすてる。ひろい親は、子供の多い人をたのむ。

親が厄年に生まれた子も同じようにすてごされる。

ひろい親とのつきあいは、世話になった当座の盆正月のあいさつ程度。なお、子供が弱くて育たない家では、女の子には男の名前を、男の子には女の子の名前をつけると丈夫に育つという。

また、女親が四十八歳で生まれた子供は、四十八のハジカキッコといわれる。(岩室、下古、平出、高平)

お誕生

誕生餅

一升もちをついて、ミの中に子どもを立たせて背負わせる。このときに立てる子は丈夫に育つという。

あんを入れてまるめたちは、嫁方の親の方や、近親者、こんいな人にくばる。誕生もちをもらった家からのお返しには、靴、たびなど、何か子どもの身につくものや、おもちゃなどを買ってくれる人もある。こ

これは昔も今も変わらない。
お祝いのごちそうは、もちをつけているのでうどんが多い。赤飯の家もある。

この日には嫁の実家の母親もよぶ。(岩室、尾合、平出、高平、上古)

贈 答

里からは着物、おむつ、下着、米五升、かつおぶし二本等が届けられる。親戚は衣類等、近所の人には米等を贈る。これに対してオボヤケの二十一日目に、赤飯を炊いて配る。この重箱の中には大豆などを入れてかえず。マメに育つように。(平出)

親戚は米をもってお見舞にきた。(高平)

初正月には男児には弓、女児には羽子板を贈ったが、今は掛軸などになった。初節供は、五月男の節供には幟を贈る。おかえしは柏餅、女児には三月節供に雛を贈る。おかえしは餅。誕生餅は、それまでいろいろ贈られた家に配る。それに対しては、はきものとか、豆類を入れておかえしする。(平出)

子どもが生まれて初めての正月には、初正月のお祝いとして、かけじ(掛軸)弓、はごいたなどをくれる。女の子ならば、女のいる絵のものや、はごいたをやる。男の子ならば男の絵、弓などである。

戦時中は初正月というのが一時止んだが、現在は昔よりも派手になり、やるものが「こって」きた。(上古)

初めての三月のお節供におひなさまを買っておくる。ひなも、お茶坊主か、内裏さまにきまっていた。

昔は、三月節供には男の子にもひなを買ってやったものだ。ふつうは天神さまで、長い刀をさしたのもあった。男の子はそれだけ余分だったんだ。今は女だけになった。(上古)

嫁の里から御殿、お雛子を贈る。親戚は雛人形を贈る。(下古)

男の子の節供は五月で、のぼり、鯉を買ってやる。女の子には関係はない。(上古)

嫁の里からもらしい方の紋を上、くれ方の紋章を下に入れて、染抜きの幟をおくる(下古)

幼児の病氣

赤子の病氣の時、願かけは茂左衛門様などに頼んだ。(尾合)

ホーソー神様 ホーソーがすむと豆がらで棚を作って出した。
オチンコのはれた時 デエノクボ(川場と門前の境)にコボという神様がおり、そこに御願をかけた。(これは他村の話であるが採録しておく)(尾合)

夜なき 石尊宮にお参りすると直る。進ぜるものもかまわない。

(上古)

岩室では、刀を半ば抜いて枕元におくとよいという。
マツオさんがオマジナイをしてくれたという。マツオさんはビジャモンさんを信仰していた人である。
家でオマジナイをすることはなかったようで、となえごともない。

(上古)

虫封じ 尾合のお寺に行くとき虫封じをしてくれた。(上古)

岩室では、一音寺(修験)で木のお札をもらい寝床の柱にうちつけ泣くたびに軽く釘の頭をうつとなおるといふ。

ヒキツケ 最近近は流腸しろというが、昔は水をふきかけた。(岩室)

背守り 着物の背に糸で縫って紋をつける。柿の形やトンボに切抜いた布をつけたりした。(岩室)

ボンノクドの毛 ボンノクドの毛をのこす。鼻血の出たときこの毛を抜くと止る。また、火の中にくるびそうのとき、火の神様がこの毛をもつて助けてくれるという。ヤッコはのこさない。(岩室)

育児用具

イジメ 手のない家では、お誕生前の歩けないような子を、イジメの中に入れて眠らせ、家中で山仕事などに出かけた。

イジメは大正年代まで盛んに使ったが、戦後は作らない。今では正月の餅をしみないように入れて蓋をしておいたり、ご飯の保温に使うくらいである。わらを巻いて作った。(岩室、平出、高平)

子負い帯 やや太目の中に綿やその他柔かな芯を入れた帯で、子守りの時背負う。(尾合)

木箱の車 手製の板に木の幹を輪切りにした車をつけて用いた。

(尾合)

子守り よそ村の困っている家の女の子を子守つ子に頼んだ家が多かった。その子が大きくなるとアンネー(女中)となった。(高平)

しつけ 子供を育てる時の方針、余り叱言を言わぬようにした。

毎日子供にさせた仕事、据風呂もし。朝晩の庭や家のまわりの掃除。日曜には山仕事につかった。(尾合)

食べてすぐ寝ると牛になるといわれた。(平出)

安産守護

産泰様 勢多郡大屋(現前橋市)の産泰様にお参りし、お札を腹帯に入れてお守りする。お札参りは底なしびしゃくをもつていって納めるといふ話を聞いたが、実際に行く人は少ない。(上古、岩室)

梅本の観音様 沼田の梅本の馬頭観音にお参りする。馬桶をかぶり十二回いってくるとよい。(岩室)

水天宮 戌の日に水天宮のお札を受けてきた。(高平、岩室)

伊勢参りに水天宮のお札をうけてきて、そのお札をのむと安産ですむ。(上古)

塩釜様 宮城県の塩釜様のお札をうけてきた。(平出、高平)

サンゴ石様 沼田の戸鹿野橋の近くにあり、お産の神様としてお参り

した。(平出)

淡島様 淡島様に願をかけると安産ですむ。(下古)

十二様 山の神様もお産を守って下さる。近くの山の十二様を拜む。お産の前に庭へ出てその山の方を向いて立ったまま拜んだ。赤ん坊が出来てからお札参りに山へ行って十二様のところで拜んだ。(尾合)

便所の神様 便所を綺麗にするとお産が軽くすむ。(尾合、上古、岩室)

鬼子母神 乳が出ないとき、鬼子母神からオサゴを借りてきて、それで粥をつくって食べると乳が出る。乳が出たらオサゴを二倍しておかえりする。(下古)

お富士山 輪組分にお富士山と称する所があり、安産祈願に縫糸一かけをほぐして麓から木にかけていくと安産ですむという。(岩室)

産育俗信

子安貝を持っているとよい。しまおばさんはもっていた。(平出)

妊娠五月目の戌の日にさらしの腹帯をしめる。(平出、岩室)

鶏の卵を飲むとお産が軽い(高平、平出)

鶏の初卵を産婦にのませるとお産が軽い。(上古)

蛇のキヌ(特に青大将の満足したものがよい)を腹巻きに入れるとお産が軽くすむ。(平出、上古)

五月目の戌の日に腹帯をしめる。年寄り「男衆のフンドシの古いのを使うとよい」とかいったが、自分で買ったたりして八尺くらいのサラシをつけた。何の字も書かない。犬はお産が軽いという。(上古、下古)

ホーキをまたぐとよくない。(上古)

亀の子たわしがはやる以前は、わらをまるめてたわしをつくった。ぶざまに大きく作ったものを使うと後産がなかなかおきないで悪いといった。たわしを大きくつくと後産が大きくなるからという。(上古)

妊婦は火事をみると赤あざの子ができる。死んだ人を見ると黒あざの子ができるという。この時に鏡を肌身離さず持つていけば防げるとい
う。(平出、高平)

お産した時は穢れるから、一週間位は六尺位神様の処を離れて通れと
いう。(尾合)

産婦は産後二十一日間は同じ火の所へ行くなといわれた。火のそばへ
寄ると火がけがれるから。(高平)

妊娠中からいものを食べると毛のうすい子が生れる。(高平)
うさぎの肉を食べると三ツ口の子が生れる。(高平)

男はお産の部屋へ入るなというので夫も入れない。(上古)

お産のときやつわりのときは、夫もともに苦しむ。お産のとき夫は石
臼を背負つて家のまわりをまわつていろという。今の年寄りたちの中
には実際やつた人がいる。(上古)

難産のとき主人が杵をもって家のまわりを三回まわつてつくといひ。
(岩室)

初児の時夫がいると、以後夫がいないと生れないというので里へ産み
にやる。(岩室、高平)

死産のときは川端へ赤い布に南無阿弥陀仏と千文字に書き、四隅に棒
を立てておき、通行人が水をかけてやる。色がさめてくると仏が救わ
れるという。(岩室)

産婆さんが「一、二、三の紐をとく、アピラウンケンソワカ」と唱え
ると産が軽くなる。(下古)

難産のときは、夫が葦緒のぞうりをはいて、馬の桶をかぶつて家のま
わりを三回まわるとよいという。(下古)

一、少年期から老年期まで

七つの折目と七五三

七歳になるまでは、後頭部の毛を伸しておく。その毛をトクイゲと
いう。丸坊主になると魚が食えないから、という。しかし体の弱い子が
あると、呑竜様のお弟子にして丸坊主にする。呑竜様は沼田にもあるが
たいてい太田までゆく。丸坊主になったのを七つ坊主、または呑竜坊主
という。

子どもは神様といわれ、立ち小便をしても、お客さまに失礼があつて
も叱らない。

七歳になると、ぼつぼつしつけを始める。子守りとか、台所の掃除と
か、風呂の火を燃すとか、軽い仕事からさしてゆく。また「七つ泣き泣
き泣きはなどり」などといって、田の仕事にも手伝わせる。(平出)

女三歳・七歳、男五歳になった時七五三のお祝いをする。

お祝いの着を作るが、男は洋服、女は長袖に帯・はき物まで揃える。

赤飯をふかしごちそうを作つて近親者を呼び、鎮守様へお参りする。

(高平)

三つ坊主、五つ坊主、七つ坊主などともいう。髪の毛をそつて、呑竜
様か沼田の鬼子母神にあげた。それからあとは頭の毛はそらない。(岩
室)

少年会

男の子は小学校へあがると入会した。少女の会はなかった。(高平)

道祖神子(別項)

青年団

学校を卒業すると男は青年団にはいり、女は処女会にはいった。

仲間入りするには入会届を出し、規則を守つてやることを誓つた。別

に書いた会則はない。

会費は集めないで、団で仕事をして金を取った。運動競技などがおもしろな事業だった。

男二十五歳、女二十三歳までで、結婚の有無にはよらなかつたが、だいたい結婚すればやめた。やめるには退団届を出した。

七部落の青年団が連合して、白沢村青年団となつていた。(高平)

力比べ

昔は若衆が集つて石かつぎなどとしてよく力比べをした。

二十貫の石と三十六貫の石地蔵があり、三十六貫をかついだのは岡村八造さんだけだった。この人はこのかいわいで力持ちであつた。(岩室)

一人前

今では成年式後は、イッチョウウメーとして認められる。

もとは、男は兵隊検査、女は十九歳の厄年を過ぎれば一人前だった。

はつきりした基準はないが、仕事をおとなにカタツテついてやれればよい。男なら畑のサクを一日一反歩もエンガでおこしたり、クワできつたりできればよい。(高平)

畑うない 一日五畝。

桑こきは大籠で三ばい、二十四貫。

麦刈りは一把ずつしぼり五百把を一日で刈る。

草刈りは一日三駄。

糸とりは一日五升。

年令では十五歳から一人前として取扱われた。(岩室)

厄年

厄年

厄年は男二十五歳、四十二歳、女は十九歳、三十三歳である。少年会といっしょになつて道祖神やき(別項)をする。その晩(一月十四日)

家で甘酒をつくつて村中の人にのんでもらう。

厄落しのためには、このほかにお金を出しあつて、歌舞伎、浪花節な

どをやつた。最近は一人三〇〇円ぐらい出しあつて、これを子ども会に寄附したりしている。(平出)

女の厄年の人は、小正月の道祖神祭りの時、お松を燃すので子供達などが集る折に、賽銭や蜜柑を上げて子供に食べてもらう。(尾合)

上古語父では、女はみかん一箱、男は酒一升を道祖神祭りに持参しておさめ、また年の数だけ銭を火の中に投げこんで厄おとしをする。

年祝

七十七歳になると、子や孫や懇意の人に吹き竹を配つて祝う。吹き竹は青竹で、二本ずつ半紙に包み水引きをかける。これで火事などの時に吹けば吹き消すといわれる。

最近折り箱入りの菓子などを付ける。(平出、岩室、高平)

米寿

八十八歳の祝いは、内祝いで配り物はしないが、近所や親戚を呼んで引き物をやる。孫たちが相談して赤い帽子や赤いチャンチャンを作つて着せてやる。誕生日にするか、十一月十五日にする。(高平、平出、岩室)

白寿

九十九歳の祝いは白寿というが、したことはない。(岩室)

三、婚 姻

結婚相手

結婚相手

恋愛結婚のことをスキ同志、ナレアイ、クツツキ同志、クツツキメオトなどというが、たいていは、見合いもしないで、親同志の了解で話をすすめることが多かった。(岩室)

自分でみつけるより、人がみつけてくれる方が多かった。(高平)

また、親が「適当なのがあるげだが心配してくれないか」などと他人に頼むこともある。(岩室)

地おどり(村芝居)の折にいっしょになる機会が多かった。そうして結ばれてかけおちをする場合もありこれをツレダシという。たいていは世話好きの人やおしのきく人が仲に入ってまとめた。このようにしてできた夫婦をクツッキミョウトと呼ぶ。(平出)

仲人

仲人には二通りあり、本人相互または両家の間で話が成立して、式の時だけ世話をするのをオモテ仲人。下話だけ進める仲人をシタ仲人という。(平出)

仲人は原則として夫婦だが、一人前になった男女が揃えばよいことになってる。(下古)

仲人というのは、親しい、兄弟、懇意な人とか、もの好きな人などがやる。年頃になると親兄弟が心配して誰か適当な人に頼んだりするのでやってくるものだ。

実さいには下ごせえ仲人と、お座敷にすわる仲人との二通りがあると きもある。下ごせえ仲人は一人者でもできるが、ふつうには二人そろっていなければすわれないので、ニワカ女房をどこからか借りて来てなったりすることもある。(上古)

仲人をする人は、年まわり(同年、丙午、ごうの寅は良くない。女が一つ上なのは金のわらじでたずねてもないなどいい、良縁とされて いた。)やあの家とこの家と、学歴、財産、きりょうなどで見当をつけて、話をもって行く。

母の年、兄弟、財産、姉の嫁入先などをノートにつけておき、見当をつけるとだいたい合う。

早いときは、その晩に決まる。「だまっているなら、承知だな、よかつて。」といてしめた。(下古)

仲人が話しをすすめていくと、イボツキ(呉れてもよい同意の意向)が見えてくる。そのとき間をおかないで早く話をすすめるのが仲人のこ

つ。(岩室)

仲人は、話が進んで、嫁にもらいましょう、嫁にくれましょうという話になるまでは、お茶や食事を先方からもらってはいけない、といわれている。今は二人の間で話ができるから「仲人になってもらいたい」と、頼んで仲人に坐ってもらうので、どこでどうもらって食べても同じことになっている。(上古)

仲人七うそ、三百仲人五百の損、仲人の草履きらしなどということもいわれている。十三回も往復してまとめた仲人もいる。(岩室、平出)

仲人礼は、結婚式後両家の親が揃っていく。貰い方七分、呉れ方三分で礼金を包み、酒一升とモチ米三升を持参して行き、仲人からは、双方にお祝いとしてワイシャツ、反物、履物など贈る。(高平、岩室)

仲人は、三回しないと恩返しができないともいう。(岩室、高平)

トンビノハネ

仲人礼のことをトンビノハネという、よめ、むこが仲人の家へお礼として、赤飯かもち米と小豆をもって行った。それを仲人が、ご祝儀をした祝いとして、近しい人にくばった。赤飯は重箱にかくるくつめた。そこで、分量がすこしのたとえに、トンビノハネのようだという。(高平)

オタルイレ

結婚契約の成立した式。仲人はまず貰い方(婿方)へ行き挨拶。貰い方でも親戚、組内の者が集まっているから、そこへ出て、「どこそこの娘を世話したい。」旨をのべ、持参した酒二升を出す。組内の人がいないければ、組内をまわって挨拶する。そこで話しあうことは、結納、式日取り、方法、客等のこと。ついで呉れ方(嫁方)へ行って同様に、オタルイレを終る。(平出)

婚約が成立すると、日取りを決めて樽入れをする。

くれ方の家へ仲人が酒をもって行き、組内や親類に披露する。施主が仲人を連れて組と親類を回り、どこへくるとか、わしが世話をする

か挨拶する。そのあとごちそうになる。(高平)

樽入れのことを「テジメ」ともいう。このとき、仲人は貰い方から酒二升を預り、名刺代用として手拭をもって嫁方の組に挨拶廻りをする。

このとき結納、式日取り、方法、客等のことをきめる。(岩室、平出)

下古語父では、この日酒二升、するめ五枚、酒代三円を預って呉れ方へ行き、堅い家では、そのときお仲間をつける。呉れ方では、村の立合い人を頼んで酒樽をうけとる。

下ごせえがすんで、いよいよ結婚の話がにつまると婚約になる。テジメというのがこれで、タリイレともいう。

仲人は先に、もらい方で用意した酒二升をもってくれ方にゆき、本話をきめてくる。くれ方では近所の人を招んでオタルビラキをして婚約披露をする。(そのために酒が二升になった)沼田の辺では一升で、一生つれそうようにとっている。

オタルビラキは、このごろはしないで、祝儀の日にくめてやる。

もらい方でも仲人が帰って来るとおじさんおばさんや兄弟などのごく近しい人を招んでタリイレの報告をして一ぱいやる。(上古)

仲人の近所あいさつ

テジメの日には仲人は、くれ方、もらい方の両方の隣り近所をまわって、婚約の報告と仲人の挨拶をする。このとき名刺がわりに自分の名を書いた手ぬぐいを用意してまわる。仲人の負担になる。

生枝ではくれ方の近所はまわらない。

これできちんとしまる。(上古)

結納

結納のことや祝儀の日取りなどはタリイレと同時に話し合いがきまるが、結納納めは御祝儀の前の日が多い。昔は何日か前だったが、今は貸衣裳などの関係で前日になってしまったもの。

結納で一番問題なのは結納金で、時期の相場と家の格で額がきまるが

明治の後半から大正にかけて、高い方で十円、ふつうが五円というところだった。くれ方、もらい方の意向をうまくまとめて話し合いできめるので仲人は大変だった。(上古)

結納納めは、式の前日。多くは目録で処理する。実際の品物は当日届ける。祝金、支度等の目録を持参すると、相手方では、それに対して請取りをかえす。(平出)

結納目録は、次のようなものであった。

熨斗 白もく 右の品々いとも

御樽 帯 たく御受納被下

末広 襦袢 度候

白髪 道中着 年月日

子生婦 ゲタ くれ方実印

さかな 足袋

小袖 祝金

これが納まると、貰い方では受納仕候と書いて返し、それから酒の座敷になる。(下古)

結婚式の日、三日前に結納金と結納目録を仲人が持ってくれ方へ行く。くれ方では有りあいのもので酒を出す。この時はハダッテ(はでに)やらない。

お返しは別にししない。(高平)

ブンモギ

結納金をきめるについて、ある金額でこれら一切をすますというきめ方があり、ブンモギというきめ方は結納金をもってゆけば後の衣類や小物類一切は結納の品として持ってゆかなくもいいうことになる。

ブンモギでないときは、櫛 ころがい、足袋、下駄まで一切をそろえてつけるわけで、ヨメギラ(小袖の分)を要求するものもあった。

中には「向うさまの御随意で結構です」というのもあるが、組合が寄

つたところできめるものもある。

結納金は、所によるとムコの仕度金として半分返すところもあると聞くが、ここでははかま代とかいうのはない。

最近、したくは借りもんだから、嫁になる方から訪問着とかこういう洋服とかいうことで、もらいたいものをはっきり要求してくる例が少なくない。

こうしたことから離縁話になると、先ず結納金を返せということになる。(上古)

カリブン 両家の間がよく解っていて見るも聞かないような場合、とりあえず、婚家に行っていて、時期をみて式をあげるもの。つるさんは子どもができてから式をあげた。支度が間に合わない、年が悪い(つるさんの場合、十九の厄年だった。)などの理由による。

トマリソメ 式をしないで一〜二晩婚家に入るが、あとは里方に帰っている。実質的に婚姻はトマリソメをもって成立する。理由はカリブンと似ているが部落民の感覚では、カリブンよりも性質がよくないようにとっている。(平出)

タルイレがすむと泊りぞめをやることがある。何かの事情、たとえばもらい方で手不足だったり、ムコが応召するときなどのようなときは、親が片親ついで娘をつれてゆき、一晚泊って来た。これを泊りぞめとい、この後はいつでも自由に行ったり来たりできるようになる。泊った時は別に寝せることはなく、夫婦になるので、うちうちさかずきぐらいはしているのだらう。

尚年まわりが悪くなるときにもやることがある。(上古)

婚約がすむと、結婚式の前に嫁が先方へ行っている家もあった。トマリソメは、両者とも大丈夫だと安心させるため、まちがいない。嫁は仕事も手伝い、家族として呼びずてにされた。男は「さん」をつけて呼ばれる。(高平)

クセ直し、髪結い

嫁入りの前の日に髪結いさんに行き、髪を結っておきクセ直しをする。

ホンビの日には朝早く起きて髪結いに行き、お化粧をして、したくをする。(上古)

オチューゲン

嫁入りの荷物は、御祝儀の当日、馬につけて運んでゆく。大正年代までは馬だったから、これについてゆく人のことをオチューゲンといい、一人か二人行った。昭和になつては運送ができ、最近はトラックになったが、荷物と一緒にいく人のことをオチューゲンという。(上古)

長持ち

昔は、中以下の家の人は長持ちは持つてゆかなかつた。(上古)

嫁をはき出す

嫁いで行く娘がしたくをしていよいよ出かけるときは、二度と再びこの家に戻つて来ないようにと、ホーキではき出す、ホーキではき出される人もかなわないが、くれた嫁が戻つて来ても困る。(上古)

嫁

昔のたんすはふたつ重ねだから、馬につけたたんすのまん中にふとんを敷いて、したくをした嫁が乗つてゆすられて行つた。(上古)

カネの鏡

昔の人は嫁入りにカネの鏡を持つて来る。明治初年までは持ち歩いた。(上古)

懐中鏡

嫁に来る人は、帯の間に懐中鏡をはさんで来た。帯の間に入れてじゃまにならない位のもので、はこせこなんかとは別だった。(上古)

中宿

嫁の行列は、きめられた中宿に寄つて休み、嫁のしたくを直したりす

る。中宿ではお茶は出す。ここでお相伴が指図し待たせておいて取り結びの式にうつる。(高平、上古、下古)

門 迎 え

嫁が来るときには、紋入りの弓張りちようちんをつけてカドまでは、ムコと両親が迎えに出る。カタイ人は、うたいで迎えることもあり、嫁が座敷へ入るのもうたいでやる人もあった。

今はうたいがやれないのでやらない。(上古)

朝 客

もらい方から行くイチゲンは、御祝儀の朝早く行くので朝客とよばれ遠ければ、遠いほど早く行く。ムコの両親の兄弟、ムコ、ムコの兄弟などが行くが、近親順に目録を書いてもって行って差し出し、その順に並び、父方、母方に分れて坐り、ムコは父方の下座、仲人は最後に坐る。くれ方からはオシヨーバンが二人出て、先ずお茶が出され、そこで目録を施主に渡し酒宴となる。宴半ばのころ親が出て挨拶をし、盃をもって来て、「父の盃」だからというので上席順に親からさしてまわり紹介する。

オシヨーバンは、イチゲンにうんとおませるのがその腕の見せどころでいろいろやるが、イチゲンは昼はひきあげることになっていて、くれ方からのヒキモンは、床柱に坐った人に見せてからひきさげて、後から一度に届けることになっている。

仲人は嫁をつれてゆく大役が残っているのでそのまま残っている。

イチゲンの帰った後が一般の客の席となる。(上古、下古)

宴には最低三通りから、ふつう五通りの肴を取り膳にして出す。昼食はうどんを本番(本膳)に出してすませ、十一時ごろには引き上げてもらう(昼前に呼び客が寄ってくるので、座敷をあげるように進行する)。

披 露

(高平)

当日は組の人や親類を呼んで披露する。組内では十四、五軒から各戸二人ぐらいつづ来る。親戚まで含めるとふつうで百人ぐらいの人数になる。(高平)

昔の結婚式は一週間ぐらいかかった。前三日準備、当日、あと三日を「道具洗い」とした。(生枝)

夕 客

朝客が帰ると、嫁とその近親者が家を出て婿方に行き御馳走になる。これを夕客という。(平出)

このとき、昔は嫁はヒジリメンを敷いた馬の背に乗り、荷物も馬に両掛けをつけ、タンスを双方につけ布団は背につけて、アトミが一人ついていった。(下古)

イチゲン

中宿でひと休みし、したくを直したりした嫁と、イチゲンの人たちは、門迎えを受けながらオシヨーバンの先導で、縁から座敷に上る。嫁と姑の間での行事は何もない。

イチゲンは、出かけて来るときにザツケを食ってくるので、その時に坐った順に直ぐ坐る。

イチゲンの座がきまると、ムコとヨメをひとつきり借りてトリムスビをすることになる。(上古)

嫁 入 り

朝客が帰ると、昼食後嫁入りの行列が出発する。くれ方の客目録と受納目録(結納金額も記入する。破談の時には目録のものを返すので)を持っていく。

行列は親・叔父・親戚などで、嫁には叔母か姉妹がつきそい、髪結いもついていく。昔の嫁は馬に乗って行ったり、歩いたりした。

お仲間(チュウゲン)が一人(親類か組の者)ついて、荷物を取り扱う。箆筒・長持・行李・裁ち板・張り板・裁縫道具・鏡台・下駄箱など

の荷物を馬（今はトラック）に付けて、一足先に行き先方の座敷に並べておく。お仲間は一見（イチゲン）座敷に並ばないで、台所で食事をもらったが、最近では座敷へ並ぶ。（高平）

迎 え

聳と親とお相伴が弓張り提燈をつけて、嫁を迎えに庭へ出る。この時もとは謡をやったが今は略す。

嫁は玄関からでなく別の入口を使って茶の間からはいるか、直接にオキノデーからはいれる。家へ入る時の式は別でない。（高平）

トリムスビ

トリムスビの席には、ムコ、ヨメ、親、仲人、お給仕（三々九度の盃ごとの酒の給仕をする）をする子ども男女一人ずつと、村の誰かなれた人が出て、この人がさしずをしてやる。

トリムスビの部屋には、シマダイ、キンピラ、煮肴、スルメの巻いたものを三宝にのせて出す。煮肴は二通りぐらい出すものときまわっている。これらはさかづきごとの間に入れて出しておいて、嫁やムコにはさんでやるが食べない。

「二十年くらい前までは久保の方じゃ床の間に大根でつくった男のもの」と女のものとかざっておいた」という。（上古）

ヨメ渡し、ムコ渡し

三々九度の盃ごとで、親に酒をついでやれば、そこで仲人があいさつをしてヨメなりムコなりを先方にひき渡す。お渡ししますから我が子同様にお願いしますというような意味のことをいう。（上古）

取り結びの式

聳が上座、嫁が下座に向き合って坐り、親たちも仲人もつかない。取り結びの役の人が世話をやいて、三三九度の盃を汲みかわす。

親が丈夫の男女二人の子が、雄蝶・雌蝶になり、床の間に飾ってあった木製の銚子を持って酌をする。（高平）

親子固めの盃

取り結びの式のあとで、式の世話人が、親子の盃ごとを取りもってさせる。（高平）

御 冷 酒

トリムスビのしまいに御冷酒を出す。今は「御冷酒を出すべきですが省略させていただき、お燗酒にさせていただきます」といって、そこからイチゲンの席が始まる。（上古）

仏 だ ん 参 り

トリムスビがすむと、ここで嫁が家に入るので、仏だんの前に行つて線香をたてて拜むことになっている。（上古）

披 露 宴

取り結びの式が終ると、嫁方の一行を座敷に招いて、朝客の時と同じ順に並び披露宴に移る。

両方にいるお相伴が口をきいて、盃をやり取りしながらお互いに紹介し合う。宴が終れば嫁方は帰る。

宴が半ばのところ、嫁は支度を取り替えて、宴の座敷に出て「嫁のお茶」を出す。お茶をついで回りきれば宴は終りとなる。お茶菓子配られ、一同は帰る。（高平）

のぞっこみ

婚礼の席を、若い衆は障子に穴をあけてのぞっこみをするのが早くにはあったが、最近は見に来るのは、子どもと女衆ぐらいで、今は障子を開けて見せるから障子を破ることもない。

のぞっこみをした若い衆に祝い酒を出すことはなかった。（上古・下古）

嫁のお茶

イチゲンが帰つた後、嫁はしたくを着かえてから、茶の間へさがって近所の人たちにお茶を出す。そのときのお茶菓子は嫁が持って来るもの

で、一人ずつは喜んでくれる。お茶まで持って来る例は少ない。現在は近所の人たちが手伝ってお茶を出してくれる。(上古)

床入れ

披露宴が終り一同帰ってから嫁と婿は床に入る。仲人は二人が一緒に寝るかを見届け、女の仲人があとの世話までしてから帰るのが本来であるが、今は床入れの式までは見ないで帰る。(高平・下古)

床入りのふとんは仲人のしごとで、二人の床入りが無事にすむとびょうぶのかげで耳をすませていて、紙を投げたという。

今は、トリムスビがいそがしいくらいで新婚旅行に出かけてしまうのでそうしたこともなくなった。(上古)

平出の結婚式

嫁は家を出る時お稻荷様にお詣りし、村の神社にお詣りしてから、集会所に行き、そこで婦人会、青年団立合の上、報徳社長より「心得書」(写真)をよんでもらい記念品を貰って村を出る。この村にくる嫁に対しては、特別な村としてのものはない。また独特な入家式もない。結婚式でも、特別な婿まぎらわしといったことをしない。三三九度の盃ごとのあと、ヨメワタシという、両方の親戚の盃の交換がある。

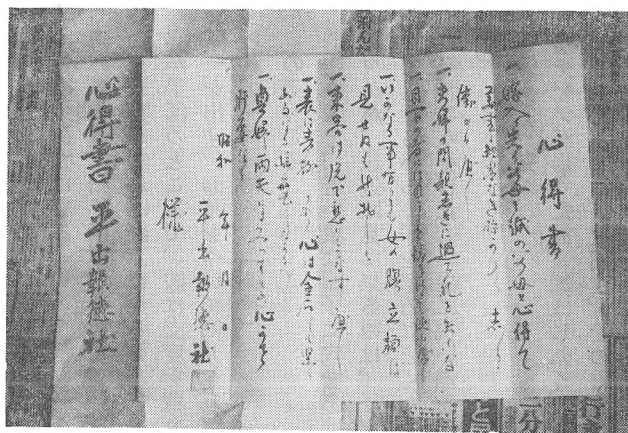
結婚式の宴会には、今は小さな盃だけになったが、昔は必ず七五三の盃がまわされた。七五三の大きいのは、七合・五合・三合入る。これを末広になるように、三・五・七の順にまして呑んだものである。

結婚式の翌日村まわりをする。また里帰りをする。その際婿は嫁方に行つて村まわりをする。(平出)

嫁の近所まわり

婚礼の翌日、また嫁のしたくをして婚家の母がつれて、隣り近所はもちろん、谷中をつれ歩いてあいさつまわりをした。大変なことだった。

現在は略式になり、婚礼の夜のうちに、その場で手ぬぐいを出してあいさつをしちゃうので楽になったものだ。貸衣裳と、かつらの損料が加



結婚心得書(平出)
(都丸九十一撮影)

かるので今はしない。

(上古)

鎮守様や区長、三役などの家をまわる。婿は村中、嫁は区長と近所だけである。(下古)

里がえり——女のイチゲン

嫁いで三日目が里がえりである。婚家の女親か、女親がいないときは女の近親者などと、ムコ、ヨメが行き、ムコも一晩泊るが、女親や近親者たちは帰る。女のイチゲンである。里がえりにムコが

何日も泊ると、「馬の面が長くなる」といわれた。

里がえりの帰りに、くれ方の女親と近親の女衆がイチゲンとしてついで来る。

これで女衆によるイチゲンが終る。(高平・上古・下古)

嫁が家に帰れる日

正月二日、小正月十五日、節供、彼岸(親がない時)八朔、夏振舞、秋振舞、農前休み、盆、鎮守祭礼、歳暮等。

これらの日には、小遣い銭を貰って行くが、実家でもくれる。実家へ帰って休んでくるが、自分の縫い物などふだんできないので持って行って縫ってきたりした。若夫婦で遊山に行くようなことはなかった。(下

古、高平)

ひなさま

嫁にゆくときには、自分が子どものときにもらったおひなさまの中から、一番気に入ったものをえらんで、嫁入り道具の中に入れてもってゆく。

花嫁の初節句というようなきたりはない。(上古)

伊勢参り刀

桑原さんのおやじさんは、ムコに来るとき刀をさして来た。実さいに使うこともないし、切れやあしねえだろが尺二・三寸のもので、伊勢参り刀という短かいもの。昔は御祝儀のときなどにつけた。(上古)

内縁 結婚しても氣にいるまで籍に入れなかつたり、子供ができるまで入籍しない人もあつた。昔はふつう二・三か月たつてから籍を入れた。(高平)

くつつき夫婦 親の許さない当人同志で決めた夫婦をいう。(高平)

ミアワセ 兄が死んで弟がなおること、また姉が死んで妹がなおることともいう。穏便で良いという。(下古)

離縁

夫婦仲は良くても、嫁と姑のおりあいが悪くて、別れることがある。また子供ができない時も離縁になる場合がある。(下古)

破談、結婚が破談になった時には、仲人でなく親戚が仲にたつがこと多い。(高平) テヅメ(樽入れ)になつてから破談になると、出戻りと同じように世間から扱われた。(上古)

旅帰り(タビゲリー) 夫に死別れて実家に帰ること。(生枝)

ふるしきよめご 正式に認められてはいるが、タンス、長持を持たずに来た嫁のこと。(下古)

十寸(トスン) 嫁ご

一寸、二寸、三寸……九寸、一尺と言えないで、十寸というようなば

かな嫁のことをあざける言葉。天保(銭)とか、八厘ともいう。(高平)

躰いじめ

昔は、躰は下敷きにされた。祇園の時に天王様の御輿を初めから終りまで、肩を抜かせずに担がせた。(高平)

禁忌

祝儀のときのあまり飯にみそをつけて焼いて食べるのは、みそつけるから良くない。

祝儀のときものもらいが来ても、嫁が家に入るまではと、物を出すのをいやがる。(下古)

四、葬制

前兆

「鳥鳴きが悪いから誰か死ぬよ」という。鳥の鳴き声が聞こえれば、その人の身内に悪いことはないもので、災難のある身内の人には聞こえないという。

神仏へ朝ご飯を進ぜたところへ、ウドンゲの花が咲くと変りごとがあるという。(高平)

夜、病人のいる家から火玉が出ると、その病人は死ぬという。(下古)

一つの経験 私の姉は水上に住んでいたが、その死ぬ時、私の家の戸をバリバリさせる音がした。そこは人の入る処でない処に私は寝ていたので、姉さんでも何かあつたのではないかなと思つていたら、沙汰があつた。(尾合)

千社参り

病気がおもしろくなく、心配のときに千社参りというのをやる。

「奉納千社参り」と書いたお札をもって、郡内広く神社をまわるが、ふつうは屋敷イナリにお参りしてお札をはつてくる。モリへ行けばいる

いろと石宮があるから、そこへもはって合せて千社になればよい。

終戦後にもやったことがある。(高平・上古・下古)

百社参り

千社でなく百社まわるのもある。日光神社に川場の青年団の上げた奉納札(四十二年のもの)がみられた。(上古)

お百度参り

大病人のいる家の人が、はだしで、鳥居のところまで戻ってはお参りを繰返しているので、近所の人が応援にいくため、早く森へ行くと大声でさけび、人々が駆付けて手伝った。十人ですれば十回お参りするとお百度となる。(岩室)

オカンノンサマ

大病で死にそうなときに、組中の人や親類の人が話し合って、オカンノンサマに行き、シンギョウウといって三時間ぐらい拜んだ。一つのお経をくり返してよんだ。

オカンノンサマにお灯りを上げて拝み、ローソクの火の立ちがよければ病人は丈夫になるといった。(上古)

呼び戻し

危篤の人が息を引き取ると、近親者が屋根のグシに登って、その人の名を大声で呼ぶと、生き返るといふ。お産で死にそうの人や、屋根から落ちて危篤の人などの時にしたが、「オトツツアン」「オッカサーン」「○○さん」などと呼ぶ。(岩室、高平)

組中の人や屋根にのぼって、一升ますの底をはたいて、ありったけの声で名前を呼ぶ。やる人は親戚や近所の人である。(下古・尾合)

子どもがヒキツケをおこしたときは、屋根に上ってグシにのぼり、子どもの名をよびながらマスのけつを飯しゃもじで叩く。(上古)

薬にする

病がなおる見こみもなく、病人が苦しがついてどうもしてやれない

ときには、病人の着物をもってお寺に行つて、「リシブンをくつてもらう」とかいふことをすると病人が薬になれるという。あきらめた最後のときのことである。(高平・上古)

生枝では、薬に引きとれば「一代」(往生)という。

生れ変りの話

下古語父に、タシという名の男の馬鹿がいて、あれもくれ、これもくれといつて物貰いに来た。その人が死んだ時に、近所の人や手に名を書いてやったら、ある村の大尽の家に生れ代ったという。(尾合)

死者の魂

よく死人の魂はとび出すという。お寺へ来るといふ。男の人は本堂へ女の人はお勝手へ来るといふ。(尾合)

末期の水

臨終の時に、回りに付いている人が、キビシヨ(久須)の口から水を少し口に入れてやったり、白布か綿をぬらして水を垂らしてやったりする。(高平)

枕なおし

死ぬと寝床を病室からオキノデー(奥の座敷)に移し、北枕に向きをおす。魔物が来てさらったことがあるといふので、切れ物(刀・ナタなど)を遺体の上のせておく。枕もとに線香を立てる。

また、笹の葉をすぐ神棚に上げて除けるようにする。(高平、岩室、下古、尾合)

枕めし

死者の枕めしは、ドジ(地べた)の上に三徳をたて、玄米を土鍋で煮て、お茶わんにいっぱい盛って、お茶わん(おわん)をまわしてきれいにしてハシを立てる。

煮るのに使った土鍋は四十九日供養のときに使う。

現在は玄米でなく、白米を使い、更には、みんなの食べるのと同じも

のを使うこともふえて来た。(上古)

枕飯は、土間で天井から繩を下げて鍋をつるしてたく。飯を山盛りにして真中に箸をたてる。

枕飯をたいだ鍋は一週間使わない。(下古)

死者があると、その人の今迄たべていた膳の上に、茶碗に一杯山盛りに飯を盛って進げる。まんまの上に箸を二本まとめて真直にさす。枕めしはおかずはつけない。これは近所の人がたく。イロリで炊かずに露地で三本の杭を立てて、それに鍋を下げて炊いてあげた。(尾合)

枕 団 子

大急ぎで粉をひいて、大きければ六つ位作り、茶碗一杯に盛って上る。枕めしや枕団子を作った時の灰は柿の木の下とかどこかいつもと異った処へ捨てる。(尾合)

昔は、洗わない玄米を、石うすで粉にひいてつくった。

現在は粉をひいてつくことはしなくなり、たいてあるめしを使って、ダンゴのようにまるめた上に、うどん粉(米の粉やそば粉の場合もある)をつけて、ちょうどダンゴのように見せることが多くなった。(上古)

丸型の団子を五つつくった。(下古)

死者の前にだんごを供える。このだんごはご飯を丸めて粉の上で転がして作り、箸を二本立てて茶碗に盛って進げる。(このだんごは埋葬の時墓に入れる)

新しい膳を作って死者に供えるが、この膳は葬式の本膳にお客に出すものと同じものを供える。(だから、拜みに行くと本膳がわかる)(高平)

笹 の 葉

死者がでると神さまに目をつむってもらおうというので、神だな、その他の神さまのところには笹の葉を上げる。近所の人にやってもらうもの

で、家人は手を出せない。竹ざさなのだが、ひのきの枝を上げることもある。

笹の葉は、片づける日にとるもので、キヨメの前にとる。(上古)

かざりもの

葬式のときつくるかざりものは、庭に、りゅうたつ(共有のもの)、六地藏、天蓋、四本柱をたて、モンパイ(モンペイ、門牌)をたてる。(上古)

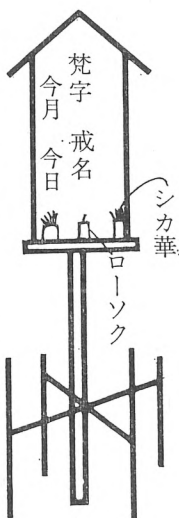
門 牌

モンペイには、「今日今日、戒名、家門の不幸」と書いたものに「是生滅法、寂滅為楽、生滅滅已、諸行無常」と書き、「仏法僧法」の文字が記されている。近所の人が寺にもって行って書いてもらうもので、竹に三尺くらいの大きさのものをつるすことになっている。(岩室・上古)

死者の家のカドに、通りから見える所にモンペイを立てる。長さ1mぐらいの板に死者の戒名を書き、屋根をつけ、棒杭につけて立てる。回りに四角に杭を立てて、十文字にオガラかクワデを渡してそこへいわきつける。

これは施しの印しで、乞食が来た時には必ず何かくくれてやる。モンペイはあとで墓地へ持って行き墓の前に立てておく。(高平)

門 牌



右図のようなものを、葬式の前日に用意しておき、葬式の当日門へた

てる。以前は七日間たてておいた。この間は、乞食などが葬家へくるとていねいに振舞ってやった。モンペイと呼んでいる。(岩室)

仕事の分担

葬式に参加する範囲は、高平約二百戸ほどが十六班に分かれ、その一班でも三班でもできる範囲で加わるようにする。五人組が先棒になって相談していっさいの見積りまでやる。ツゲ、穴掘り、帳場、料理番、坊さんのお相伴などの仕事を分担する。(高平)

死が確認されると、施主は組の者に集ってもらい、役場へ届書の用紙をもらいにいき、医師の死亡診断書をもらい再び役所へ行き届け、埋葬許可書をもらい、寺へ行って葬式の時間をきめてくる。寅の日友引きの日ははぶく。(岩室)

オトキ(本膳)の料理の材料や、引き物(まんじゅう・茶・ふる敷など)を注文するために、組の人と親戚と二人で沼田へ行って整えてくる。(高平)

病人の息が切れると、五人組をまわって頼んだ。どんな夜中でも、いつでも寄って来る。そこで施主からこういうようにしてもらいたいという意向が話され、五人組と相談ができると、いろいろの手配をし、一切のしごとを五人組がやってくれる。

夜中であれば隣りの人に話せばいつでも来てくれる。

五人組というのは隣り近所の小組のことであるが、これだけでは間に合わないときには隣りの組や、特に懇意な人に来てもらう。これをオオヨリという。(上古)

サタ(告げ)

死ぬと、組のテーを呼んで葬式の相談をする。式は組のテー(衆)がおっ取りきって全部やってくれる。

まず、寺へ知らせて式の日取りを決めてから親戚へ知らせるために「ツゲに行く。」ツゲは必ず二人ずつ組んで、一組が五、六軒を受け持

って行く。施主はツゲの人に昼食代を二百円ぐらい預けるが、ふつうは行った先の親戚で昼食を出す。荷物は持たない二人組なので、先方ではすぐにわかる。(岩室・尾合・高平)

告げに行くのは二人でゆくもので、五人組、隣り組で足りないときはオオヨリというので頼めば大体すむ。

告げに行く人は、もとはむすびの二つぐらいずつ持って出た。車もないころはすべて歩いたから、告げにまわるのもせいぜい二軒か三軒でいどで、西入り(新治村の方)に入るときは一軒しか行けないということもあった。(上古・上古)

昔の人は「告げの顔をみたら飯の用意をする」ということをいわれてきたが、時間には昼めしの用意をして出した。

今は、むすびは持たずに金を持たせてやり、遠くは電話とか、電報で間に合わせるようになった。(上古)

湯 灌

たらいに湯を入れ、近親者に手ぬぐいを分けて、死者の顔や身体をふいてやる。酒をつけて棺もふく。この時には着物を一枚ぬいでする。

湯灌がすむと風呂にはいる。この風呂にはほかの人ははいらない。

湯灌に使った湯は日なたへ棄てない。その手ぬぐいなどは、棺の中のすき間に突っこんだり、墓地に棄てたりする。

死者の着物を取り替え、古い着物などはあとで家の人が、田んぼの真中で燃す。悪い病気の時は布団まで燃す。(高平)

湯灌の湯は、庭でわかし、水の中に湯を入れる。親しい者が縄帯をしめてした。(岩室)

上古語父では湯は床下にすてた。

入棺(ニツカン)

湯灌がすむと遺体を棺に入れる。棺には死者が生前好んで使っていたものやお金を六枚入れてやる。今は紙で六文銭ができているのを入れ

る。

五穀袋を小布で三角にして嫁が作り、米・麦・豆・ヒエ・ゴマをほうろくでいって入れて、持たせてやる。五穀はよく煎って芽の出ないようにして、成仏しろというわけ持たせる。(高平)

五穀を入れる袋を合切袋がっさいぶくろという。十萬億土までの食糧で、生でいれると生える。すると死者が帰ってくると忌む。このほか合切袋には生前の日用品も入れてやる。(岩室)

着物の衿をとって着せ、その衿を帯にする。白のサラシでかたびら、手甲、きやはんをぬって着せるが、麻糸の端を結ばずに縫う。

またズタブクロ、ゴクブクロを白サラシでつくる。ゴクブクロには、そば・もみ・ひえ・あわ・米を入れる。

足にはほころばせた足袋とぞうりをはかせる。

棺は松またはモミでつくり、普通は座棺であるが特別大きい人には寝棺を使う。納棺後は縄でしばる。(下古)

ジガイ銭と称し、棺の四隅に銭を入れてやる。死者が盆月、彼岸月にあると頭にスリ鉢をかぶせてやった。納棺後はオキノデイ(奥の部屋)にすえ、線香をあげる。線香は四十九日がすむまでは一本であげる。なお、死者のまもっていた汚物は番たが貰っていった。(岩室)

ヌキダレの土砂

屋敷の東北の隅に稲荷様を祀る。その軒(ヌキ)の下の雨垂れの落ちる所の土砂(ドンシャ)を、死者の骨が固くなって曲がらない所に振りかけると柔かくなるといふ。そこで「東北の軒の下には小便するな」といわれる。稲荷は屋敷の守り神様。

子供同志がけんかの時「野郎、土砂をかけるぞ」とおどし文句をいうが、東北の隅のヌキダレの下の土砂のことで、かけられるとやっこくなるからだといふ。(高平)

通夜

入棺がすむと通夜をする。この夜は線香の煙とロソクの火を絶やさないといふ。(岩室)

親戚の者は、この晩は寝ずに守ってやる。かたい人は夜明けまで起きているが、たいていの人はつのんなりで休む。(高平)

香奠

帳場では葬式の参列者から香奠を受け付けて、引き物を渡す。葬式が終ってから、香奠で経費の支払いをして、差引きいくらの不足額が出たと収支計算をする。そこで不足額があると、子供たちに相談して香奠を割り当てて決着をつける。子供たちは生前に見舞を出しておくので、香奠は先に出さないでおく。(高平)

穴掘り

穴掘りの当番は四人で、スコップなどを使って墓地に穴を掘る。施主から清め酒が一升出るので、四人で飲む。(だからふだんは一升酒は買うものではないといふ。)

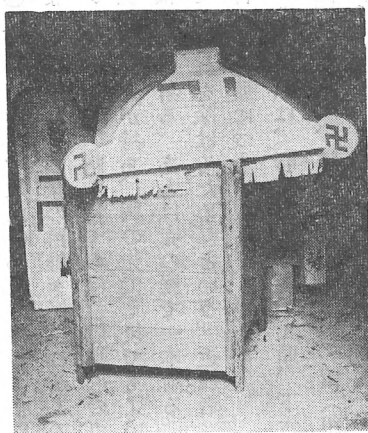
使った道具は墓地へ一週間から十日間ぐらい置きっぱなしにして使わない。

なお、身持ちの女の人がある主人は穴掘りに手を出さない。

穴掘りをした四人が葬列の時に輿を担ぐ。(高平)

葬具

葬列の道具は寺にあるものを借りてくる。行灯、六地藏、龍タツ(色紙をはる)などを借りて、手入れしておく。



岩室の葬式道具
(近藤義雄撮影)

弓は竹の皮を外にして作り、オガラ先の先と後に色紙を付けて矢を作る。(高平)

部落に葬具があり、墓地の近くの小さな小屋に保管されている。(岩室)

お寺にあるものを共同で使用する。(尾合)

葬式の時の髪型

女はわかれ島田というのを結った。尤も之は死者が、親とか近い人の時の事である。人に結って貰った。今はこの髪型もすたれた。(尾合)

喪服

昔は白無垢(シロモク)といって白であったが、今はむしろ黒の喪服ばかりになった。白い布(これは縫目のない白布)を被るとか、白紙を襟にはさむかした。女の帯は後ろでしめた。昔は三角の紙を額に当てる。(尾合)

ダミ

悪い病氣(伝染病など)で亡くなった場合には仮埋葬(ダミ)して置き、あとで組の人に本葬してもらう。(高平)

七へ工袋

白米をお椀の蓋で七杯すくって袋に入れ、葬式のあとで、近親者が寺参りに行く時に持って行く。この時に線香・ろうそく・弔旗なども数本持って納めてくる。弔旗の余った布は手伝った人に分ける。(高平)

野辺の式

坊さんが来て拜んでから、出棺となる。野辺の式は墓地でしたり、寺でしたりする。墓地の遠い人は家の庭で向きを変えてやり、野辺の式がすむと解散する。ふつうの参列者は野辺の終るまでは居て、あとは墓まで行っても行かなくともよい。

行列はタツ頭・銘旗(メイキ)・花輪・弔旗・行灯・位牌・膳・輿・天蓋・弓などの順で並ぶ。銘旗は半紙四枚を縦に貼った旗に「故〇〇〇

〇之霊」と書き、木にゆわえて持つ。弔旗は赤が先頭であとは何色でもよい。位牌はその家の跡継ぎが持つがこの人は晒して作ったチャンチャンを着ていく。膳を持つのは位牌持ちの妻や妹などの女があたる。弓は仏に近い人が持ち、輿の先でも後でもよい。輿が家を出る時に、家の屋根に向けて射る。あとは寺の庭で一本射る。昔、仏をさらう魔物がいたので、それを除けるためだという。近親者は輿のあたりにつく。坊さんは行列の先頭につく。(高平・尾合)

葬列の順は、岩室では灯籠が先頭、下古語父では、旗・六地藏・竜・位牌(施主)、膳(子供、兄弟)・棺(組の人四人)の順で縁側から出す。

埋葬

行列は墓地でまわるような事はしない。穴へは小石を入れる。これを枕石という。寝棺の場合は北枕に、立棺の時は北向きに埋ける。この土地は普通火葬はしない。(尾合)

遺体が墓地につくと、麦わら・ソダ・シャモジなどで火を燃す。魔除けで、この火にあたると風邪をひかないという。

棺を穴におろすと、近親者からシャベルで少しづつ土をかけてやる。その後、組の人が土をかけて埋ける。

土を盛った上へ重い石をのせ、三本柱(木)を立てて石をわら縄で吊るして目ハジキにする。これはブッチメで魔除けである。墓標は立てない方が多い。中流以上の家では立てる。長男が持つて行った野位牌を置き、膳を前に供える。ハナや茶碗なども供える。

埋葬から帰ってくると、家の入り口に立白の形を半紙に書いておき、盆の上に皿に塩を盛っておく。これで身を清めてから家にはいる。

埋葬後、親戚の人や組の人がいっしょになって、夕飯前に清めの酒を飲む。この時はケンチン汁をおかずに出す。(高平・岩室)

岩室では、穴は番太が掘った。埋めるときも番太が世話をした。帰っ

てくると、女衆はオコソ頭巾（白）を縁に張っておいた繩をくぐらせて浄める。施主は会葬者に一飯振舞って帰ってもらう。

なま墓場

白沢村は単墓制である。

墓は、土まんじゅうの上に青竹をたて、そこから縄で石をつるす。石は土まんじゅうの上にはのせない。山犬を防ぐという。墓の周囲には割った竹をさす。墓なおしは三十五日とか四十九日にやる。（尾合・上古）

火のキヨメ

仏を出した後で火をキヨメる。

イロリに塩をまき、チョッパンの上にイロリの灰をとり、荒神さまの灰もとって、塩もせて三本辻に出す。チョッパンの中央にはホーエンサンが拜んだゴヘイをたてる。（上古）

お念仏

葬式のすんだ晩、組の人が寄って一時間ぐらい念仏をあげてくれる。

念仏の本は寺で貸す。先導者が鐘をたたく。この時に色をつけないオコワ（小豆を入れる）をふかし、むすびに握って念仏玉として参列者に配る。（高平）

盆の念仏は堂坂の火の見の根元に堂があり、そこで盆の十六日に念仏をするのが例である。（尾合）

忌中念仏

十三仏・六観音などを葬式の夜唱えて供養する。

六観音念仏

六観音に六地藏、秩父薬師、初瀬の観音、南無十王に十三仏、三世の諸菩薩南無阿弥陀

なお、仏が和讃の好きな人であったときなど、観音和讃・入寂和讃・

野辺送和讃などとなる。このあと小豆がゆを出した。（岩室）

上古語父では、シュショウギを誦してから続ける。寺から印刷したも

のがきているので、みんな覚えている人も多い。

葬式の晩、仏をおいた部屋に近所や親せきが集って念仏を唱える。

仏に何にか話しをさせるようにと、交代でシキビの葉を入れた茶わんの水を何回も取り替えながら、十三仏の念仏を唱える。十三仏を十三回唱えて一区切りとしたものを十三区切りで終りになる。おんどをとる人がおり、掛軸の十三仏を下から一区切り一仏づつ上に指差して最後が一番上の虚空蔵となる。掛軸のないときは指で数えている。

念仏が終ると念仏玉という、赤飯のにぎりめしが一人一個づつ渡される。昭和になってからは、まんじゅうが一人五个当てとなった。

又昭和十八年頃までは、和讃会というのがあり、一定の支度まで作り葬式のときには、この人たちが、「野辺送り和讃」を唱えながら野辺の送りに参加した。

不景気になるると念仏が流行するといわれている。（生枝）

位はい分け

親の位はいは、子供たちに分けてやる。このとき、位はいと一緒にもたせてやるものはつぎのようなものである。

米…一、二升を袋に入れてやる。

あぶらげ…三、五枚、わらのつとっこに入れてやる。

ローソク…三本ほど

線香…二、三束

位はいはさかさに背負っていく。位はいをもらいには、組のものが一人、サツソイといって、ついてくる。位はいをもらったときには、必ずその日のうちに家にかえることになっている。家が遠くかえれないものは一旦家へ出て、べつの入口から入って泊っていく。

位はいをもらってかえったあと、都合をみて、カエリドキをつくる。

ケエリドキともいう。これは、もらつてきた米などをたねにして、組内の人たちをよんで、おふるまいをすることである。（上古・高平）

ユズリ

近親者には死者の身につけていた物を一品ぐらい分けてやる。お金を分ける家もある。最近はお位牌代を出さないかわりに、ユズリも受けないという傾向になった。(高平)

引き物

もとは、膳の上に残り物を五個つけるだけで、子供にも引いていた。その後、親父が代表して引いてもらうようになった。(高平)

墓参り

葬式の次の日に近所の人が寄って道具を片づけ、墓参りする。菓子・だんご・花・水などを持って行き供える。墓なおしは四十九日たつてからする。三十五日でする家もある。

前は七日間毎日寄って墓参りしたが、今は次の日一日だけで済ませる。

七宝塔婆を墓に供える。ほんとうは七日ごとに一本ずつ持って墓参りするのを、一ぺんに持って行って墓に置く。(高平、下古)

岩室では、もとは七日目まで毎日墓参したが、今は葬式の夜また墓参りをし、このとき門牌も持っていき、これを初七日のかわりにしてしまふ。

死後の供養

死者の供養は、初七日などもあるが、墓直しとしての供養は、七七日供養がある。これはふつうには四十九日といわれ、いそがしい時期とか、三ヶ月目にかかるとかいう理由で五七日供養(三十五日)にすることもある。

近親者が集まってやり、お寺に対しては四十九日もちをついて持って行く。四十九日のもちだが、お寺でも困るといふのを聞いて米三・五升くらいをもって行くところも出てきた。この日は酒も出す。(上古)

死後四十九日には親戚を呼んで墓なおしをする。土盛りの土を平らに

して、魔除けの目ハジキの石などもどかす。その上へ手頃な古い石塔を見付けて立てておく。

生前使っていた茶碗に水を入れて供えておくが、この茶碗は早く欠けた方が早く仏になれるので、通りがかった人でも割ってやる方がよい。

四十九日間は死者の霊魂は屋根棟にいて仏になりきれない。四十九日たたないうちは仏壇にも盆棚にも上げない。三十五日にでも墓なおしすれば仏壇や盆棚にあげられる。(高平)

一七日、三七日(ミナヌカともいう)などの日に供養した。昔は必ず四十九日迄したが、今は大概三七日で一応おしまいにする。七日毎の塔婆がある。元は葬式の棺台の周囲に四十九本の塔婆が立っていた。四十九日には近い親戚や組の人をよんで酒にうどん位で御馳走した。勿論坊主はよんだ。百ヶ日にも同じ様な事をした。(尾合)

アラボン

迎え盆のときは、アラボンでない家より遅れて迎えに行く。百八灯(篠の先にヒデをつけたもの)を墓までの道々に立てる。墓で火をもらって帰りに百八灯につけてくる。



盆花
(ひえ花 あわ花 かるかや)
(生枝)
(阿部孝撮影)

アラボンミマイ

そうめん、線香、ふをもって行って、「アラボンでおさみしゅうござ

います」と挨拶する。

親族がちようちん（岐阜ちようちん）を贈る。（下古）

新盆送り 新盆送りに藁人形二体を作る風習がある。これは新仏の守護にして仏を悪魔より守り、また無事盡園に至るべき供の者とか。盆の十四日に隣組一同新盆の家に集り、百八灯など新盆送りの諸具と共にこれを作る。十五日夕刻、隣組および親族で送る。百八灯を家より墓地に至る沿道に間隔をおいて、先頭の者が指して行き、灯を点じ、後尾の者がそれを集めて行き、墓地の間近の三本辻で藁人形と共に燃し、その煙に乗せて、新仏を墓地へ送る。一同墓地に至り、百八灯の残り八本を墓標の周囲に立て、焼香をして解散する。（高平）

年忌（年回）

一年 イッセイキ

三年 三年忌

七年 七年忌

十三年 十三年忌

十七年 十七年忌

三十三年 三十三年忌

昔の方がカタクやった。

三十三年忌というのと、たいがい石塔をたてたり、相当の金をかけた引き出もの（ヒキモン）をしたりして坊さんを頼んでやった。

景気がいいのかこのごろは石塔をたてる時期が早くなった。（上古）

高平では五年忌というのものもある。三年か五年どちらか一回すればよいという。

一年忌・三年忌・七年忌・十三年忌・十七年忌・三十三年忌などを行う。

三十三年忌には昔は酒を充分用い、引物などもした。神とう（神主、法印などの神様をおがむ人）をたのんだ。一本松の芯の立っているのを

その年回の人のお墓の前に立てた。これからは仏を離れて神になると云っていた。（尾合）

石塔

一周忌（セーキ）か、三年忌に墓石を立てるが、催促するものではないからゆつくりやる。墓は間（エーサ）には立てない。ふだんは墓をいじるなどないので、掃除もあまりしない。

石塔には夫婦の名を並べて刻んでおき、生きている人は朱を入れる。（高平）

墓地 個人墓地

子供の葬式

赤ん坊が死んでも、人数を少なくして葬式はやる。四歳以下は戒名が違い「○○孩

児」と付ける。（高平）

不幸のまじない

葬式が二つ続いたときは三つにならないようにまじないをする。わらたきづちに顔をかき、人形のようにして、仏の出棺が終わった後で三本辻に出す。墓のような土まんじゅうは作らない。

これで葬式が三度続いてすませたことにする。（上古、下古）

耳ぶたぎ

同年の子どもが死んだときに、子どもの耳にマグソ（馬糞）を拾って来ておしつけて、「ものを聞くな、ものを聞くな」といって、耳をたたくことをした。不幸の伝わるのを防いだわけである。（尾合・上古）

忌（喪）

死んで一週間以内に正月になる時は正月飾をしない。三十一日に近親の死者の報せがあると隣の人をたのんで棚松をおろした。（尾合）

葬式のあつた家では一週間は公式の処へは出なかつた。ヒカガリといつて神様には絶対にお詣りしなかつた。

「お産のあつた時も同様であつたが、産婦には一週間台所へ行かせなかつた。」(尾合)

口 寄 せ

明治の頃の事だが町(沼田)の長寿院の前に拝む人があり、女であつた。仏様(死者)が乗り移つて、その人は夢中になり、云い終ると、「ああ、ああ」などとあくびをして正気になつた。子供の死んだ時きいたら、やはり仏様が「こういう事になつたんで仕方がねえ」などと云つた。実家(川場の人)の母が死んだ時も聞いたら、おつかさんの云うような事を云つた。この女の人の事はオイチイサマといつた。蜜柑箱より一寸大きい箱に両手の腕をのせて立て、掌の上に顎をのせ、眠つたような顔をして眼をつぶつていて、終る時は「ウ、ウ、ウン」といつてそれから眼をひらく。(尾合)

死者の魂

よく、善い人の魂は天国へ行くといわれている。

古語父のタシは死んでS——の大尽に生れ代つた。その子の手に字があるので方々尋ねて、タシの墓場の砂を貰つてゆき、その砂を水で煮て洗つてくれたら手の字が消えたという。タシが死んだ時、タシの手に字を書いて埋けたのである。話者(角田政三郎氏)が明治二十九年小学に入った時、タシは生きていて六十歳位の白髪だつた。(尾合)

あかねざらし

産で死んだ時、因縁がわるいのだと三本辻に赤い布をかけて、傍の流れる水をかけて早くさらす。白くなれば浮ばれるという。(尾合)

年中行事

はじめに

戦後の生活状態が急変したために昔から伝承された年中行事についても、ここ幾年かで著しく改廃されている。老人たちは「今の若いものはめんどうがってやらないけど」といいながら、自分たちが守り伝えてきたしきたりを思い起して、根気よく語ってくれた。それらの中には、ほかの土地と共通したものも多いが、なかにはより古風を伝えるものや、この地域性を示すものなどがわずかずあった。

とくにこの地域の年中行事として特色のありそうなものを気のつくままにあげてみよう。

元旦にはできるだけ早く家じゅうが神社参りに行くが、その時に紙緒のワラゾウリをはいて行ったという。岩室では年始回りにも紙緒のワラゾウリをはいし、下古語父ではミゴの紐を付けた年始ゾウリをはいたものだという。

吾妻郡六合村をはじめ、県下各地で葬列に参加するものが必ずワラゾウリをはいく例が多いのと対照的だが、改まった装束を表わすもので、新しい特別製のゾウリで雪の中を歩くときに、心身の改まりを強く感じたことであろう。

また下古語父では、年始回りの時に今年の田植の日取りやエエッコの人足まで話し合っておくというから、年始回りは単なる饗礼では

なくて、労働関係の結束を固める大事な出発点になっていたことがわかる。

小正月のマユ玉を作る時に、生アズキを一粒ずつ中に入れて繭の形に作り、蚕神に供える風習も珍しい。アズキをサナギに見たてて、繭の形になぞらえたものだが、アズキのあんこを餅に入れる一般の風習との関連を考えさせる。

道祖神の厄落としが盛んで、ドンドン焼きの場所でミカンなどを配るほかに、家にまで友人や知人を招いてふるまう。利根・吾妻など山間部に道祖神行事が盛んなことをよく示している。

平出では初午の前の晩をオシラビマチといい、重箱の中に小正月の十六マユ玉をさしたボクをマブシに見たてて敷き、マユ玉を入れてオシラ様に供える。翌日、近所の人や蚕の手伝いにくる人と呼んで、マユカキと称してマユ玉を取り出してもらったというから、初午は養蚕の予祝行事になっており、養蚕の盛んだったことを物語っている。

上古語父では初午の朝、正月のお松をイロリでいぶすとオシラ様がその煙に乗っておりとくると伝えている。一般に初午はイナリ様を祭るようにならわれるが、ここではオシラ信仰とより深く結びついているのが興味深い。

山神である十二様を祭る信仰も山間部だけに盛んで、高平では「七ゲート八十二」といって、ゲートが七か所、十二様が八か所にあるという。以前は毎月十二日に山の神を祭ったが、今は二月と八月だけ祭る。区と公益社で共同して祭るために、公会堂に役職のある人が集まって祭るが、この人々には山の神信仰は生産と結びついて根強く生き続けている

いる。

三月の節供の贈答で、初節供のお返しに粉餅をつけて型に入れ色をつけたバナカタ餅を作り、菱餅の上にのせて配った。バナカタ餅を作る型が家々にあったというから、ある時期に流行したものであろうか。

六月一日は山の口で、上古語父では入会山の草刈りが始まる日になっている。この日に正月の供え餅や寒ざらしにした餅を粉にして、うどん粉でこねてヤキヘガシ（たらし焼）にして食べるという。よそでは多くカマノクチアケの日にヤキヘガシを食べると重くなったものらしい。

新盆行事の百八灯は伝統的なしきたりがよく伝えられている。高平では、新盆の家があると、迎え盆の前に組の衆が寄って、庭先に高さ十mほどの杉の木の先端に枝葉をつけた柱を立て、白張り提灯を高く吊るしてくる。

翌四日（今は五日）にまた組の衆が寄って、百八灯とわら人形を作ってくれる。百八灯はシノ竹に迎願寺ろうそくをつけたものを百八本作るが、現在は略して墓地に行つてから立てる分だけ二・三十本も作る。わら人形は一对作るが、青鬼と赤鬼だという。

五日の新盆送りに組の衆や親戚が寄り、用意した百八灯とわら人形と白張り提灯を持って墓地に行き、入口の道で燃やしてしまう。わら人形は精霊様の形代（かたしろ）であろうが、このようにして精霊送りをする例は県下で例を見ないゆかしい風習である。

尾合では鎮守の秋祭りに、境内でまんじゅうを投げたり、赤飯を十五鉢出して取りこしたりする「ヤアヤア取り」とか「手づかみ祭り」と称する楽しい神事が伝わっている。豊作祝いだろうが、珍しい祭りである。

豊作祝いといえ、秋の取入れ後の十日夜は、百姓の仕上げの豊年祝いとされ、旧十月九日夜、新米で餅をついてお供え餅を作り、十日夜には庭先にニューガラ様というワラニューウを三束そろえて立てた上にその

餅を供える風習が岩室などにある。新穀感謝の祭りであることがはっきりしていて、農民のそぼくな喜びが伺える行事である。

イナリ祭（屋敷祭）の時に、高平の樋口イッケではオボンデン様の森へ一族が集まって、イッケの先祖祭りをする。屋敷稲荷がもとは本家で祭るものだったことを示す資料として興味深い。

旧十一月二十三日の大師講には、アズキガユを長いカヤの箸で食べるが、大師様は大男で子持山に腰をかけて利根川で足を洗ったという巨人伝説が上古語父にあった。いかにも利根らしい雄大な話である。

大晦日をオモツツイといい、平出では煮初（ニバツ）の飯を鉢に盛って、箸を十五本立て、オミタマ様（仏様）に供えているのは、勢多郡北橋村などで小正月にオタキアゲをして供えるのと同じく、祖霊を正月の神として祭ったものである。

以上のように、かなり古風を伝えていることがわかるが、現在は老人だけ記憶しているものもあり、家による差も大きい。

この項の記述では、各項目ごとに大字の編成順に並べてみた。つまり、高平・生枝・岩室・尾合・平出・上古語父・下古語父の順に並べて、その変化が比べ易いように考えた。なお、上古語父・下古語父は上古・下古と略記した。

（関口正巳）

年 中 行 事

新暦と旧暦 昭和にはいつてから、新暦で行なっている。一度やるのはめんどろだし、沼田あたりでも新でやっているので、それに合わせた。しかし、月見だけは旧で行なう。（下古）

モノビ 年中行事の日をモノビという。また正月をセチといい、セチ衣裳、セツ酒などという。（平出）

一月

元日

年男 年男は長男がなり、元日の朝は若水を汲んでお茶をたてて年神様に供える。必ずお明かりを上げる。

正月三日は三度三度の食事を年男が神様に供える。雑煮や御飯を松飾りの枕やオシメにもたけて供える。

朝風呂をたてる家は少ない。(高平)

年男はコビョウ(若い男)がなった。(岩室)

主人が朝早く起き、井戸から若水を自分で汲んで、沸かし、神様へ上げて、家中皆を起こして、「お茶湯」(オチャトウ)といつてのませる。次に「歯固め柿」をたべて神社へ行ってくる。それからお稲荷様をおがみ、茶の間から上がって家の神様を拝み、そしてから朝飯をたべる。

(尾合)

年男は旦那さんがなるのが普通だが、学校が終ると年男になる。年男が若水を汲む。三元日の間、井戸やセキから汲んで来て、お茶をわかす。

三元日の間、いろいろな縁起をいう。例えば箒で二回に内方に向けてはきこんでから、外方に向けて一回にはき出せ、とか、七・五・三にはきこんでから、のちに掃き出せとかいう。また小使は歳徳神の方向やアキの方に向けてはいけない。

正月のオタナは大体一定のところにしつらえる。(平出)

若水迎え 年男が早く水を汲むが、このとき、正月棚にお供えしておいた鏡餅を十文字に縄でしばり、若水を汲んできた手桶に入れる。この鏡餅を入れた水で元日の朝茶をわかし、この茶を飲んでから年始に出かける。(岩室)

元旦の朝、初めてくむ水を若水といい、湯をわかして神だなお茶あげ、お灯明を上げる。

湯がわくまでの間に、兩戸をあけ、ハタキをかけ、ほうきではいて、家の中のぞうきんがけをする。餅を焼き、ぞうにの用意一切ができるまでやらねば家の人は起きない(上古)

朝祝 朝湯に入ってから、年男が井戸または川で流れに逆らわないようにして若水を汲む。小の餅(おそなえを縄でしばったもので上には粉をつけない)を若水の中に入れる。若水でお茶をわかして神様にあげ、雑煮・そば・うどんをつくる。

小林イッケでは、一日そば、二日雑煮、三日うどん、という習わしがある。若水は三ヶ日の間汲む。朝湯も三ヶ日はわかすが、中組、反組では、組で交替にわかしている。(下古)

朝湯 元旦には朝湯に入って、身を清めてから年男のしごとが始まる。大正ごろまでのことでは、除夜の鐘がなるころから燃しつけて、二時ごろには五人組、オオグミでよび歩いて順にふるに入り、身を清めて家へ帰ってから、水くみをし、朝一切の行事をする。年男はその家の主人がする。(上古)

朝湯は毎戸たてた。(岩室)

正月の火 むかしは火打石でつけた火を用いた。だんだん音をたてるだけになり、今ではそれもしなくなつた。岩室に火打坂という地名があり、蛇紋岩のところがあつた。(岩室)

初参り 元旦には家中そろって鎮守参りに行く。朝早いほどよいとい、十二時過ぎると出かけた。はな緒に紙を巻いた紙緒のワラジョウリ(新品)をはいていった。

朝食後、寺詣りをする。(高平)

神だなおみきを上げ、おとそをいただいて朝食をすませると、早いのが競争でうぶすなさまへお参りにゆく。暗いうちに出かけるから弓張

り提灯をつけてゆく。

一戸一人はゆくもので、現在はしていない。(上古)

年始回り ずっと以前は、元日に男衆が各戸一軒一軒挨拶に回り、二日に女衆が回った。その後、神社に村中の者が寄って年始礼をするようにしたが、二、三年でやらなくなった。今は個々に都合のつく家を回る程度になった。(高平)

以前は村中を年始回りのもので、雪の中を畑通して回った。(高平) 若水の朝茶を飲むと鎮守様―氏神様へいく、除夜の鐘がなるとすぐいく。これがすむと朝食をすませ、主人は村中毎戸年始にあるいた。このとき、紙緒のわらぞうりをはいて廻った。最後は区長宅へより、酒を一杯いもらって帰る。このとき、女衆も区長宅へ行き「本年はどうも御苦労様です」と挨拶し、前任区長の家へは「お世話になりました」と挨拶にいく。(岩室)

お宮参りがすむと、村中を全戸まわって年頭のあいさつをしてくる。暗いうちからのことなのでうっかりしていると朝食の後片づけがすまないうちに來られるので早くすませておく必要がある。みんなで村中をまわっているからいつの間にか五、六人連れだつてまわるようになるのである。後の方は前の人の挨拶にあわせて頭をさげていけばいい。

男衆がまわっているから、年始うけをするのは奥さんのしごとになる。大正ごろまでまわった。(上古)

元日に子どもが年始にゆくと、年頭というのをくれる。いくらかの小づかい銭と半紙十枚くらいがふつうなので、大変な量になる。(上古)

朝祝がすむと、村中の各家に年始まわりに出る。普段のものよりもといねいに作り、ミゴの紐をつけた年始まわりをはいて、「明けましておめでとございます。去年中はいろいろお世話になりました。今年もどうぞ相変らずお願いします」と挨拶してまわった。(下古)

遊び 牛追い 紙に線を引いて、穴のあいた金を紙にくるんで並べ、

先に牛小屋に入った方が勝ち。

かるた、百人一首等。(下古)

お寺参り 元日にお寺への年始をする。それぞれで年頭をもってあいさつにゆく。ふつうは寺の世話人が代表で、年頭銭を集めてもってゆく。

年頭銭は、大正ころ五銭、十銭で、昭和の現在は三百円、五百円くらいがふつうになっている。(上古)

年神棚 もとは年神棚を作り、三階松とオシメを飾った。その前にミカン・コブ・イワシ・スルメ・干し柿など五種類のものを下げた。

(高平)

松飾り 暮の吉い日に裏山へお松迎えに行つて取つてきた松でカド松を立てる。家の門の所にナラかホウの木の杭を二本立て、その木の右には松を五本、左には三本しばりつける。それに竹をつける家もある。カド松にミカンなどの吊るし物を下げた。

家の中の隅々にお松を飾り、それにも五種類の供え物をミゴなどで下げた。屋敷の稲荷や、コイニワ(堆肥舎)にも杭を立て松を飾った。

(高平)

オシメ飾り 家の内外の松飾りにオシメをつけるほかに、井戸・便所カマドなどにもオシメを飾った。カマドには輪ジメを回した。(すずきの後、オシメを作る。)

初参りに神社へ行く時もオシメを持っていき供える。(高平)

家例 元日にはオツカドの木で作ったハラミバシを使って家中の者が食べた。三元日はソバを作る家もあり、朝だけ雑煮の家もある。(高平)

小野氏は正月餅がつけず、正月はそば・うどんの家例である。なお七草もしない。(平出)

今宮の小林マケはうどんで、夕飯はめし、切った餅は食べられない家例になっていて、アンピンをつくつておいて食べさせる。

塩ノ井のソノダ家も、餅なし三ヶ日をする。(上古)

仕事始め 仕事始めには草刈繩を少しなうか、まぶし織りを少し始め山へオサゴ・餅・ゴマメを持参して若木迎えに行った。若木、山桑の一年生がよかった。

この日は、沼田へ朝早く初買いに出かけた。福袋などもらうのが楽しみであった。(岩室)

二日にマブソ作りをしてオシラ様に進ぜた。また、草刈繩、肩掛繩など作り正月棚の下にさげた。この日畑へ出て鋤で二つばかり土を切つて来た。仕事始めである。(尾合)

二日にお墓参りに行く人がいる。(尾合)

むかしは草刈り繩をなつた。その繩は一尋半のもの十二本で一カケという。これで草一단을結える分である。仕事始めとしては、これを二カケぐらいのものである。(平出)

しごと始めとして、マンガを使うなわ、ハヨーナワをなつてつくる。

田かきの道具の修理もやつた。(上古)

若い衆などのしごと始めは、草刈りなわを二かけなうことで、これがすむとオンカ(大手をふつて)で外へ出られた。

夏の草刈りをするなわをなうことであそべなければという気があつたのか、朝の四時というと近所隣りでワラを叩くテンカンテンカンという音がしたものだつた。

ふたかけというのは、草一束が一尋と甲の分の長さのなわ二本で、一だん(駄)六束分で十二本をひとかけというから、二四本をふたかけといつた。

これだけのなわがないができると、正月だなに下げて、お正月さまに進ぜた。(上古)

仕事始めは藁をはたいて、草刈繩(長さ一ひろ、前後のくずれないもの)を二かけ(十二本)つくり、正月棚へしんぜる。若木迎えもする。(下古)

若木迎え 小正月の若木を取りに山へ行き、ミズブサか山桑の木を伐つてくる。この時、十二様に米や餅を供える人もある。(高平)

この日に若木迎えをする。山桑・ミズブサ・イトザクラ・ニワトコ・オツカドなどをボクとして、山から伐つてくる。紙をさいてオンベロ(御幣)を作り、オサゴを供えて拜んでから伐る。(平出)

この日、男衆のしごととして若木迎えにゆく。マユダマ木としてヤマクワ・ミズブサの株をとつてくる。家のカブをきめて切つてくる。ケークキボーをつくるオツカドも切る。

このときには、オ十二様にお供えや、切つたもちを二枚、紙をひろげて、切つた株の上に供えてくる。十二日には山へ入るとけがをするといわれている。(上古)

初夢 二日の晩紙で舟をたたみ、この紙に「永き世の遠のねむりのみなめざめ、なみのりふねの音のよきかな」とかき、枕の下へ入れてねるとよい夢をみるという。この歌は下からよんでも同じ歌になる。悪夢をみたときはバクタク様に食べてもらいなといつて紙をもす。夢はヘビ・ウマ・トリなどがよく、凶夢は齒のかけたのやころがつた夢が悪いといふ。(岩室)

「長き夢の遠のねむりのみなめざめ波乗り舟の音の良きかな」と書いて枕の下に入れて眠る。よい夢としては、一富士二鷹三なすび。(下古) うたい初め 塩の井では、正月二日がうたい初めになっていて、その年(前年)に祝いごとのあつた家(御祝儀をやつた家のこと)を宿にして集まりをもつた。

経費は村中の平均割であるが、祭り世話人が幹事になって、酒二升、とうふをふたふね(二四丁)買い、他は全部宿もちでお願いする。昭和

の初めごろまではうたいもしたが、今はうたいはしない。

新年度の世話人の組替があり、村のいろいろの打ち合せをする。

戦時中にやめた。(上古)

謡ぞめ。嫁をもらった家を宿にして「高砂」を始め七つはうたった。

(下古)

初絵売り 二日の朝早く、沼田の方からきた。七福神や蚕影様の絵が多かった。(岩室)

門付け もと越後から来て高平の実相院前に住みついた飴屋小幡兼吉氏が、新年の祝い歌を歌いながら各戸を回る。五月ごろまでに近辺の村々まで回ってくる。太鼓は径三十四cm(一・一尺)で十四cmの柄がつき肩がけの紐で吊る。(高平)

女衆の年始 元日の男衆の年始にかわって、女衆の年始があり、村中をまわる。くみあいを中心にあまるが、塩ノ井は全戸まわることになっている。

この日は旦那さんが客受けをする。(上古)

寺への年始は、寺世話人が代表ででかけた。(岩室)

三 日

嫁の年始 新郎新婦が里へ年始に出かけた。このときナガダチの四角餅を二枚重ねて持参させた。二枚は白餅と栗餅。(岩室)

三日はお嫁さんが里へお客に行く。昔は二日に行った人もあった。二日に行った人は翌日、三日に行った人は五日に帰る。四日はさける。

(尾合)

嫁の年始 嫁が実家へ簪を連れて年始に行く。この時、のし餅を半紙大に長断ちにして二枚(米と粟・キミ)持って行く。(高平)

正月の年始に行く嫁。むこは膳の餅といわれる餅にコブをさしてもつ

て行く。(上古)

不浄日 正月三日は不浄日だという。(平出)

農事の相談 正月三カ日のうちに、その年の田植えの日取りと、人足とについできめる。年始がてら近所隣りに遊びに行ったりしながら、懇意な人や、組内でエエッコの話し合いをして、お互いに調整し合せてきめるわけである。(上古)

四 日

お棚さがし 三が日に供えたものを下げて、ゾウセーを作って食べる。(高平)

正月棚へしんげたものをおろしておじやをつくる。(下古)

坊さんの年始 雲谷寺の住職が小僧二人連れて年頭に回った。「モロモロー(物申すか?)」「年頭」と呼びながら檀家を回り、お札、しゃもじ・針・マッチなどを置いていった。(高平)

この日は一般の年始はするなという。坊主が戸毎に廻ってくる。

(岩室)

四日は坊主の御年始といって一般の人はなるだけ出入しない。(尾合)

正月四日は坊主の年始日といって和尚さんが年始にまわった。(平出)

四日がお寺さんの年始日で、年頭のあいさつに村をまわる。

「モノモウ、雲谷寺年頭」と、門でなつて入るので、主人は「ドウレエ」といつて迎えてあいさつをする。

お寺さんは、寺のお札と付け木、とか、マッチ、または簪二ぜんくらを配ってゆく。(上古)

六 日

六日年 六日年は「馬と女の年取り」といい、「女が先に風呂にはい

ってもよい日」だった。(高平)

別に何もしない。今は消防団の出初式を行なう。(高平)

「女と馬の年取り」という。

女衆は仕事を休み、馬にもうまいものを食べさせた。六日山の行事は

なかった。(岩室)

一日と同様な正月行事をした。うどんなど作る。「女と馬の年取り日

だ」といって馬屋にご馳走する。(尾合)

「女と馬の年取りだ」という。六日爪といって、爪を切る。(平出)

六日は六日年といって年とりの日だというが、特別のごちそうはな

い。(上古)

六日年 この日は女の年取りの日である。年始に行った人もこの日は

泊らないで必ず帰る。(下古)

七 日

七草がゆ 七日朝に七草ぞうすいを作る。セリ・ユブ・ニンジン・ゴ
ボウ・大根・白菜・ジャガイモなど七色のものを刻んで入れる。

もとは刻みながら唱え言をいった。

「七草ナズナ 日本の鳥と 唐土の鳥と 渡らぬうちに ハシタタケ

ハシタタケ」(高平)

七草なずなの歌を唱えながら正月棚の下で七草をきざんだ。三回唱え

てからきった。この日少林山(高崎)へ参詣する講もできていた。

(岩室)

七草かゆを作る。セリ・ナズナ・大根・人参等入れる。

朝早く父親が起きて、まな板の上にナズナとセリをのせ、庖丁で切っ

て火箸と庖丁の背で叩く。

「七草ナズナ 唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬ先に、ぶったたけ、

くく」と唱える。(尾合)

セリなど七種類の菜を入れて七草ゾウセウをつくる。セリをきざむ時
お棚の下に行つて、「ナナクサナズナ、トウドノトリガ、トマラスサキ
ニ、ハシタタケ、ハシタタケ」と唱える。(平出)

七草がゆというが、おかいでなくオジャだから七草ぞうすいで、もと
はミソ味が主だった。現在はショウユを使う。

七草とは、セリ・にんじん・ごぼう・だいこん・かんびょう・こぶ・
さといも・まめ、などを入れて、何を入れても七いろになるようにする
がセリだけはぬかせない。セリは一夜ゼリにするなどといって、チャッコ

(しばっておくこと)にして神だあたりにつるして置く家もある。

七草は六日の晩から七草の朝までに、まな板の上のせて、ほうち
ようのミネでたたいて切つたから、歌といっしょで近所中でにぎやかだ
つた。うたは少しづつちがうが次のようである。

「七草なずな、すずな、すずしろ、みたな草、唐土の鳥の、渡らぬう
ちに、たたけ、たたけ」

「七草なずな、唐土の鳥が、日本の国へ、渡らぬうちに、はしたたけ
はしたたけ」

小林きいさんの家では、まな板の上のものの上へ、火ぼしをおいて
ちゃんちゃんやつてたいたという。(上古)

七草はセリ・ナズナ、その他野菜七種類を入れて、七草雑炊をつく
る。まな板のはしに、ヒバシ・すりこぎ・包丁・箸等をのせて「七草ナ

ズナ、トウドノトリガワタラスサキニ、ブツパタケ、ブツパタケ」と唄
いながらたたく。(下古)

七草会議 古くから行なわれている村の役員区長代理(一名) 評議員
(五名)と伝染病予防委員(四名)が選出される。(生枝)

十 日

送り正月 正月様が十一日に帰るといので宵祭りをする。夜ウドン

をあげた。(岩室)

十一日

くわ立て 十一日正月というだけで、行事はしない。(高平・上古)
仕事はじめて飾り松を全部取り払い、その一部を畑の雪の上植えてさく切りのまねをする。(生枝)

ウナイ初めに野歟で畑を掘った。二本松を用意していき、モチ、オサゴ・ゴマメをあげた。掘る場所はアキの方を選んだ。(岩室)
山入りをする。(平出)

朝雑煮を進めて松などのお飾りをとった。(岩室)

倉開き 十一日迄は倉をあげるなどという、正月に食べるものは前に出しておいた。年男が倉の錠をあずかっている家もあった。(岩室)

この日まで蔵は開けられないから、正月様などに必要なものは出しておいた。(下古)

十二日

十二様 この日山へ入るとけがをしたりするといつて山へ入らない。
山かせぎの人は、寄り合つて十二さまのお祭りをし、酒でお祝いすることがある。(上古)

小正月(十三日～十六日)

十三日

ヒキ飾り 大正月の松飾りを引いて、すぐあとにマユ玉やハナを飾る。(高平)

マユ玉 十三日の朝、マユ玉を作つてミズブサやヤマグワの枝(株つ)にさす。十六ダンゴは生アズキを一粒ずつサナギのかわりに入れて大き

く作り、蚕神様に供える。蚕神様は茶の間の西北隅の柱に祀つてあり、そこに飾る。

マユ玉は丸いのとマユ形のと作り、枝にさして、大正月の松飾りをした所へ全部供える。(高平)

十三日に、おマイ玉を煮た湯をやかんに入れて、家のまわりをまき歩く。(平出)

小正月のもちつきをし、大正月のオシメをとつて、代りにマイダマをつくつてかざる。マイダマは最近までやつていたが、数年前ころからやる家が少なくなつた。(上古)

モノ作り オツカドやミズブサの木をけずつてハナを作り、マユ玉といっしょにして方々へ供える。カド松のあつた所にもマユ玉といっしょに一本ずついわいつけておく。オツカドでハラミバシやケーカキ棒も作る。

以前はハナ菓子売りが、鯛やカブの形に作つたハナ菓子売りに来たので、買っていっしょに飾つた。七福神や蚕影さんの絵姿なども売りに来たので買って貼つた。(高平)

ハナ飾りを作るにはへいのあるハナカキナタがあり、きれいにできる。(高平)

十三日のかざりがえにはマユ玉をうで、そのうで湯を家のまわりにまいた。モグラのおこさぬようという、この日のマユ玉は、一升の粉で十六つくり、オシラ様にあげた。

モノツクリで、十三日にハラミバシ、アワボヒエボ、カユカキ棒、十六段菊などつくり、各所にお供えた。(岩室)

作り物は十三日に作つた。今はほとんど作らない。カキ花の長い、キク花と称するもの等、之にマユ玉や花菓子をつけてお正月様へ上げた。粟穂、稗穂も作つた。勝軍木の皮をむいたのと、むかぬのを四寸位に切つて、竹の枝にさし、ハナをかいたのや繭玉なども一緒にして、堆

肥の処に立てる。(尾合)

十三日に餅をつき、オマル・マイダマをつくる。ワカギで次のようなものをつくる。

ハラミバン 家族数だけ

ケーカキ棒 二本、十五日のかゆをかきまわしたあとは、神棚に上げておき、田植の時水口にたてる。

ニワトコ 二本に十六ふしつけて、そのまま水引で結え、神棚に供える。

アーボヒーボ カドカザリの竹の先にニワトコを短かく切つてさす。

(平出)

ものづくり 二日の若木迎えで切つて来たオツカドなどをつかつて、

アーボヒーボ・ケーカキボ・ハラミバンをつくる。

アーボヒーボは、オツカドを切つてつくるが、門松に使つた竹を一本とつておいて、この枝に下げ、コエニワにたてる。

ケエカキボウは十五日の間に合うようにつくり、十五日がゆをかくが戦前は毎戸つくつていたけれども今ではたまにあるていどになった。

苗代にもつてゆくのも世話なので、正月が終ると燃しちゃう家もある。(上古)

十二日には、アズキガユの時使うハラミ箸と、ケーカキ(粥掻き)棒を、オツカドの木で作る。箸は家族分にもう一人分(神様の分といわれている)加えた数だけ作る。ケーカキ棒には雄花、雌花(削り花)をつけ、先を四つに割る。

十二日と十三日のいずれかに、小正月の餅つきをする。(下古)

粟穂・稗穂。これは、門松につかつた竹(一本残しておいたもの)にオツカドの木でつくつたハナをさしたものをいう。それを堆肥の上になさしておく。もぐらを起こさないためであるという。

山桑の木にまゆ玉と花ガシをさし、柱(神棚に向つて左側の柱)の近

くにたてる。ニワトコの木で十六段の花を二つくり、天井につるす。花ガシなどといっしょにオシラ様の紙絵を売りにきたものである。(下古)

ハナ売り ニワトコの枝を使つたりしてハナをかけたが、糸井あたりからハナ売りが来た。キクバナや、小さい丸いの、長いハナ等があった。ニワトコの木は秋にとつておき、日陰においてハナをかく刃物でやるときれいに行ける。

マイダマの間にかざるもので、二十日正月のときに下げる。(下古)

十四日

道祖神

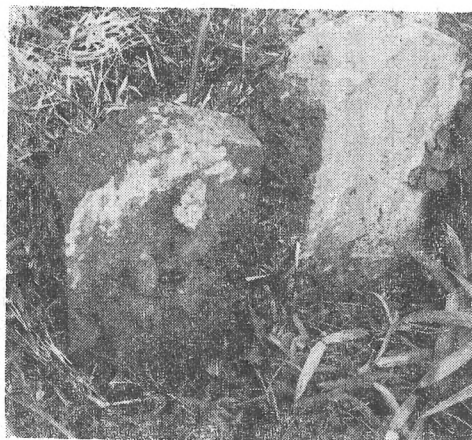
大正月の松飾りを集めて、新井橋場の道祖神の前でドンドン焼きをした。(今は田の中でもす)

厄年の人が中心になり子供を使つて各戸の松飾りを集め、竹や御幣、麦わらなどといっしょに積み上げて火をつけて燃す。家からは竹竿の先に餅をオミゴクとしてさしていき、この火で焼いて食べる。カゼをひかないという。

終ると、松の燃エクジを持ってきて自分の家の屋根に投げあげた。火災除けの呪いという。燃エクジは消えないうちに家へ持ち帰るのは縁起がよいという。(高平)

また、供えてあるマユ玉(米の粉で作つた団子)を下げて来て食べる。と風邪にならない。木のもえ残りを持ち帰り入口に下げておくと火防になる。(生枝)

十三日に集めた松を使い、厄年の人が手伝いに出て小屋を造つてくれた。子供たちは、道祖神と大書したものを小屋の上に立て、十四日の午後燃した。このとき厄年の人は、厄落としと称し、若干のお金を新しい手拭にくるんで火の中へ投げこむ。すると子供達が火の中からお金をかき



道陸神（高平峯堂）

右が男神、左が女神で道を指さす

（撮影関口正巳）

出して拾った。「拾った金はその目につかえ」などといった。

モエクジは、火伏せとして屋根の上にあげ、灰は盗難・虫除けとして家のまわりにまいた。（岩室）

十四日にドウロク神祭を、尾合上と尾合下の二ヶ所でやった。厄年の男が出て

竹を伐って小屋を組み、子供が門松を買って小屋にし、中に藁をつめて燃した。

ここで餅を焼いて食うと風邪をひかぬという、又、燃えさしのボヤを屋根に上げておくと火事にならぬという。賽銭を拾ったり、酒をのんだりした。この祭りは昭和四十年頃までやった。（尾合）

道祖神やきは一月十四日。村が上、下の二組に分れて燃した。少年会（別項）が中心になって、各戸から正月飾りの松を集めて、一か所に高く積み上げて（小屋はつくらず）その上に、お供えを載せた紙をもらい集めてこれでヘイソクをつくって立てた。

これを燃すのは厄年の人。オマエダマをやいて食べると虫ぐすりになるといふ。また厄年（別項）の人は、オサイセンやみかんを投げた。数年前から、松飾りを廃止して、松は太神宮様の一本だけにしてみましたので、道祖神やきの風もなくなった。（平出）

十四日はどんどんやき。久保組は、鎮守さまがどんどんやきがきらい

で、やるとはやりやまいがおきるから昔からやらない。

塩ノ井組は久保組の反対で、どんどんやきをやらないとよくないことが多い。だから塩ノ井の子どもたちは久保の方までもお松を集めにくる。またオシメだけでは足りないからというので山の松を切ったり、モミの枝をはらってしまふこともあるが、どんどんやきで、子どものしごとだからというので叱られることはない。集められたオシメや松の枝などは、村の祭典がかりの人が積み上げて燃してくれることになっていゝる。塩ノ井の毎戸からはマメガラを一束ずつ出すことになっており、子どもがもらってくる。小屋はつくらない。

祭典がかりの世話で火がつけられると、子どもたちはもって行った餅を、祭典がかりが用意した竹やりにさして焼いて食べた。これを食べると虫歯にならないといった。

また燃えた後の炭かけを二つ拾って来て、家の屋根に一つ、イナリサシに一つ上げると、火事にならない。（上古）

十四日はドンドン焼き、大正月の松飾りをあつめ、幣束を立ててもやし、餅・団子を竹槍にさして焼く。焼いた餅を食べると風邪をひかない。また虫歯にならないという。

焼けた松の芯を持ってきて屋根にのせておくと火防ひさまのまじないになる。

厄年（男二十五歳、四十二歳、女十九歳、三十三歳）の人は、厄おとしにその年の数だけ金をなげる。

道祖神を盗んで縁の下に隠しておくとおくと大尽になる。（下古）

厄落とし

男二十五歳、四十二歳、女十九歳、三十三歳の時は厄年に当たり、ドンドン焼きの時に厄落としをする。夜、友だちを招いて男なら酒を出し女なら甘酒を出してふるまう。よばれた人は軽いものほどよいとして、手ぬぐいなどを持っていき、ごちそうになる。

厄年の人はドンドン焼きの場所で、年の数だけのお金を投げたり、ミカンを一箱もって行って配ったりする。子供たちが喜んで雪の中で拾う。(高平)

厄年の人は甘酒を用意しておき、親しい人たちを招待する。一晚中若者は、つぎからつぎへと飲み歩いた。

道陸神焼き(ドンドン焼き) 厄年の人は家から手拭をかぶって行き、道祖神にかぶせて厄落としとする。(生枝)

十五日

十五日カユ

朝、アズキガユを煮る。あがりぎわに餅を切って入れると味がよい。

塩味をつける。ハラミバシを使って食べた。(高平)

十五日の朝、粥かき棒を作って、小豆がゆを掻いてたいた。ハラミ箸でそのかゆをたべた。その箸は十文字に結えて屋根の上にはうり上げておいた。(尾合)

十五日には小豆がゆ。ハラミバシで食べるが、その時おかゆをふいて食べると、田植の時風が吹くといって忌む。(平出)

ケークキ棒

オツカドの棒のもとを割ってマユ玉をはさみ、ハナをかいて飾って二本作る。十五日のカユをかきまわすのに使い、その後、正月の繩にはさんで置く。春にナエマを作った時に水の入り口に立てた。(高平)

朝小豆がゆをつくり、マユ玉や餅を入れた。このかゆをカユカキ棒でかきまわし、ハラミ箸で食べた。成木責めはしなかった。(岩室)

朝、あずきがゆをつくり、この中へ、メエダマとか、もちを入れて食べるが、ケエカキボウでかゆをかきまわしてから食べる。ハラミバシを使うもので、熱くても吹いて食べてはいけない。田植えに風が吹くからといわれ、ケエカキボウはとって苗代に使うが、二本水引きでし

ばってオシラさまに供え、一年ののびがよいようにあやかるといふ。(上古)

カユカキボウの棒たおし。十五日がゆのすんだ後で、田んぼで棒をたおす遊びに使った。(上古)

小豆がゆ。ケークキ棒の先にまゆ玉をはさみ、粥をかきまわす。米粒が多くつくほど良い。ケークキ棒は正月棚におき、苗代の水口にさす。小豆粥を吹いて食べると風が吹くといわれる。

ケークキ棒で子供のできない人をたたくと子供ができる。その人に知られないようにたたかかないと効果がない。

秋漬けた大根を、この日に始めて出す。(下古)

ナリ木ぜめ

山刀で木の根っ子を打って「なれ、なれ」といった。(尾合)

十六日

やぶ入り

十六日は「ガキの首も許される日」で、雇い人の休める日だった。朝の仕事もいっさいしないで休んだ。お風呂もたてるなどいい、何もせず金も休ませた。(高平)

ガキの首の許される日といわれ、年奉公に出ている若い衆らが、天下晴れての休養日で、思い思いに遊びにゆく。(上古)

先祖祭り

観音様にワラツトを作り、麦糠などを入れてお供えした。この日、お高盛りを作り先祖様へ上げ、この日から初めててんぶらを揚げて食べた。先祖様を祭る日という。(岩室)

十六日は仏様のお祝いだといふ天婦羅。正月は全然仏壇には供えないが、十六日に至って始めて天婦羅をして供える。この日まで、一年中食

べるものは逐次供えるものだとされる。この日餓鬼の首も許されるとい
う。(平出)

この日もうどんとかマンマに天ぷらとかして御先祖様に上げる。

(尾合)

千匹がゆ

正月の十六日にした。苞っ子に麦とヒエを煮てつめ、馬頭観音に上げ
た。(尾合)

正月十六日と盆の十六日にする。ヒエ・マメなどをいっしょに煮て、
ツトッコに入れて三本辻や馬頭観音、セキの端などに置いてくる。

(平出)

十七日

馬頭観音

馬頭観音は祀らない。もとは馬を大事にしてさかんに観音講をした。

(高平)

寒申(カンザル)(申の日)

「寒ザル、春トリ」といって、正月の申の日にうまや肥を出す。春は
酉の日に出す。(高平)

十八日

十八日ガユ

十五日のカユを残しておいて、それに足して作った。(岩室)

十五日ガユを一杯残しておいて、これをふやして食べる。(上古)

二十日

二十日正月

お棚おろし 小正月のお飾りを下げて、マユ玉をかく。年始回りは二
十日正月までに終るようにするが、一月中なら回ってもよい。(高平)

役員改選の日。朝正月棚にお茶をおげてからおろす。このとき「今年
は何なくすんでお目出とうございました」などといっておろした。

(岩室)

オ棚オロシといい、小正月に上げたお飾りを全部おろす。二十日正月

としては特にこれという行事はない。(上古)

お棚おろし。おそなえは、水にひたして、しみらせて、しょうぎには
して、しまっておいて、六月一日に食べる。(下古)

エビス講

エビス・大黒の絵像を座敷に飾りエビス膳(たて膳)を作って、御飯
うどん・頭付の魚などを供える。お金を枡に入れて供える。(高平)

えびす様が働いて来たのでお祭りする。朝祭りで、朝飯にお膳を作っ
て供える。この時、ありったけのお金や財布なども進げる。(高平)

えびす講はお昼にやることもあるが、朝やるのが一般のやり方であ
る。その理由は、早く行って稼いでもらうということだという。

いわしなどのオカシラツキを必らずつけ、ケンチン汁などの精進料理
と山盛りのごはんを上げる。

塩ノ井の金井家では、米を山盛りにした枡を供えるといい、現金も進
げるが、余りうんと出すとえびすサンがうんと使って働らかねえからう
んとは進げない、という。

えびすさまに進げたイワシは、主人公が味を見てからなら未婚の者に
くれてもいいという家もあるが、一般には親たちが食べて、未婚の者
は男・女の別なく食べさせない。これを食べると嫁に行けないとか、縁
遠くなるといわれる。(上古)

役決め

二十日に部落の役員を改選する。区長以下あらゆる役員を決めるため
に、班長の宅に集まる。高平には十六班ある。(高平)

二十八日

初 不 動

昔、両部神道の月山寺があつた沢の所に、チョコッピラの不動様が祀つてある。付近の関係者が五色の旗の吹き流しを立て、赤飯などのお供物を供えて、参詣人に少しずつくれる。年一回の祭りである。(高平) 不動様におこもりに行った。(岩室)

二 月

出 か わ り (一 日)

二月一日は奉公人の出替りといつて奉公人は休日とし、契約のしなをしをした。(岩室)

二月二日ころをデカワリといい、奉公人の入れかわりの時期になつていた。昔は年季奉公をした人が多かつたので、満期になつた人と、新規に入る人の出かわりがこのころ行なわれた。満期になる作男は、ユズリグツといつて、馬のはくくつ(わらじ)を百足つくつて行くものとされていた。(上古)

節 分 (三 日)

豆まき 豆はイロリで大豆のからを燃していり、神棚に供えておく。

夕方「福は内、福は内、鬼は外」と唱えながら豆をまく。

豆は年の数だけ食べるものだという。豆を福茶に入れて飲む。

豆を取つて置いて、雷の鳴つた時に食べると雷除けになるといふ。(高平)

豆まき、ヤカガシをする。残りの大豆はカギ竹に吊しておき、初雷のとき食べる。(大室)

節分の豆は、マメ木を燃して、マメ木でかきまわしていり、柵に入れて神だなに上げておいて、時間を見はからつて「福は内、鬼は外」をや

る。戸を開けておいて各部屋を全部やる。投げ終ると福茶をつくり、神さまに上げてからみんなで飲み、年の数だけ豆を食う。

残つた節分の豆は、紙にくるんでイロリのカギ竹につるしておき、初夏のころの初雷に食べると雷よけになる。夕飯はうどんといどのごちそうがふつうである。(上古)

大豆は豆木(豆ガラ)で炒る。

「福は内、福は内、鬼は外、鬼は外」と唱えて、大神宮様の前から茶の間へと順にまく。豆まきは男衆(年男)がやる。その豆は、目をつむつて、年の数だけひろつて食べる。風邪をひかないといわれている。またその豆を適当にとつて、神棚にしんぞておいて初ガミナリの時食べる。

福茶(豆を鉄瓶で煮る)を呑んだ。豆がたくさん鉄瓶の口から出ると縁起がよいが、なかなか出ないものである。(下古)

天気占い 豆をいる時に、いろりの灰の上に豆を十二個並べて一月から十二月までとし、一番早くこげて燃えたのは何月の豆になるか見て、今年は何月が照るなどと占う。(高平)

ヤカガシ・虫封じ 豆まきの豆をいる時に、イワシの頭を豆の枝にさしてイロリ端で焼く。この時に「ゴマの虫の口を焼き申す」「四十二色の耕作の虫の口を焼き申す」などと、害虫の名を何回も唱えながら、ツバをはきつけて焼く。これをトボロ口にさしておく。

このイワシの頭は、春に蒔き物をする時にくだいてまぜて蒔くと、虫がつかないという。(高平)

豆の木の先に、トシトリイワシの頭をさして、いろりの火で焼きながら「根虫、葉虫、はんねむし、四十二色の虫の口を焼き申す」といつてつばをかける。(生枝)

夜、ヤカガシをする。いわしの頭に豆の木をさして、いろりで焼く。つばきはきかけながら「四十二色の虫の口を焼き申す」と唱える。そ

れをトボー口にさしておく。それをヤカガシという。(平出)

豆投げをする。あと、ヤカガシを豆をいる時、豆木にさした鯛の頭(二つ)に「稲、麦、四十二いろの虫の口やき、トット」というように唾をかけて、炬の火でいる。(尾合)

年とりの晩(節分)に、マメをいったマメ木のくしに、いわしの頭だけ二本さし、「ペッ、ペッ」と、つばきをひっかけひっかけ焼きながら「四十二いろの虫の口を焼きます……」と、いろいろの虫の名をあげ、更につばきをかけて焼く。(上古)

虫焼き(虫封じ)をする。これは二匹のイワシの頭を豆木で焼いて、父親(家長)から順に、トットとつばをかけ、「ナス、ユウゴウ(夕顔のこと)ツクリコウサク、四十二色ノ虫ノ口ヲ焼キ申ス。」と唱える。翌朝、豆木にそのイワシの頭をさして、入口にさしておく。(下古)

コト八日(八日)

コト八日はしない。(高平)

二月七日にダイマナクと称し、目のある籠などをカイドへ出して鬼除けといった。(岩室)

八日はお事始め。すいのうを外へ出す。鬼が来ても、鬼より目の数が多いので、鬼がこわがって帰る。(下古)

針供養と称し、女はお針仕事を休み、豆腐に欠け針をさして川へ流した。(岩室)

初午(午の日)

オシラビマチ 女衆のお祝いである。マユ玉の中にアズキを入れてサナギとし、稲荷様に供える。赤飯・うどんを作る。近所の人大勢にふるまうほど、マイガキがにぎやかにできるといって喜んだ。(高平)

蚕神を祭り、マユ玉を供える。マユ玉は米の粉をこねて、アズキを一粒ずつ入れて十六個作り、ざるの中にマブシを入れて盛る。このマユ玉は近所の人にマユカキして取ってもらい、食べてもらう。蚕神は白馬に

乗っている姿の掛軸や初絵があつて、それを飾る。(高平)

初午は蚕の祭りなので、蚕を飼う人が風呂に先にはいってよい。マユ玉を作り、家に来る人にはみんなに食べさせると、うんと蚕がとれるという。(高平)

この晩は、各家々では豆腐田楽をつくり、それを枯れた桑の木(初午木と称す)をもして豆腐を焼き、味噌・青のり・ゴマなどにサンショウを入れたものをつけて食べた。この日の豆腐は、固くつくるように各コト毎にもよってつくり、オシラ様にあげてから食べた。

この日、桑摘ざるを竹の竿の先に吊るし、その中に紙をすぎ、マユ玉をのせ水引きで祝ってお供えした。その竿は軒下に立てた。(岩室)

オシラ様を祭る。お鉢にマブシを入れ、それに繭玉を繭のようにはさんで上る。「ケイコスケテクレネカ」とたむ。(尾合)

初午の宵の晩オシラ待ちをする。マイダマをつくり、マブシをつくって柙の中に入れる。ザルの中に入れる家もある。荒神さまに、クワデをとって折ってマブシをつくり進める。

オシラさまは馬に乗って来るので、初午の朝、正月のお松をとって置いて、朝げ目がさめると一番先に松葉をいぶした。オシラさまがこの煙に乗って来るといわれて一生懸命いぶした。ごちそうは赤飯と精進料理がつくれる。塩ノ井のイナリ神社の祭りがあつた。(上古)

二月初午の日。暦をみて丙午はさけて、その場合は二の午にする。前の晩オシラビマチをする。繭玉をつくり、これを重箱の中に入れてオシラ様に供える。重箱の中には、下にマブシをすく。これは、正月の十六繭玉をさしたボクをとって置いて、これを折って痰に見たてものである。また豆腐田楽をつくる。そして昔は一年中スケに来る人と呼んで御馳走したものである。

初午の朝は、松をさしきでいぶす。この煙に乗ってオシラ様が下つて来てくれるという。この日に近隣や助けに来る人と呼んでマユカキと称し繭玉を重箱からとり出す。(平出)

初午の前日はおしら日待、蚕祭で、まゆ玉をつくる。(下古)

正月に飾った松をとって置いて、この日に茶の間でいぶす。その煙にのってオシラさまがさがってくる。オシラさまは蚕神で妊娠している女神様である。

一升ますの中に、蘘をまぶしのようにしいて、前日つくったまゆ玉を入れる。まゆ玉は翌朝、焼いて食べる。

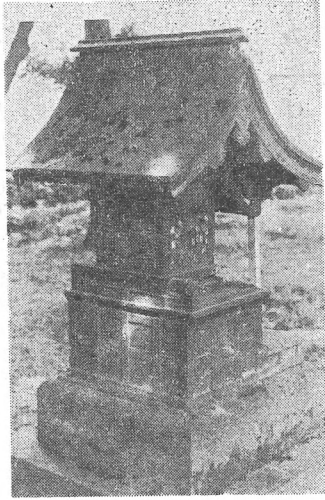
また稲荷様に団子を持って行く。(下古)

蚕影神社

白佐波神社の境内に蚕影さんの石宮があり、「慶応乙丑五月惣邸中」と刻まれている。左にマユ玉飾り、後に馬、右に波に千鳥の図が浮き彫りしてある。(高平)

まる山に蚕影山神社があり、お祭りをした。各自の家から品物を出して、福引をした。又中には「おれが(自分)蚕影さんだから行かない」というものもいた。

まゆ玉を作って供えたり、でんがくとうふを作った。その晩は、村中のでんがくを食べ歩いた。(生枝)



蚕影様(高平)
白佐波神社境内「慶応乙丑」銘
マユ玉・馬・千鳥の浮彫が三面
にある。(関正巳撮影)

ノボリとマユ玉をつくり蚕影様にお参りした。区長はこの日酒一升を買って蚕影様にお供えし、参詣人は各自御神酒をいただいて帰った。

(岩室)

蚕影様(コカゲ様)を祭る。この神様は、村の川の近くに祀られている。(尾倉)

稲荷祭り オカリ屋を作って旗を立て、赤飯を供えて祝う。(高平)

春 駒

初午に尾合からバンタがやりに来た。男女で組み、女が馬の首をもち舞わして、男が袋を持って銭・米・麦・餅などをもらった。(高平)

春駒が沼田の滝坂のほうからまわってきた。

「春の春駒、春の春駒、

嫁に見てさえ、よいとやもうす」

(下古)

十二様(十二日)

高平には「八十二」といって、八か所に十二様が祀ってある。以前は毎月十二日に山仕事を休んで、山の神を祭っていたが、今は二月と八月の十二日だけ、年二回祭る。高平区と公益社(山林六〇〇町歩を共同管理する団体で公益社団法人高平公益社といい、株主一〇〇人)が共同で八つの十二様を全部祀る。

公会堂(公益社事務所)に区・公益社の役員全員と祭典係が集まり、神主を頼んで祭典を行なう。十二様の石宮には別にお参りしない。各戸へお札を配る。(高平)

「七ゲート、八十二」といって、高平にはゲートが七つ、十二様が八か所に祀ってある。十二様は二月と八月の十二日に祀る。(高平)

十二講の人は、ちょうど十二日にあたりと、山の神を祭り会食するが、別に神官は頼まない。口祭りだけ。(高平)

山の神祭りは二月十二日。これは村の班長の家でまわり番にやっている。御馳走をたべる。竹筒の二本揃ったのをとり、底はつけて、上の方を斜めにそぎ、中に酒を入れて十二様に上る。十二様は山の中にあり、これは木の神様である。(尾倉)

不動祭り(二十八日)

三月

これはもと生方伊雄氏一軒のものだったが、かなり古くから、村中の人が一緒に祭るようになった。赤飯を上げる。この不動様の清水の御利益で、多くの人が重宝しているためである。(尾合)

節 供 (三日)

餅 一日に餅をつき、菱形に切ってお供えした。

この日嫁はナガダケの四角餅をもって里帰りをした。

雛は一日頃から飾りはじめ、初節供のお返しは紅白の餅であった。今は菓子などくばる。(岩室)

初 節 供

初子ができた最初の節供には、嫁の里の親が内裏びなを贈る。そのほかの人も思い思いの物を贈る。初節供の家ではひな様を早く飾り、祝い物をくれた家へ、ヒシ餅・ハナ餅・花菓子などを配る。ヒシ餅は草餅と白餅と作り、三重ねか、五重ねにする。ハナ餅はウルチ米の粉をこねて木型に入れて花の形に作る。花菓子は粉で作らんこははならない。ハナ餅はあとでふかして食べる。今は桜餅を買って配るようになった。

(高平)

初節供のお客には甘酒を作った。赤飯を作り、煮しめをおかずにして出した。(高平)

ひな飾りは以前は紋入りののぼり旗に武者絵をかいたものが多かった。古いひな人形は神社へ持って行った。(高平)

これは初の女の子のできた家で祭る。親戚や近い家ではお雛様を買ってやる。雛様は古くなると森(神社の森)へ納める。(尾合)

子どもの初節句は盛大にやった。節句びなは、男の子でも女の子でも親はお内裏さま、おじ、おばは天神さんを買うのがならわしで届けた。

お札には紅白のひしもちをつくり、その上に紅白青をつかって花をの

せた。粉もちをつけて型に入れて色をつけたもので、どの家にもカタモチをつくる型をもっていた。

現在は、一升のもちを二つにしたていどの大きさのものを小判なりにして、紅白にし、その上に町で買ったさくら餅の折箱をのせてもってゆく。さくら餅でなく、他のお菓子のこともある。

近ごろは男びなはない。

ふつうのもちつきは二日にするが、初節句のときは一日にする。

(上古)

初節供には、嫁の里から御殿、お雛子などを贈る。親族、近所からも雛人形が贈られる。おかえしの品は白酒と鳥の子餅である。以前はひし型餅の上に花型餅をのせたものをもちいた。(下古)

お観音様 (十八日)

三月十八日はお観音様のお祭りの日。(上古)

春 彼 岸

先祖祭りなどもしない。寺から坊さんがくるだけ、子供達が子育地藏をこの日にまつた。

子供地藏は、岩室神社の石段のところにあるが、以前県道の近くにあったのをここへ移した。この地藏様は、発電所の工事に大阪の人で魚谷音松という人が来ていて、この人が四十歳余りになって子供がなくて、九十枚田の近くにあった地藏様に願をかけたところ、不思議に子供が授かったので、新に子育地藏建立を發起し村人に合力してもらった。それがこの地藏様である。地藏の背には「南無地藏大菩薩」とあり、台石には「大正六年二月十五日」とある。その後子供のない人や子供の弱い人が願をかけるようになった。以前、子供達が杉の葉をおろして小屋をつくり、粉を持寄ってダンゴをつくって食べた。中学生が頭で、各戸では赤飯などつくった。(岩室)

春彼岸にはボタ餅を作る。寺へ行く人もあり、念仏もあった。(尾合) お墓参りに行くとともに、お彼岸のうちに必ずお寺参りに行くべき

だといわれる。お寺へ行くときは、重箱に米を入れ、その上に線香代を
のせてゆく。現在なら百円くらいがふつうだろう。(上古)

アタゴ様を二十一日に祭る。(上古)

だんご 入り、中日、あきくちの三回つくって進ぜる家、一回だけの
家、毎日つくる家とちがっているが、だんごをつくって進ぜる。キナコ
もある。(上古)

不動様(二十一日)

彼岸の中日に、土地の不動様に五色の旗を立て、その地主と世話に
なった人たちが祀る。(高平)

天神様(二十五日)

天神山に菅原道真公(天神様)を祀る神社があり、諸田家のウジ神だ
った。

十五、六班の子供が主体になって、毎戸回ったとえ十円でもお金や
蚕の網・マブシ・ザルなどまで寄附してもらい、くじを作って参詣人に
ひかせて景品にしたり、菓子を買って配ったりする。社の中には炉があ
り、炉の火に当たりながら祭り番をする。(高平)

三月二十五日が天神様のお祭りだが、特別の行事はない。村中の子ど
も全員に鉛筆二本ずつと、オミゴクをくれる。(上古)

四月

役がわり(一日)

村の公職一切のひきゆずりの日。(上古)

春祭

白佐波神社の春祭りは三日で、区の役員、公益社の役員、祭典係、氏
子総代等が神社に寄って、神官に拜んでもらって祭典を行なう。祭のお
札を各戸に配る。祭典係がのぼり旗を区の上下に立てる。神社で祭典が
すむと、公会堂に寄って飲食する。神楽や獅子舞はもとからしなかつ

た。(高平)

四月三日が春祭りで、武尊様とお諏訪様をいっしょにまつた。竹の
樽を二本と赤飯をお供えする。赤飯は村中米を集めてつくり、参詣人に
包んでくれた。これらの世話は祭世話人がする。祭世話人とは組単位で
まわってくる。(岩室)

神社合併になってから四月三日が春の祭りになった。

久保組は二荒さん、塩ノ井組が諏訪さまで、前の日に神社のそうじを
し、のぼりをたてる。タニノボリというもので、以前はのぼりが多かつ
た。おこわをふかし、子どもにはオミゴクを出す。今は区から三千円の
お金が出ており、青年団が演芸会をし、諏訪社には露店も出る。(上古)

四月八日

四月八日はお釈迦様の生まれた日で、寺で甘茶をくれる。(高平)

区長タンスに誕生仏があり、それを出して区長宅の縁先に飾り甘茶を
汲みかわした。(岩室)

この日赤城山へ登る人が多かった。娘や若衆がつれだって、百姓の春
の慰安旅行のようであった。(岩室)

お寺へお詣りする人もある。子供の時はお釈迦様を毎年した。(尾合)

八日はおしやかさまの日、大日堂で甘茶をくれる。
村人は皆山登りをした。赤城山には、尾合から登った。迦葉山に登り
天狗の面をつけて帰ってきた。蚕によいといわれている。(下古)

水神祭(十五日)

祭のセキザライをして、道ぶしんもする。

以前は、水源地の水神様を祭り、各戸から米を少しずつ集めて甘酒を
作り、祭典係が参詣者に飲ませた。

秋もしていたが略した。(高平)

水上の水神様を祭る。高平を通る上水道は沼田城のお堀の水にするた
めに引かれたもので、この村の人には使用する特権が認められていた。

水源に水神宮の石宮が祀られ、水番が二人ずつおり、祭りには甘酒を作
って出した。

現在の水道が昭和三十七年にできるまでは、この上水道を水汲み場か
ら手桶に汲んで飲料水に使用していた。井戸は深くしないと出なかつ
た。(高平)

敬老会(二十五日ごろ)

公会堂に七十歳以上の老人を招いて、桜の花見をする。青年団が余興
などを催し、桜の枝を伐ってきて飾りつけたり、茶菓子を出したりし
た。記念に茶碗をくれた。(高平)

苗代かき

四月末に苗代をかく。小正月にとつておいたケーカキ棒を水口に立て
る。その晩、ドロツカイ、あるいはカキイレガイという小豆粥をつく
る。(下古)

五月

八十八夜

内祝いで、家ごとにうどんか何か作って祝う。(高平)

春祈禱

五月中ぐらいいに、特別に頼んで希望で神道さんにやつてもらう人がい
る。(上古)

節供(五日)

ヨモギとショウブ

男の節供、鯉のぼりを立て、ショウブ湯を立て、ヨモギとショウブを
軒にさし、流行病予防といっていた。ショウブ酒ものんだ。(岩室)

旧五月五日にする。よもぎとしょうぶを軒にさす。またしょうぶで鉢
巻きをすると、一年中頭を病まないという。(平出)

四日の夜、よもぎとしょうぶをとってきて風呂に入れて入る。このし

ょうぶは捨てて、新しいのを軒にさす。これをさしておくとき、鬼、悪魔が
家に入らない魔除けになる。(上古)

節供。初節供には、嫁の里から、そめぬきののぼりを贈る。のぼりに
は、もらい方の紋が上に、くれ方の紋を下に入れる。おかえしには、柏
餅、ヒダラするめを贈る。菖蒲湯をする。

軒によもぎと菖蒲をさす。鬼から隠れるため、また大食いをしないカ
ミさんをもええという意味である。(食わず女房をもらって喜んでいた
が、五日の節供のボタ餅を、頭の口につめこんでいるのを、梁に隠れた
夫が見つける。夫は、女房を桶に入れて捨てに行く途中、女房は藤づる
を伝わって逃げ、よもぎと菖蒲の間に隠れたため助かったという。それ
から軒によもぎと菖蒲をさすようになった。——話に錯綜あるか——採
集者)

万才、獅子、ゴゼが家々にまわってきた。

妊娠しているとき、菖蒲酒を飲むと、鬼子をはらんでいたときは必ず
流産する。(下古)

初節供

旧五月五日になるとショウブとヨモギを軒先にさして飾り、ショウブ
湯をたてていた。

初節供には、鯉のぼりや吹き流しを竹竿に立てる。以前は武者絵のの
ぼりが多く、最近になって内飾りや五月人形がはやってきた。

男の子の初節供には、鯉のぼりや五月人形を贈る。お返しとしてお菓
子を作った。柏の葉に米の粉にあん入りの餅を作って包み、ふかして作
ったお菓子を重箱に入れて配った。最近には店に頼んで作る。(高平)

男の初子に吹流しや、鯉幟りを贈る。村の極めで長男長女だけになつ
たのである。

屋根に菖蒲と餅草をさす。(尾合)

初子にはのぼりや鯉のぼりをおくる。お礼としてはかしわ餅をお返し
にする。

五日の節句は、ムコ、ヨメのお客にゆく最終の日になっている。

(上古)

迦葉山参り(八日)

五月八日にゆく、赤城へ行く人も少しいる。(上古)

六 月

ヤキヘガシ(一日)

正月の供え餅を十七重ねも作って方々に供えたものを、氷らせてから乾かすとバラバラの水餅になった。それをヤキヘガシの時に焼いて食べる。(高平)

コウリモチは六月一日、百姓は氷を食べられないので、この日に正月のお供え餅を氷らせておいた餅を食べた。(生枝)

ヤキヘガシは旧七月一日。地獄のかまのふたをやきへがすとて、タラシヤキ(じりやき)を作る。(平出)

正月の餅を水に浸して、しょうぎに載せて氷らせておき、六月一日に食べる。殿様は氷を食うが、百姓は餅を食う、といっていた。(平出)

山の口の日には、お正月のお供えもちや、寒ざらしにしたもちを、うどん粉とまぜてヤキヘイガシにして食べる。

山へはお供えを焼いてもって行くと蛇除けになる。(上古)

山の口開き

年によって異なるが六月上旬、区長がその年の草ののびをみて山の口開きを告げる。これまでは草を籠で刈ってくるのはよいが、馬にまらいつけてくるのはよくないといわれている。この日から一斉に馬を引いて草刈りに出かけた。このとき蛇にかじられないようにと、正月用のお供えを氷らせたものを焼いて食べた。この水餅は粉を混ぜて焼餅などにした。(岩室)

六月一日を山のくちといひ、この日から入会山の草刈りが始まる。コ

クソ(蚕糞)だけが肥料らしいものという中では、山の草は大切な肥料で、毎日行くようになる。(上古)

農 休 み

他の地区では六月一日ごろが農休みになるが、上古語父ではやらない。谷を境にして、久保組と塩ノ井組との農作業の進みぐあいがちが、休みの日が一致しなかったためだという。(上古)

休みだんご

春蚕のシジ休みにつくって蚕影様に進げた。この他蚕のときは上蔭祝いに赤飯をたいてあげた。(岩室)

アキア様(十五日)

六月十五日がアキアサマのお祭り、火伏の神である。(上古)

八丁ジメ

夏越しや八丁ジメは全く作らない。(高平)

七 月

釜の口開き(一日)

七月一日で、墓そうじの日。(岩室)

前は七月一日に釜の口あきと云って、オトラシヤキを焼いた。ヤキヒガシとも云った。小麦粉を水で柔かくこねて、ホーロクにたらし焼くのである。この日地獄の釜の蓋があいて亡者が娑婆へお客に来るといふ。昔は釜の口あきから盆迄に死んだ人は摺り鉢をかぶせて埋けた。(尾合)

(尾合)

半 夏

「ハゲンに梅をもげ」といい、それ以前には「ハゲンが来ないから梅を食べてはだめだ」と禁じられた。(高平)

七 夕(七日)

笹竹に色紙を切って川の名を書いたり、網を作ったりして飾りつけて

立てる。別に供え物はしない。翌日流す。

子供は川へ水浴びに行く。うどんやそばを作って食べる。最近はおま
り盛んでない。(高平)

七夕には「七回ごはんを食べて、七回水を浴びろ」という。(高平)
新竹に川の名を書いた短冊を吊し、七回水浴びしろなどという。女
の人は人に見られないよう朝早く川の水で髪を洗えともいわれた。

(岩室)

七夕の竹の飾りは六日の晩作り、七日の晩川へ流す。七日の朝は川で
女の人は頭を洗う。朝早く洗えば何もつけなくとも汚れがおちるとい
う。昔はカベをつけた。(尾合)

七夕は旧七月七日。「七回水をあびて七回ごはんを食べる」などとい
ったことがある。最近では忘れてしないことがある。(平出)

昔は旧でやったから七月七日に七夕をした。ささ竹をたて、短ざくに
切った色紙をつるして軒にたてた。

この日には、新しいゆかたをつくり、茶の間に綱をひいて、その上に
かけて七夕さまにあげた。

竹は川に流したが、子どもたちのおもちゃで、遊びに使ったのもあ
る。(上古)

七日には水を七回あびて、七回ご飯を食べる。(下古)

ガキの首(十六日)

七月十六日は、ガキの首も許される日だといって、奉公人の休みにな
る日で、若い衆たちも思い思いに遊びに出かける。(上古)

夏祭り

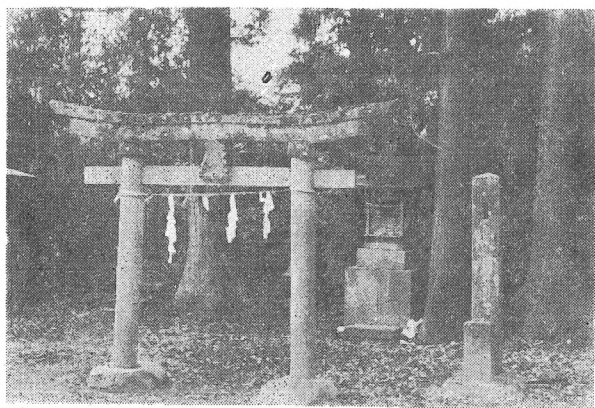
八坂神社夏祭り(二十三日)

白佐波神社の南側にある須賀大神社(八坂神社)の夏祭りには天王様
のダシ(一台)や御輿が出てにぎやかだった。今は万灯を飾った御輿を
出して村中で祭る。御輿の鳳凰の口ばしに、その年にできた稲の穂を祭
世話人が見付けてきてくわえさせる。初物のキュウリ・ナスなどの野菜



右が祇園の万灯のハナ
左が春祈禱のご幣束(高平)

(関口正巳撮影)



須賀大神の石宮(高平) 7月23日祇園に祭る

(関口正巳撮影)

を供えて豊作を祈る。

(高平)

天王様(二十二・三日)

七月二十二・二十三日

子供が天王様の御輿をか
ついであるいた。中学生
が世話をし、毎戸廻りお
賽銭をもらって集め、菓
子などを買って分けた。
次第に学用品などとなっ
た。このとき、杉御輿は
川へ流した。(岩室)

祇園(二十三日)

七月の二十三日に神社
でやる。神輿を出す。御
飯屋を作りダシを出して

神輿を出した事もあった。今は青年が少なくなり、とても昔のような事ができなくなった。尾合上が少なく三十軒位、下が大きく六十軒位ある。一米位高く壇を作り、側は養蚕籠に筵をつけて屋根を作った。

現在は青年は男女で十五人しかない。(尾合)

二十日すぎということでは一定していないが、二十三日ころが多く八月一日になったときもあった。

小麦のとれる時期で、新しいうどんがつくれる。お祇園までには作物の手入れを終らせろといった。

ミコシ、マンドウというダシを出す。ずいぶんあばれたこともあるというが、大正ころあばれてからは大さわざはない。そのときは沼田の警察から三、四人来たと思う。ミコシの田の草とりは年中のことだ。

(上古)

祇園には子若連の神輿が出る。大人用の御輿もあるが、今は希望があれば出す程度である。大人は神社によって、御神酒をいただく。

ドウギョウバライ。祇園の翌日、オサイ銭の処分をし、食事をしたり菓子を買ったりする。昔は子若連の世話係(三人)の家でやったが、今では公民館で行われる。(下古)

風 祭(二十三日)

祇園とかねて必ず行方。御幣を切つて神社の一番高いカシ(もとは杉)の木上につける。台風よけの祈願である。(下古)

愛宕神社の祭(二十四日)

夏祭りの翌日に祭るが、仕事を休むだけである。ご神体は白馬に乗った武人像である。(高平)

ここは昔、石段があつて岩だった。三好清海入道と佐渡入道の二人がいたが、真田幸村が連れていったという。もと小野家のウジ神で、二十四日に祭る。この日は蛇やマムシにかまれるから山にはいるなという。

(高平)

八月

八海山(一日)

竿の先にはだかろうそくをつけて庭に立てると、新潟県の八海山まで火が飛んで行くといわれた。(高平)

八月三十一日は、庭先きに竿の先にローソクをたて火をともした。これは越後の八海山に火がとどくようにとって高くした。(岩室)

八朔の前の晩(七月三十一日)長い竹のウラに百奴ローソクを立て火を燈し、庭の危くないところにたてる。八海山にあげるといふ。(平出)八海山は八月一日が祭りで、夜高い竿の先にちようちんに火をつけた。四十年くらい前のこと。(上古)

八海山には、さおの上に灯ろうをつけ、越後のほうをむけて、なるべく高く立てる。(下古)

九月

二百十日(一日ごろ)

「風の当り日」として恐れたが、別に行事はしない。(高平)

一日は風祭りと呼称し、百万ボンデンを杉のてっぺんに吊した。このボンデンは半紙百枚ぐらいつけた。(岩室)

大風の吹くときには、竹の棒の先に鎌を立てて、風を切つて防ぐ。昭和の初めころはさかんにやった。(上古)

盆(三〜六日)

盆の日取り

盆は今までに三回も変つてきた。以前は八月十三日〜十六日だったがその後、九月十三日〜十六日にしたこともある。現在は九月三日〜六日にしている。農作業の都合で、ちょうどよい時を選んだものである。

九月三日から六日まで、もとは九月十三日から十六日までであったが養蚕の關係で早くなった。(岩室)

昔は七月十三日に迎え盆をした。明治末ころまでのことで、養蚕などの農作業の關係で大正ころには九月十三日となり、最近十年くらい前から九月三日にするようになった。(上古)

迎え盆(三日)

花・水・線香・提灯・松ヒデを持って墓場へ行き、松ヒデに火をつけて迎え火とする。墓参りをして墓に花・水・線香を上げる。提灯に松ヒデの火を移して家まで盆様を迎えてくると、カド火(松ヒデ)をたく。家に入ると盆棚の灯明にその火をつける。(高平)

盆様迎えには、観音寺に火をもらいに高平、岩室からも来た。新しいちょうちんにローソクをつけて寺からあかりをつけて行った。(生枝) 門火をたいて迎える。寺へはいかない。個人々々墓へ迎えに行く。

(岩室)

お盆は今は九月にする。お盆迎えはお墓へ行って、入り口で松のヒデ五、六本を燃して仏様を背負って来る。その時は茶の間から入る。

(尾合)

迎え盆はお墓に行く。提燈等を持って行き、お墓でヒデをもす。提燈に火をつけてくる。「オジイサン、オバアサン、むかえに来たからイグペーヤ」などという。門で門火をたく。(平出)

夕方、世帯主(或はあととり男)が盆ちょうちんをもって、墓まで迎えに行く。「むかえにきました」といって仏様を背負い、火をもらって来て、その火で門先の石の上で門火(ヒデ)をたいて迎え盆棚の前でおろす。

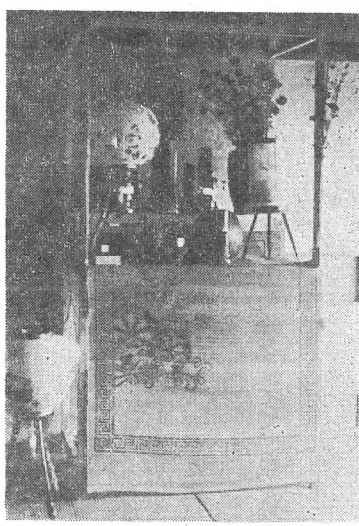
迎え盆の朝はおほぎをつくる。(下古)

盆棚

棚を作り盆ごぎを敷いて位はいを並べる。前に竹を二本立て繩を張つ

て、そうめんを掛けてたらす。

供える物は、ナスの牛・キュウリの馬(トウモロコシの毛で尻っぽを作る)スイカ・トマト・ぼた餅・お洗米・ナスを刻んで里芋の葉の上にのせた物などを供える。(高平)



新盆棚(高平) (関口正巳撮影)

新盆のときなど大工に作らせる。新竹を四隅に、繩を棚にまきそれに竹枝、ソウメンなどをかける。無縁仏は下にかざる。膳のかわりに芋の葉をすいて、その上にお供物を進げる。盆華は毎年、盆ごぎは新盆のときを買う。(岩室)

盆棚の下には無縁仏がいるので、供えものをする。また盆棚にのらないで、仏壇にいて留守番をする仏様があるという家もある。(平出)

仏壇の前でなく奥座敷に盆棚をつくる。ゴザを敷き、山から取ってきたアワバナ(盆花)を柱につけたり花びんにさす。

盆棚にはキュウリ馬をつくり、その馬のえぎとして、ナスの細かく切ったものを供える。そのほかに、スイカやトウモロコシを供える。

無縁様は棚の下に飾る。(下古)

ナスもキュウリもとつて、(ヘタ)を上に向けて馬をつくる。頭を下げて作ると、ズを下げている勢いの悪い馬ということになる。(下古)

盆花

ヒエ・アワの花に似たヒエ花・アワ花やカルカヤ・水はぎ・ききょうを供えた。取る場所は、ハツキユウという地名のところ。(生枝)

盆花は山(高平山)からとって来た。女郎花・男郎花・桔梗・百日草などを盆花という。(尾合)

盆 札

寺へ盆礼に行き、寺の盆棚にお金や線香をあげてくる。(寺へは盆・春秋彼岸・年始と年四回詣でる。寺からは年始に各家を廻るだけ。)

(高平)

すり鉢

盆前に死んだ人にはすりばちをかぶせる。盆で仏様が皆来るというのに、逆に行くというので、いじめられるのでそれをふせぐためである。

(下古)

盆 踊り(三、四、五日)

空地にやぐらを組んで、ハナ(寄附金)を集めてやる。八木節などで踊る。(高平)

五日は盆踊。神社でやぐらを作って踊る。八木節もする。(下古)

新 盆(三日、五日)



盆踊りのやぐら(高平)
九月三、四、五日に踊る。
(関口正巳撮影)

新盆は家の盆棚の一段下に置くようにする。(別の棚は作らない)

白張り提灯

長い杉の木の梢の方を残して皮をむき柱として立てる。それに白張り提灯を吊り上げるが、杉皮で屋根もふいておく。これは二、三日前に組の人も手伝って新盆の家で作るもので、これを上げることにより、新盆をすることに村人ががんばく(気づく)という。三日、四日の夕方、白張り提灯に火をともし。(高平)



新盆提灯(高平)
庭先に白張り提灯を高く掲げ盆の十三、十四日にともし。
(関口正巳撮影)

百八灯

新盆の場合、親戚、近所の人によって迎える。百八燈をつける。これはしのを割った先にヒデかローソクをつけて、百八本のうち一〇〇本は途中に立てて燈し、八本は半々の四本ずつ束ねて、これを墓に立てる。

(平出)

アラボンは迎え盆の日にする。

篠竹の先に松の根からとったヒデをつけたものを百八灯分つくる。その中の八本は、墓のまわりにたてるもので、一本の竹に八本のヒデがいる。

アラボンにあたる日には「アラボンで灯りをつけに来てほしい」といって組うちや、近親の人を招ぶと、百八灯の用意をし、これをたてたり

新盆送り（高平）（関口正巳撮影）



新盆送りに行く組の人や親戚一行。わら人形、水、白張提灯、百八灯等を持参する。



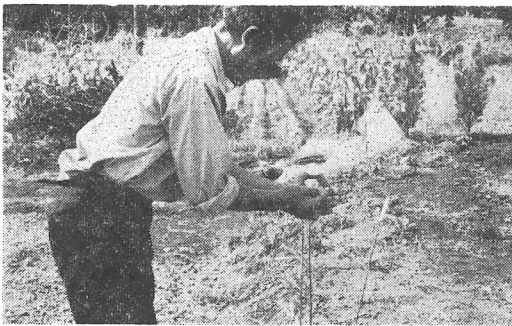
新盆の百八灯作り。組の人がシノ竹の先に迎願寺ろうそくをつけて作る。



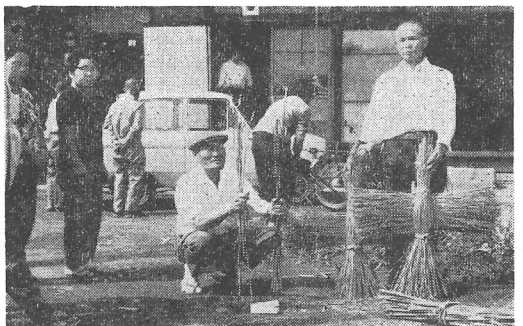
新盆の送り火。百八灯・わら人形・白張提灯等を墓地の入口で燃やす。



新盆のわら人形作り。組の人が寄って、麦わらをたて・横に組ませて二体作る。



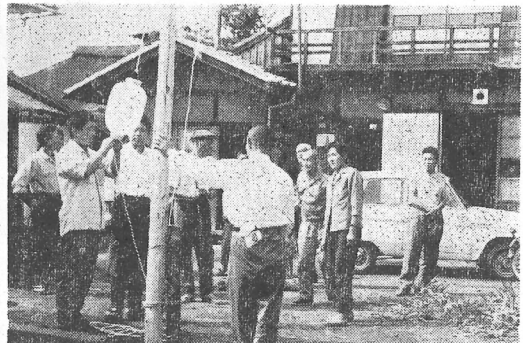
墓地の百八灯に火をともし墓参りに行く。



新盆の百八灯(左)とわら人形(右)



新盆の墓。新盆を送ると百八灯をはずして燃やす。



新盆の白張り提灯。組の人がおろして新盆送りに持参する。

してくれて、墓参りをした後で灯りに火をつけてくれる。アラボンにあたる仏が、初めて道なので道を迷わないようにうんと灯りをつけて仏を案内するんだという。

迎え盆には家中みんなで行って灯りをつけてくる。子どもが死亡したときには親は行かない。

アラボンに行くときは、ちょうちん・線香・ろうそくなどを買って持ってゆく。(上古)

新盆の家では一日早く五日に送り盆をする。もとは組の者が四日に集まって百八灯とわら人形を作ってくれたが、最近では五日に送る前に作られる。

百八灯は前はオガラに付木や松ヒデをさしたものを百八本作ったが、現在はシノ竹を材料にして、先に仰願寺蠟燭をつける。(数も少なくする)八本だけ大きいものを作り、墓のまわりに四角に立てる。百本は家から墓までの道端に立てるが、今では墓地の近くに立てている。(高平) わら人形

組の人が麦わらを使って「大」の字の形に足を開いた人形を二本作る。これは赤鬼・青鬼だという。(高平)

新盆見舞

新盆の家へ、近親者や組の人が迎えた晩に、お金包み・干しうどん(五把・七把など奇数)ふなどを持って見舞に行く。(高平)

新盆送り

五日一時ごろ、近親者や組の者が新盆の家に寄る。そこで用意しておいた篠や麦わらで、百八灯とわら人形を作る。支度ができると、白張り提灯をおろし、屋根もはずして持ち、水・花・線香・蠟燭などを持ってそろって墓地へ送りに行く。

墓地の入口の道でわら人形を立てて火をつける。白張り提灯やその屋根もいっしょに燃す。百八灯を立てて火をつけながら墓へ行き、百八灯のシノ竹もぬいて燃やす。蠟燭も箱ごと火にくべる。



新盆の墓(高平)
百八灯を方形に八本立てる。
前方に門牌と六地藏が見える。
(関口正巳撮影)

墓の上に四角に八本のシノ竹を立てその蠟燭にも火をともし、各自水をかいたり花を供えたりして拜む。拜みおわると、シノ竹は取り払ってしまい、送り盆が終了する。

終ると家に戻って、近親者や組の者はごちそうになる。(高平) 寺にはほとんどいかない。組の人や近親者が新盆参りにくる。送り盆のとき百八灯をたてた。百八灯は、古くはヒデを細かにし、オガラにつけたが、その後付木を用いるようになった。家からたてはじめ、墓まで順にたてる。これを墓参りにいきながら順に抜いていった。この仕事は組の者の仕事とされ、二組も新盆があると昼過ぎ早くはじめないと忙しかった。(岩室)

送り盆(六日)

盆棚をこわし、里芋の葉にのせた供え物や竹などを三本辻に置いて線香たてて拜んでくる。送り火はカド火をたく。松ヒデを石の台の上のせて、カドで燃す。(高平)

送り盆には、盆棚と供え物を墓地に持って行く。「送り出すのが遅くなると盆様が泣く」という。新盆は一日早く五日に送り出す。古い盆は六日。(生枝)

送り盆は、十六日の夕、新盆の仏様は十五日に送るが、新盆の家でも

古い仏様は十六日に送る。新盆の時は百八灯といって家から墓地迄百八本の篠の細い棒を立てその上に昔はヒデを、中頃はツケ木を、今ではコウガンジ(仰願寺) ローンクを立てて、送り盆の時、一つずつ、家の方から火をともし、仏様を送ってゆく。又組中の人がカンカンを叩いてお墓迄送る。百八灯の燃え残りは後にまとめてお墓で燃す。

お盆にそなえた胡瓜、茄子の馬、里芋の葉に胡瓜を細かく切ったの、葡萄・トマト・竹・ミツハギなど一緒に墓へ送る。(尾合)

迎え盆は特別には墓へ行かない。キエウリ馬、ナスのオカズ等のおかざりを三本辻に出す。(平出)

送り盆。朝、線香を持って送って行く。遅れるとエンマ様におこられるので、早い方がよい。

盆棚につかった竹、供物は、線香と一緒に共同墓地へ持って行って、線香をたく。

「お盆、お盆とただ三日、くされ彼岸が七日ある。」という。(下古)

カマの口あけ(六日)

正月と盆の十六日は「地獄のカマのふたをはぐ日」で、風呂もわかないで仕事を休ませる。(高平)

ハッサク(旧八月一日)

家でできた作物・粉などを持って、嫁・婿が里へハッサク礼に行く。赤飯にうどんか、煮しめを作る。(高平)

今はやらないが昔は旧の八月一日に赤飯をふかし、嫁、婿は八朔礼に行った。(尾合)

明治末ごろはよくやった。

嫁は赤飯を重箱につめて実家へ八朔礼にゆく。だんなさんは一晩泊り、嫁の方は二、三日泊って来る。(上古)

八朔礼は新暦にかわっても、旧でやっていた。赤飯をたき、二親丈夫なうちは毎年もって行く。(下古)

夏ぶるまい

秋蚕でも取れた休みには嫁は親もとへ「オフルマーに行つて来い」といって、米を持ってお客にやられた。秋ぶるまいもあり、年二回のふるまいがある。(高平)

武尊祭(申の日)

九月初申の日を祭日とし、岩室のはじかき祭りなどともいった。この日は粟などの餅をお供えのようにまるめて分けてくれた。その粟などは、その年の作柄により一升を八ツ取、十個取りにしようなどときめた。それは家の財産に応じて出したりした。もとは、神社のテスリの上に上る人は中村・松井・岡村三氏に限られていた。この進ぜたお供えを細かに切つて酒の肴にし、残つたのを参詣人に投げて与えた。この日の餅の出し具合により、その家の財産がわかるなどともいい、縁組みの参考にもされたという。(岩室)

氏神祭(九日)

九日九日に各氏毎にまつた。

岡村氏は甘酒をつくつたが、今は米を出しあつて赤飯をふかしてまつた。

中村氏は、近くの二軒が世話をし、松井氏は九月十六日にまつた。

(岩室)

十五夜(旧八月十五日)

まんじゅう・だんご(米の粉)など、丸い形の物を作り、重箱に入れて供える。大豆・里芋などをいずれも葉つきのまま洗つて、重箱や箕に入れて供える。これらの供え物は庭の真中へ台を出して置いたり、縁側へ出して置いたりして、お月様へ供える。子供たちが回つてきて、供え物を取るが、家の人は縁起がよいといつて喜ぶ。子供が取らないと「どうして今年の子供が手をつけないか」と、張り合いが悪るがる人もいる。

(高平)

各戸毎にススキとオテマル・豆・里芋をあげ、子供達はそれを棒できして下げてあるいた。(岩室)

十五夜、月に上げるものは、ここでは餅をついて、お供えにして箕に入れて上る。一種にスキと豆を上る。餅は八幡様へ一度上げて、他人様の上げたのを頂いて来て、それを牛とか馬とかに食わせる。昭和五、六年頃迄は子供は自由に活動して葡萄をとったり、お供えをさらったりして逃げたものである。十五夜の遊びはする事になっていた。(尾合)
旧暦の八月十五日に行なう。

里いもの年とりといい、さといも・大豆と、すすき五本をとってミの中に入れて供える。オマル(団子)をつくって進ぜるが、だんごを盗むとエンギがいいといわれる。(上古)
十五夜(旧) 里いも、大豆、おそなえ餅を「み」の中に入れて庭に飾る。

陰のものだからと線香をたてる家もある。(下古)

彼岸

墓参りや寺参りをするために、親類を回る人もいる。(高平)
春彼岸と同じにする。(上古)
彼岸には法事をする。(下古)

十月

秋祭り

秋祭りは十月一日に春祭りと同様に祭る。(岩室)
神社へ村じゅう(尾合)が集って神主は沼田の金子安平氏(都合のわるい時は平出の神主)が来て秋祭りをする。お祭りには饅頭を投げる。今はこの饅頭は区で町から買ってくる。味噌つけ饅頭の味噌のつかないのを投げる。この外、村中十ヶ班の組毎で一鉢その外役員が出て計十五鉢の赤飯を鉢ごと投げる。そのおこわを鉢ごと受けとって、境内を逃げまわる。境外には出られない事にして、とりっこをする。大騒ぎとな

る。とれない子供にはわけてやる。「ヤアーヤードリ」とか「手づかみ祭り」とか呼んでいる。この騒ぎ祭りを一度やめた事があったら、流行病が入って来たので戦時中にもやって来た。(尾合)

鎮守の秋祭りは春と同じ。(上古)

一日が秋祭、鎮守様(諏訪神社)の大祭。沼田から神主を一人たのみ村から一人神主(天理教)が出て玉串をささげ、五穀豊穰のお礼をする。そのあと、御神酒を飲む。祭典伍長が、幟をあげたり、祭の世話をする。

氏子総代(以前は区長が兼ねたが、最近は選挙でえらぶ。任期三年)三人が神撰物(三升で二重ねのおそなえ)を氏子にわけする。また甘酒をつくり、村中にふるまった。二、三年前までつくった。

この、オスワ様は、白沢の村社で、戦前は、役場から幣帛料をもらい、祭には小学生全員が参拝にきたものである。参拝者全員に甘酒を飲ませた。

オスワ様は蛇の神様である。(下古)

十三夜(旧九月十三日)

ぼた餅を二重ねにして重箱に入れ、脇へ大根二本(葉つき、洗ったもの)を置いて、お月様に供えるため、縁側か庭へ出す。子供が回ってきた。(高平)

十五夜と同様だが、お供え物は、大根とオテマルだけ。(岩室)

十三夜は十五夜と同様、二階とか縁側とかに箕にお供え餅を入れて進める。(尾合)

旧暦で、大豆の年とりという。

だいこん・くり・ぼたもち・だんごなどを供える。(上古)

十三夜(旧)には里イモ・大豆・おそなえの他に大根を必ず供える。「十五夜にはくもりでも、十三夜にはくもりなし」という。(下古)

十一月

神送り(旧十月一日)

神様が出雲の国へ出かけるので、朝早く「うつぶせの森」へ送りに行く。十月は神様がいないので縁組みをしない。(高平)

旧十月一日で、神様が出雲に行くというので朝早くお供えした。

(岩室)

神送り。十月一日には神様を出雲に送るといって神社へ御参りをす。これは個人々に御詣りする。おサゴと御灯明を上げる。(尾合)

赤飯をたいて鎮守さまにお参りにゆく。全国の神さまが出雲に集まるのでお見送りにゆくのだという。若い人には関係ない。(上古)

神様が出雲へ行くので、オサゴをもって神社へお参りに行く。(下古)

十日夜(旧または新十月十日)

ニューガラ様 十日夜は百姓の仕上げの豊年祝いで、新穀感謝の祝いだから、どこでも祭る。

宵マチの九日夜(ココノカンヤ)に餅をつく。手の回らない家は十日の朝暗いうちにつく。九日は「九日ソバ」やお汁粉を作った。

十日夜の餅は、新米で供え餅を二重ね作り、一升ますか重箱の中に入れて、表の庭のワラニユウ(ニューガラともいい、一本の杭の回りにわら束を積んだもの)の上のせお月様へ進めた。箕に入れる家もある。

(高平)

十日夜は十一月(旧十月十日)にまつり、ニューガラ様と称して庭先きに藁にゆうを三束でつくり、その上にお供えをあげた。

子供たちは、ワラ鉄砲をつくり「十日夜十日夜、十寝ておきるとおいべす講」「朝そばきりに昼だんご、夕飯食っちゃひっぱたけ」などと唱え藁つつをうってあるいた。(岩室)

十日夜は十月十日の夜、餅をついて、藁ニユウを作って、別に一つ栗

稗のニユウを作り一束にしてその上に十日夜の餅を一重上る。ニユウの神様に進ぜるといふ。元来旧でしたが今は新でやって月に関係なくなつた。藁鉄砲というものを作る。細い藁束の棒で尖端の穂のあつた方を環にしそこに手を入れ、この藁の棒で大地を叩く、大きな音がするので、ワラデッポウという。中に茗荷三四本入れるとよい音がするといわれている。子供のする事で、その時の唄「十日夜(トウカンヤ) 十日夜、十日過ぎればオイベス講」(尾合)

十日夜は旧暦十月十日。軒下にわらニユウをおいて、これをニユウガラサマと称し、それに餅を供える。みに入れて供える家もある。子どもたちは、

「十日夜 十日夜

朝ソバキリニ昼ダング

タメシクツチャア ブッタタケ

と唱える。(平出)

ワラデッポウ

新わらを束ねて、ショウガのからをしんに入れ、藤で巻いてしめるといい音がする。畑をワラデッポウでたたきながら、子供たちが唱える。

「十日夜十日夜、十寝て起きるとえびす講」(高平)

十日夜には子どもがわらでつぼうを作って、近所をたたいて回り「十日夜、十日夜、十寝て起れば、おいべす講」と大声で唱えた。わら鉄砲のしんには、ミョウガを入れた。(生枝)

十日夜にはすすきをたて、もちをついてお供えを進ぜる。ワラッポをつくってやる。

子どもたちは、ワラデッポウをつくって地面をたたいて歩く。もぐら除けにやるが、今の子どもたちは本気でやりたがらない。(上古)

十日夜(旧)は月に関係することなので旧暦で行う。

わら鉄砲をつくり、みょうがのくきを中に入れる。そうすると良い音がする。

もぐらをおこすといつて一晩中たいた。

「十日夜、十日夜、十日たてばおえべす講、夕飯くっちゃ、ぶつばたけ」使いおわったわら鉄砲は、はきだめにすてる。(下古)

えびす講(二十日)

えびす様が働きに行く日。えびす・大黒の像を机の上に出して、膳を作つて供える。ご飯を右に、汁を左にし、箸も左にした左膳を作り、頭付けの生イワシをそえる。宵祭り、夕飯を供え、家中で酒を飲む。(高平)

エビス講はエビス様を祭る。夜はそばを供え、朝はコガネメシというあわ(穀物)のめしを煮て上げる。これはエビス様が一番好きなもの。(生枝)

旧十月二十日、秋は夕恵比須、春は朝恵比須をまつた。お札は区長がくぼり、このときお供えする膳はタテ膳にした。(岩室)

正月にはたらきに出たえびすさまと大黒さんが帰つて来る日、供えものの中に、ありったけのもの(金)を出して進げる。貯金通帳も出し供える。

豊年祭りだろろうという年寄りもいる。(上古)

えべす講(旧十月二十日)のお札は新でもつてくるが、旧で祭る。おえべす講のときは、「おあし」を出さないで、夜ありったけの金をしんぜる。

お宮をだして、えべす様はえべす膳に、大黒様は普通の膳に、鯛・ケンチョン汁・米飯・おすましを供える。福の神なので、堅く行う。

えびす様は妻を持たなかつた。縁遠くなるのでえびす様に供えたものは子供にはあげてはならない。

えびす様は大黒様の軒をかりて住んでいる。(下古)

神迎 え(旧十月三十日)

神様が出雲から帰るので、朝早く「うつぶせの森」へ迎えに行く。(高平)

旧十一月一日、夜しんとしていると神様が帰ってくるので、にぎやかにシャンシャン馬の鈴の鳴る音が聞えるなどという。(岩室)

神迎えは十一月一日、神送りの時と同じ、御灯明上げて、お米上げる。(尾合)

一日の朝早く、新しいジョウリをつくつてはいて鎮守さまにお参りに行った。帰つてから神だなお灯明を上げた。神さまが出雲から帰つて来る日といい、赤飯をふかした。(上古)

旧十一月一日は神迎え。(上古)

刈上祝

刈上祝(旧)は十一月中に行う。稲刈りをして、家にとりいれてから行なう。鎌を「しのみ」の中に入れ御飯を供え、ケンチンか豆腐汁をつくる。(下古)

穴ツツサギ

麦蒔きが終ると、ぼたもちとか、うどんとかを作つてたべる。その祝を穴つづさぎという。(尾合)

秋ぶるまい

秋の取り入れが終つた休みに、親が生きている嫁は実家へお客に行き、二、三日も泊つてきた。嫁に行つた姉妹が幾人も来て、親類を呼んで赤飯・うどんなどをふるまつた。必ずしも持つて行つた食料でなく、一族が寄つて食べるのがお祝いだつた。(高平)

チュチュダンゴ(三十日)

米・麦などの粉(何でもよい)をこねて握り、三十cmほどのカヤの莖のウラに一個ずつさして、家の窓や入口の屋根にさした。だんごはげんこつ形の形をして、悪魔除けだという。

近所の子供がきて回り、取つてしまう。(高平)

ツジユウダンゴは十二月の寒いころ、朝鮮ピエの赤い粉などで、にぎりこぶしの形にダンゴを作り、萱の莖にさして家のトボロや窓にさして置いた。鬼や借金取りを追い返すためという。子供が回つてきて、二十

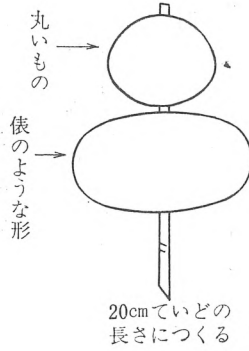
本も三十本も集めた。(高平)

十二月二十三日、チュウチュウダンゴ。窓や入口に、豆の木に餅をさして供えた。「鬼を追い払う金づち」と称して。近所の子どもが下げに来た。(生枝)

土穂団子は十一月三十日に豆木を削り、米の粉の団子をさして戸口にさす。鬼がきてこんな大きな手があるといつて帰ってしまう。だからできるだけ大きなものをつくれという。(岩室)

つじゅうだんご、こなし事(米の収穫の事)が終ると庭にこぼれた粒を掃き集めて粉にひき団子を作り、細い枝にさして、家の戸のあく処へさす。鬼の来るのをよけるといふ。今はうどん粉で作る家もある。十一月九日にする。(尾合)

ツジユウダンゴは朝鮮びえの粉をこねて、にぎって(オニコブツという)ゆでて、豆木にさして、トボウ口にさしておく。今はしない。日は忘れた。(平出)



ツジユウダンゴはいい米や、米せん機下のくず米など、いろいろの米を粉にしてダンゴをつくり、戸口に一本ずつ立てて歩くと、後を子どもたちが追うようにしてぬき歩いていった。

今はしない家がふえて来た。

(上古)

十一月晦日(旧)にツジユウダンゴ、にぎりこぼしの団子をつくり、カヤの木にさして、トボグチ全部にさす。鬼が来たらそれでたたくという。その晩、若衆がとりに歩く。翌朝その残りがあれば食べる。(下古)

十二月

川ピタシ餅(八日)

しない。(高平)

川浸り餅は十二月の八日に川の神様に餅を進げる。お供えの様に二つを重ねて進げるのもあり、ボタモチを上る家なども今はある。子供が川の災厄に会わぬという。(尾合)

白沢の中でも聞いているが、上古語父ではやっていない。(上古)
ダイマナク(八日)

目のある籠などをカイドへ出しておく。(岩室)

お事八日 十二月の八日はまた、お事八日ともお事じまいとも云った。(二月にもお事はじめといつてぼた餅を川へ進げる事が川場ではあった。)(尾合)

すいのうをサマ(小窓)にかけておく。日は忘れた。(平出)

お事じまいにはデエマナクとかいうものを防ぐために、メケエやスイノウのようなもの——カゴメのものなら何でもいので、これをトボグチに下げる。(上古)

八日はお事じまい。すいのうを戸外に出す。鬼よりもすいのうの方が目の数が多いので逃げる。八日餅をつくる。(下古)

すすはき(十三日)

十三日・十七日・二十三日などは日がいいので大掃除をする。まず、すす竹(竹ぼうき)を一本作る。すす竹はあとで棄てたり燃したりする。最近草ぼうきが多く、あとで揃えてドジ(土間)ぼうきにする。

最初に神棚を片付け、神様やお札を箱ごと庭の隅に出す。お札は西に向けるなどいわれる。

終ると、夕食にうどんなどの変わり物を作る。(高平)
すす掃きは十三日と二十三日は暦を見てよい日であるかないかを決め

なくても正月のことは差支つかえない。すす掃き、松迎えをする。

(生枝)

すすはきは十二月二十三日、この日にきまつて居り、日のよし、あしはいない。(尾合)

松迎え同様、十三日と二十三日は暦を見なくともよい、といって、それ等の日にした。ススハキがすむと竹の先をほどいて、それにおかゆなどを供えた。(平出)

この日にすすはきをする、暦をみなくもよい日になっているのだという。だから都合で十五日・十八日・二十三日のどれかの日にやってもいいという。

あずきめし(かゆ)か、イツツオメシ(米ゾッキともいう)ていどでお祝いをする。

スストリをすませるとそれから後はエンジの悪い話はするなという。

(上古)

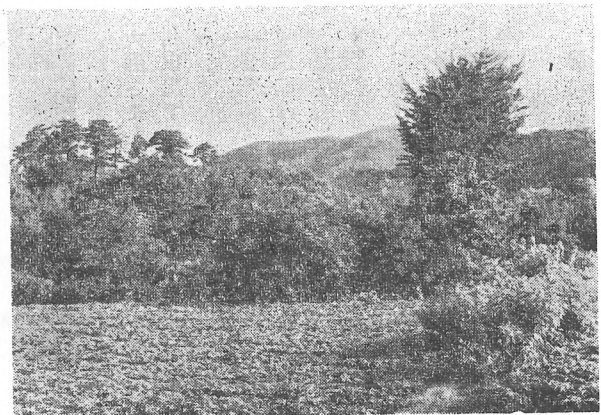
十三日は煤はき、お松迎え、松は小枝ならばどの山から切ってきても良い。

十三日に出来なかったときは、二十三日に仏滅でも大安でもかまわずに行う。

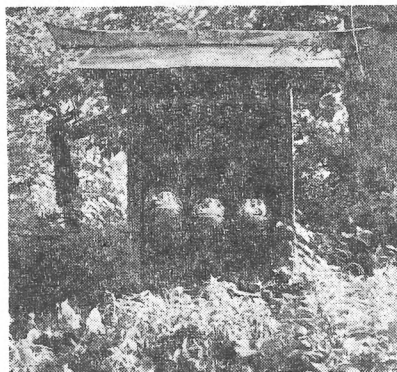
この頃から夜なべで、注連縄をなう。女はお注連をまたいではいけない。(下古)

屋敷稲荷祭(十五日)

樋口イッケでは「オボンデン様」という森に、六尺まっ角の氏神様の祠が祀っており、前方に「奉造立若宮、文禄四甲未年九月吉、高平村樋口五兵衛」と刻銘した家型の石宮を初め、明治七年銘の石宮等四基が立っている。ここは樋口イッケの屋敷稲荷様の総本家で、樋口馬太郎家の地所にあり、同家が総世話人になり、ほかの家は当番で世話人になる。祭の前日、当番が中心になり全員で「オボンデン様」のモリの草を刈り清掃する。



右の大イチョウの森が樋口イッケのオボンデン様
左の松山に天神様を祭る(高平) (関口正巳撮影)



樋口イッケのオボンデン様(高平)
左に氏神様の石宮がある。

(関口正巳撮影)

子供たちにもあまりを分けてやり、一同お振まいをする。

お参りして家に帰っ

てから、家の稲荷様

へ赤餅のオタキアゲと

頭付を供える。(高平)

戸ノ敷の鳥山イッケ

は、一か所に稲荷様が祀

っており、各戸には屋

敷稲荷がない。供え物

は赤飯・ヒシコにアブ

ラアゲを供える。

(高平)

祭の日には昼過ぎ三時ごろ、各戸から赤飯やヒシコ(頭付、煮干しを煮たもの)を重箱に入れて主人が子供たちを連れて「オボンデン様」のモリに集まる。樋口イッケの者が二十二、三戸寄るうえに、近所の子どももおぼれをもらいに行くので、にぎやかになる。

祠や石宮に赤餅・頭付二尾を半紙にのせて供えて拜む。そのあと



樋口イッケの氏神様(高平)
左に「文禄四甲未九月吉」
「高平村樋口五兵衛」
右に「奉造立若宮」

(関口正巳撮影)

稲荷祭は十二月十五日赤飯を作り、五日、尾頭付、豆腐を細かく切り、油揚と一緒に稲荷様へ上る。神様へ上げたお余りは家中してたべ

る。毎年藁のお宮は作

り直す。石宮の場合は棟に藁束を新しく立てて幣束を立てる。(尾合)

稲荷祭は旧十一月十五日。ただし小野組(イッケ)は旧十一月二十八日。現在では十二月十五日になっている。稲荷のお飯屋をつくりかえる。石宮の場合は、石祠の上部をわらでまいてしぼる。その日は赤飯をたいて、魚・豆腐・油揚を供える。(平出)

イナリ様の石宮を洗い、わらで飯宮をつくり、ゴヘイを新しくしてお祭りをする。赤飯をふかし、おかしらつき・とうふ・あげをイナリさんに供えた。供える人は都合で子どもでもいい。(上古)

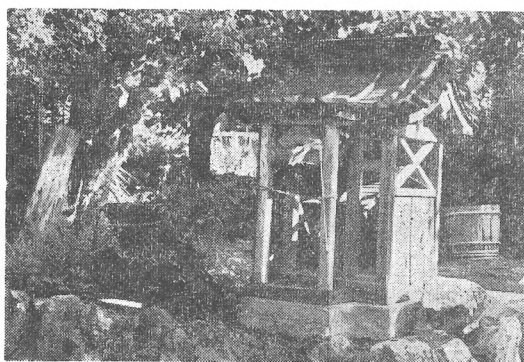
十五日は稲荷祭(屋敷祭) 個人持の稲荷様へお轎をたて、ワラツトッコに、豆腐・油揚・赤飯・オコジュをあげる。

藁屋根の祠は、山から木を切ってきて、新しい藁でつくりかえる。オコジュ、稲荷様の好物であるといわれている。腹の太い、鯛に似た魚で、供えるとき、手がちがうとしびれることがある。また、まじめにあげないと手がしびれるという。

魚屋から買うが、富山の薬屋が持ってきたこともある。(下古)

大師がゆ(二十三日、旧十一月二十三日)

デーシツケー十一月二十三日、太子様を祭る。小豆のかゆをおはちに入れて、長い一尺か、一尺五寸ぐらいのはしをつけて供える。(生枝) オデシゲーは十一月二十三日、長い箸を二組つくり(尺五寸位)これ



屋敷稲荷(高平) 右が本殿、左がおかり屋
(関口正巳撮影)

をくじいて家中の人が分けて食べる。虫歯除けという。

(岩室)

オデシコ、デーシ講ともいう。十一月二十三日にする。

お粥を作る。目のある物を庭に出す。つまり目籠などを竿の先にして立てる。(尾合)

大師講は十二月二十三日。

小豆がゆを煮て山盛りに盛ったものを、カヤの長い箸で食べた。これを食べると虫歯にならないという。(平出)

お大師さまのお祭り、あ

ずきがゆをつくり、お膳よりも長いカヤの箸で食べる。大師さまというのとはどんな人なのかはわからないが、子持山に腰をかけた利根川で足を洗ったという大きな男、コゼツチョウだという話もあるという。(上古)

冬 至

冬至にはなすの木を燃して、とうなすを煮て食べると寒さに負けな

い。(生枝)

トーナ(南瓜)の食いじまいの日といい、あずきがゆの中にトーナ

スを入れて食う。

トーナだけで煮て食べるのもある。この日にトーナを食べるとカゼをひかないといひ伝える。(上古)

歳末諸事

お松迎え

十二月八日過ぎにはじまる。十二月八日を正月のことはじめと称し、どこの山でも枝松をとって差支えなかった。(岩室)

もとは十二月十三日と日がきまっていた。十三日、二十三日は曆をみなくてもよい、といっていた。(平出)

すずはきの日にお松迎えをする。十三日にすずはきをした人はその日に、二十三日にした人は二十三日にお松迎えやオシメナイをする。(上古)

松かざり

一夜飾りはよくないというので、二十八日が多い。餅つきと同じ日にする。この日正月棚を吊し、松をつけ、大神宮様、おしら様など土蔵や便所、井戸などにも飾った。大ジメをする家はない。神様をまつてあるところは棒ジメをした。(岩室)

門松のお松ぐいはホウの木か真直ぐのナラの木などを用い、それに松を五本と三本結びつけ、それに竹もたてた。時には、オニウチ木を根本にする家もあった。

なお竹を横に渡したところへは、コンブ・ミカン・豆木二本など吊した。この横竹が雪でくじけるとよくないというので、雪おとしをした。戦後松ぐいは七尺以下ときめ、大きな木を伐らないようにした。(岩室)

一夜松はかざるなどいわれて、二十八日に松かざりをする。

正月のたなは、もとは必ず新しい松板を使ったが、現在は同じもの間に合わせてしまい、何回でも使っている。

門松は五〜六尺のものを使い、竹を切ってそえる。

トノサマは十五日にオカザリをするので、十三日にやったらトノサマより早いなあといわれたという。(上古)

桑原マケは門松をたてない。

昔、あんまり貧乏してしまつたご先祖が、毎日マキ切りばかりしていて門松のお松もとの間がなかつたので松をたてなかつたからだという。また、お正月だなをつくるのも忘れていて板も間に合わなかつたので、

とりあえず近くにあつたナラマキを切ってきて、それを割ってなわでつるして正月棚をつくつたという。それで桑原家はナラマキを割って正月だなをつくる。今は製材してとつておいて毎年使っているようだ。(上古)

歳神様

十一月下旬に沼田の金子安平氏(榛名神社宮司)のところへ区長が受領にいき、各戸に配布する。(岩室)

正月かざり

正月だなの前にするオカザリは、特別のいわれはないが、次のようなものをつくる。

ほしがき・みかん・こんぶ・するめ・いわし・半紙、その他として、さけ・ますをつくるすことが多い。(上古)

餅つき

一夜飾りは良くないという。米と粟の餅をつくり、粟米を上重ねる。四升臼を二人でつき、平均十二、三臼つく。のし餅なら一臼から八枚以上とれる。ナカダチは嫁の里へ持って行く餅。

米餅を臼がよごれないうちに一番先につく。次にアワ・キビ、そして最後に草餅をつくる。(下古)

二十八日に餅つきやお飾りをする。八は広がるからよい。(下古)

正月買いもん

タツイワのある人は、お正月買いもんにゆくときは昔からのしきたり通りのしたくをしてゆく。芝居の佐倉宗吾のような合羽を着て、刀をさし(現在はどうかわらないが)菅がさをかぶり、きやはん・たび・わらじばきで、背中に行李を背負って歩いてゆく。もとは往復ともそのしたくだったが、今は行ききの道中だけで、町につくと知り合いの店でしたくをとつてから買いものをし、帰りは自動車に乗って来るが、町の人がふりかえって見るといふ。(上古)

大みそか(三十一日)

ソバを夕食に食べる。火留めはしない。早寝すると白髪になるといい遅くまで起きている。(高平)

白飯に魚を添えた。早くねると白髪が生えるなどといい、夜おそくまでおきていた。この日は暮勤定の日で、商店ではおそくまでカケとりにあるいていた。(岩室)

大晦日には、麦ご飯を上げ「白髪めし」といった。(尾合)

大みそかのことをオモツツイという。お風呂に入り、みそかそばを食べる。キリ火で、トウシンに火をつけ、トウゲーにてともす。その晩早寝をすると、白髪が生えるという。

この晩、ニバツ(煮初)を鉢に盛って、これに箸を七ぜん半十五本を立てて仏様に供えた。オミタマ様に供えるという。このあとは正月十六日までは仏様には供えない。(平出)

ご飯を別に煮て、煮ただけ全部を膳に載せて供えた。日は忘れたが大みそかだったか、小正月だったように思う。それはネズミに供えると言っていた。(平出)

みそかそばをつくって食べる。現在はそばを栽培しなくなっているのうどんが多くなって来た。

除夜の鐘を聞くが、この頃から朝湯の用意を始めた。(上古)
年越には、みそかそばを食べ、ほとんど寝なかった。(下古)